

東山梨教育研究

第60号

東山梨教育研究編集実行委員会

東山梨教育協議会

も く じ

◎あ い さ つ	東山梨教育研究編集実行委員会		
	会 長	小 林 俊 彦 3
◎あ い さ つ	東山梨教育協議会		
	会 長	青 柳 俊 雄 4
◎学 校 研 究			
○小 学 校		 5
○中 学 校		 47
◎教育協議会研究			
○令和3年度 東山梨教育協議会研究の概要			
	研究推進委員長	広 瀬 竜 太 63
○教 育 研 究 部 会		 67
○ブ ロ ッ ク 交 流 研 究 部 会		 21
○特 別 委 員 会			
・児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会		 29
◎学校経営研究			
○小学校経営研究会	健康・体力部会	 31
○小学校経営研究会	情報教育・環境教育部会	 33
○小学校経営研究会	連携・接続部会	 35
○中学校経営研究会		 37
◎学校運営研究			
○山梨市学校運営		 39
○甲州市学校運営		 41
○全国教頭研究大会		 43
○関東甲信越地区教頭研究大会		 44
◎報 告			
○内地留学研修報告		 45
◎あ と が き		 47

以下 特別委員会報告

「東山梨教育研究第60号」の発刊に寄せて

甲州市教育委員会教育長 小林 俊彦

東山梨の教育研究の集大成であります「教育研究第60号」が、多くの先生方のご尽力により、ここに発刊されましたことに、心から感謝と敬意を申し上げます。

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症は世界において、今も猛威をふるっている状況にあります。新春を迎えてからは国内においても、変異株の「オミクロン」が異次元的なスピードで感染拡大している状況にあります。こうした厳しい状況下にあっても、学校においては、校長先生を中心に、「チーム学校」として感染症対策を徹底し子どもたちの学びを保障するお取組を全力で進めてくださっています。また、学びの保障とともに、学びの質を向上させ、子どもたちに「社会を生き抜く力」、「確かな学力」を身に付けさせるべく、GIGAスクール構想事業の具現化にお力添えをいただいております。本当にありがとうございます。

私たち大人でさえ、将来を見通せない厳しい時代を迎えています。しかし、そうした中であっても、目の前の子どもたちには、自分のよさや可能性を認識しそれを十二分に発揮して、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手になってほしいと強く願います。そして、その後押しを責任もって行うことが私たち大人の使命であると思います。さて、東山梨教育研究は、多くの先輩方が長年にわたり培ってきた教育実践を礎として進められており、今後も確かな歩みを進めていただきたいと考えておりますが、私は2つの点について留意していただけたらと思います。一つ目は、「子どもの貧困」の状況です。「2019年国民生活基礎調査」によれば、2018年の子どもの貧困率は13.5%で、7人に1人が貧困状態にあります。さらに、ひとり親世帯の貧困率は48.1%になっております。また、自治体による子どもの貧困実態調査からは、貧困状態にある子どもほど、家庭での学習環境や学習時間に恵まれず、小学校低学年段階から授業がわからないという児童生徒の比率が高いことが示されております。「誰も取り残さないGIGAスクール」と声高に言われる中で、子どもの「生まれ」による格差があったことも報告されております。コロナ禍において今、進められている学習の個性化・個別化が教育の格差につながったり広がったりすることがあってはならないと思います。二つ目は先生たちの勤務の現状です。2019年3月に、文部科学省より「学校における働き方改革に関する取組の徹底について（通知）」が発出され、その後、働き方改革に関する取組が全国的に進められております。しかし、近年、学校が抱える課題が複雑化・困難化する中で、学力向上や新学習指導要領への移行など、学習指導の充実に向けた取組が求められました。さらには、このコロナ禍です。ある調査結果では、教員による清掃・消毒作業によって勤務時間が長くなっていることが明らかになっております。教育の質の向上、教職員の健康保持のためには、それぞれの学校の勤務実態をふまえ、「働き方改革」を着実に進めていかなければなりません。こうした困難な教育課題を解決し、目の前の子どもたちの輝かしい未来を保障するために、私たちは今後も、保護者や地域、行政、関係機関との連携を深め、東山梨教育研究を推し進めていかなければならないと考えます。

結びに、東山梨教育と教育関係各位のご尽力に敬意を表し、益々のご発展をご祈念申し上げます。

あ い さ つ

東山梨教育協議会会長 青柳 俊雄

東山梨教育協議会の研究の成果を収めた「東山梨教育研究」第60号がここに発刊の運びとなりました。教育研究の高まりとともに昭和38年、創刊号が発刊され、以来60年という歴史を刻んできています。数多くの研究や実践が積み上げられ記録されてきたこの冊子は我々の誇りであり、宝物であると言えます。

さて、県内の各支部で行われているこの教育協議会は校長会、教頭会、教連の教職員が一堂に会し、授業を中心に理論研究で議論を重ね合わせ、実践を通してお互いに切磋琢磨しあいながら子供たちの教育のために力を尽くしていく会があります。いわゆる教育三者がお互いの垣根を越えて研究という土俵で教育を語り合う、他県には見られない全国に誇るべき組織的な研究体制です。

東山梨教育協議会の歴史を振り返ってみますと、昭和39年4月20日、設立総会が開催され50有余年の歴史がある協議会です。塩山南小に残る、その歴史を刻んだ東山教育研究創刊号は協議会設立の2年前より作成されています。初期のころの東山教育研究をひもといてみますと、創刊号冒頭の塩山中学校のページには「一人一人の子どもを生かしきる」とあります。「生かしきる・・・このことのためには外から生かしていこうとする力と、内から生きていこうとする強い力が、緊張呼応するのでなければなし得ない」と述べられています。

これは、現在における個別最適な学びの追究や、主体的に学ぶ姿に通ずることを考えると、改めて教育の不易を感じるどころです。

また、流行の面においては、新しい学校生活の模索や、GIGAスクール構想による教育のICT化が急速に進んだ年でもあります。ICTを活用した教育は今後避けては通れない大きな課題であると思います。それ自体が目的化しないよう配慮しつつ、しかしながら、ツールとして使いこなせるためのスキルを身に付けるために積極的に掴みに行くことも我々教職員には必要だと考えます。

社会情勢の厳しさから、教協の活動が普段通りにできないもどかしさを感じながらも、こんな時代だからこそ、できること、しなければならないことに積極的にチャレンジし、研究の歩みを止めない体制であってほしいと思います。

初期の東山教育研究に何度となく掲載された「光は東より、教育は東山梨から」という言葉の志をもって、今後の教育研究に一人一人が臨んでいただきたいと切に願います。

終わりに、本年度も東山梨教育協議会の様々な研究活動に対し、ご指導・ご支援をいただいた多くの関係者の皆様に心より感謝申し上げ、あいさつといたします。

学 校 研 究

小 学 校

加納岩小	・ ・ ・ ・ ・	5	神金小	・ ・ ・ ・ ・	29
日下部小	・ ・ ・ ・ ・	7	玉宮小	・ ・ ・ ・ ・	31
後屋敷小	・ ・ ・ ・ ・	9	松里小	・ ・ ・ ・ ・	33
日川小	・ ・ ・ ・ ・	11	井尻小	・ ・ ・ ・ ・	35
山梨小	・ ・ ・ ・ ・	13	勝沼小	・ ・ ・ ・ ・	37
八幡小	・ ・ ・ ・ ・	15	祝 小	・ ・ ・ ・ ・	39
岩手小	・ ・ ・ ・ ・	17	東雲小	・ ・ ・ ・ ・	41
笛川小	・ ・ ・ ・ ・	19	菱山小	・ ・ ・ ・ ・	43
塩山南小	・ ・ ・ ・ ・	21	大和小	・ ・ ・ ・ ・	45
塩山北小	・ ・ ・ ・ ・	23			
奥野田小	・ ・ ・ ・ ・	25			
大藤小	・ ・ ・ ・ ・	27			

自ら学び，自ら考える児童の育成を目指して
～指導と評価の一体化を目指した授業づくり～

I 研究の内容

1 研究目標

「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価の一体化を追究していくことで、「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す。

2 研究の内容

算数科の授業における「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価の一体化による「思考力・判断力・表現力等」の向上

3 研究の方法

- (1) 「主体的に学習に取り組む態度」について，本校のとらえを確認する。
- (2) 評価をするにあたって，前提となる指導を整理する。
- (3) 一人一実践で，指導と評価の一体化を目指した授業研究をする。
- (4) 授業カンファレンス資料を作成し，授業リフレクションを行うことで，成果と課題を挙げる。
- (5) 主体的に学習に取り組む態度についての学習会を開催する。

①山梨県総合教育センター

笠井 さゆり 副主幹・指導主事

廣瀬 雅美 指導主事

- (6) 全体授業研究会を行い，成果と課題を共有する。

①第6学年 算数科「比例と反比例」 深澤 一葉 教諭

指導助言：山梨県総合教育センター 廣瀬 雅美 指導主事

- (7) ICTの活用についての学習会を2回開催する。

①山梨県立大学国際政策学部

八代 一浩 教授

II 成果と課題

1 成果

- (1) 研究主題に向けて，授業研究を中心に行ったことで，先生方の実践から学ぶことが多く，指導すべき点と評価の視点を明らかにした板書計画と記録を中心に実践することができた。
- (2) 「主体的に学習に取り組む態度」の記録に残す評価に重点を置いたことで，ノー

ト指導を中心に自分の考えを書くことや他者の考えとの違いを書く等、書く力を付けることができた。

- (3) 「粘り強い取組」と「自らの学習を調整」しようとする姿として、何度も考えて取り組むこと、自分の考えをノートに図、式、言葉で表すこと、複数の方法で考えること、他者の考えを書き加えること、めあてに向けて精査することが挙げられるとわかった。

2 課題

- (1) 各ブロックで発達段階に沿った実践を中心としたため、他のブロックとの交流が少なくなってしまったので、全体授業研究会の指導案検討は、組織研究としての深まりをねらい、全体で進めるように、年間研究計画に入れていきたい。
- (2) ICTの活用について、導入されて児童が使用する前に、講師を招いての学習会を2回設けたが、ICT端末の活用が更に求められてきた。学校による使用頻度や使用方法に差が出て、本校も、教師による使用頻度や使用方法に差が出ている。本校として、使用頻度や使用方法に差が出ないように、具体的な活用方法の研修を年間研究計画に入れていきたい。

III 成果物

1 研究授業の指導案

- (1) 第6学年 算数科「比例と反比例」 深澤一葉 教諭 指導案

2 授業の概要及び振り返り

- (1) 一人一実践（算数科13本，理科1本，音楽科1本，書写1本）

3 研究目標における成果と課題

- (1) 算数科における「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価の一体化について、本校における成果（17点）
- (2) 授業改善，授業展開について、本校の成果（20点）

（研究主任 廣瀬哲也）

「主体的・対話的で深い学び」に向けた学びの創造

～ICT機器の活用を通して～

I 研究内容

1 一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施

本年度より本格的な運用となる一人一台端末を活用していくために、新しい端末操作の不安を払拭していく必要がある。そこで、スキルアップ研修会を実施し、基本的な操作方法から研修し、活用方法を探っていく。

2 主体的・対話的で深い学びを支えるICT機器を使用した授業実践

スキルアップ研修会で高めたスキルを授業で生かしていき、「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業づくりを研究していく。本年度は初任者研修授業研修会実習校としての指定を受けているので、校内研究での研究授業を初任者にも提供していく。

3 既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うための端末の活用

「学級力向上プロジェクト」や「八のつく日のふりかえり」等の既存の取り組みを、エクセルの共同編集やフォームのアンケートを活用することで、入力や集計の時間を削減したり、用紙の削減等を行ったりして、スマートに行える方法を検討していく。

II 具体的な研究活動

1 一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施

(1) スキルアップ研修会Ⅰ（4月20日）

- ・Win Bird 授業支援の基本的な操作について
- ・M-bot を使ったプログラミングについて

(2) スキルアップ研修会Ⅱ（5月12日）

- ・Chrome Book の管理について
- ・Chrome Book のログインについて
- ・Win-bird 授業支援について
- ・Class Room 機能について

(3) スキルアップ研修会Ⅲ（5月26日）

- ・「Chrome Book を活用した実践事例の紹介、演習」

講師：山梨大学附属中学校 梶原 隆一 先生 ・ 森澤 貴之 先生

(4) スキルアップ研修会Ⅳ（7月7日）

- ・まなびポケットについて

(5) スキルアップ研修会Ⅴ（10月20日）

- ・リモート模擬授業（グループごと）

(6) スキルアップ研修会Ⅵ（11月24日）

- ・グーグルフォームについて（フォームの設定、QRコードの作成、入力テスト等）
- ・ファイル管理、データの共有について
（スクールタクトデータの共有、ドライブの整理・共有、お気に入りの整理）

2 主体的・対話的で深い学びを支えるICT機器を使用した授業実践

(1) 授業研究会Ⅰ（6月25日）

算数科「小数のしくみを調べよう」 4年2組 橋本 耀太 教諭

指導助言：清水 宏幸 教授（山梨大学大学院 教育学域 科学教育講座）

(2) 授業研究会Ⅱ（7月9日）

英語科「Unit3 What do you want to watch?」 6年2組 関口 哲也 教諭

指導助言：桑畑 秀子 教頭先生（甲府市立山城小学校）

(3) 授業研究会Ⅲ（10月22日）

特別活動「学級力向上プロジェクト」 5年1組 志村 貴美子 教諭

指導助言：田中 博之 教授（早稲田大学教職大学院）

(4) 授業研究会Ⅳ（11月19日）

社会科「事故や事件からまちを守る」 3年2組 三澤 瞬 教諭

指導助言：清水 宏幸 教授（山梨大学大学院 教育学域 科学教育講座）

(5) 一実践（レポート作成）

3 既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うための端末の活用

(1) 八のつく日の振り返り

(2) 「学級力向上プロジェクト」

(3) 各種アンケート

Ⅲ 成果と課題（○成果 ●課題）

1 一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施

○スキルアップ研修会で様々な機能を学ぶことができた。実際に学んだことをどの授業のどの場面で活用できるかを各自で考え、授業に取り入れることができた。

○一人一台端末を使うきっかけとなった。また、お互いのスキルを情報交換しやすい環境へと繋がっていった。

●他校の取り組みの様子も情報収集、情報交換しながら、市全体でスキルアップをしていきたい。

2 主体的・対話的で深い学びを支えるICT機器を使用した授業実践

○研究授業では、回を重ねるごとに教師も児童も一人一台端末の活用技術が上がっていた。どのような場面での機能を活用していくのが良いのかが見えてきた。

○それぞれの授業に適任の指導助言者を招致していただき、研究が深まった。

○様々な教科での実践があったので、とても勉強になった。

3 既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うための端末の活用

○英語アンケートなど活用の場面が広がり、スムーズに行うことができた。

○八のつく日を一人一台端末で入力するようになり、効率的に集計できるようになった。

●入力したものがそのまま表やグラフになるようになるなど、バージョンアップを図ってきたい。

Ⅳ 成果物

1 研究授業指導案

2 一実践レポート

3 「八のつく日」の振り返りに関する資料

4 「学級力向上プロジェクト」に関する資料

5 各種アンケート

（研究主任 飯室 林）

研究主題

児童が主体的・協働的に学ぶ授業を目指して ～ICTを活用した授業の推進(1年次)～

I 研究の内容

1 研究の目標

やまなしスタンダードに示された視点と各教科の特性を考慮して、効果的に授業を構造化し、実践するとともに、学習形態を工夫し、授業を活性化することで、自ら考え、表現し、学び合う児童の育成を図る。

2 研究の内容・方法

(1) 児童の実態分析と指導法の改善

全学調・CRT(3.5年)の結果分析から、本校児童の実態把握をし、授業づくりの視点や指導法の共通理解を図る。

(2) 授業研究

指導主事等を要請し、授業研究による検証を行う。

(3) 一人一実践の公開授業

一人一実践を公開し、授業改善と授業力の向上を図る。

(4) 今日の教育課題関連の学習会

講師を招聘し、学習会を行い、共通認識をもつ。

(5) 教育課程説明会の環流報告

3 実践内容

(1) 学習会

「ICTを活用した授業の実践方法について」 総合教育センター 中島 浩三 主幹・指導主事

「実物投影機使用学習会」 後屋敷小学校 山田 勝博教諭・雨宮 玲子教諭

・「授業等での書画カメラ活用場面例(栃木県総合教育センター)」の資料を使用し、どのような場面で活用できるか学習した。今年度新しく導入された実物投影機を使い、実際の使い方を確認した。

「特別の教科 道徳について」 後屋敷小学校 雨宮 綾教諭

・道徳の授業づくりについて学習した。主体的、対話的で深い学びの実現にむけて、児童が問題意識を持ったり、多様な感じ方や考え方に触れ自分の考えを再構築したりすることの重要性を学んだ。また、授業者が指導意図をしっかりと持つことも必要だという話し合いがされた。

(2) 研究授業

第1学年2組 生活科 「きせつとあそぼうーあきー」 授業者 岩下 亜希子

指導助言 義務教育課 村田 利恵 副主幹・指導主事

・クイズにICT端末を使い、質問と答えのシートを自分で作成し、大型モニターに映して全員で見られるようにした。また、子どものクイズの答えを補足するような画像や動画の資料を教師が用意した。画像や動画など用意された資料を子ども達が集中して見ている様子を見て、興味関心を高め、学習を深めることができた。

第5学年1組 道徳科「モントゴメリーのバスーキング牧師とバスボイコット運動」

授業者 中村 亮太教諭

指導助言 峡東教育事務所 早川賢一 指導主事

・導入ではアンケートの提示をしたり、肌の色を示す絵の具やクレヨンの画像を大型モニターで提示したりすることによって、児童の興味・関心を高めることもできた。「電子ホワイトボード」を使うことで、誰がどのような意見をもっているのかを全体で共有することができた。また、似た考えをもつ児童を意図的に指名して、どうしてそう考えたのかを発表するなど主題に対しての考えを深めることができた。

(3) 一人一実践

第1学年1組	国語科「かん字のはなし」	坂本 由香教諭
第2学年	国語科「冬がいっぱい」	安富 智恵美教諭
第3学年	算数科「小数」	山宮 由紀教諭
第4学年1組	国語科「感動を言葉に」	小野 晃裕教諭
第5学年2組	図画工作科「形が動く 絵が動く」	雨宮 綾教諭
第6学年	算数科「並べ方と組み合わせ方」	若月 敬二郎教諭
たんぼぼ学級	国語科「冬の楽しみ」	篠塚 由菜教諭
ひまわり学級	国語科「新しい計算を考えよう」	雨宮 玲子教諭
すみれ学級	自立活動「ユニバーサルデザインを考えよう」	新谷 雅美教諭
教務主任	理科「電気とわたしたちの暮らし」	山田 勝博教諭

II 成果と課題

1 成果

- 児童の実態把握として、全国学力学習状況調査と3.5年生で行った CRT の結果を分析し、課題点を明らかにした。課題点について、授業改善や家庭学習などでどのように改善していくか全職員で共通理解できた。
- 今日的教育課題関連の学習会を3つ行った。それぞれの講師に実践的なことを教えていただき、授業実践に結びつけることができた。
- 指導主事を招いて2回の授業研究会を行った。ICT 端末を活用した授業の展開や ICT 機器を活用した子どもの興味や関心、意欲を高める方法などを学習することができた。
- ICT の活用方法についてそれぞれの学年ごと発達段階に応じて考えられていて、ICT の活用例、有効性、課題面を共有することもできた。

2 課題

- コロナ禍でペアやグループでの関わり合いが難しい状況の中で、ICT 端末を用いてどのように補っているか、今後も研究していく必要がある。
- 今年度、書画カメラ使用学習会があった。今後も ICT 端末の活用について、もう少し具体的な学習会を複数回行い機器の活用能力の向上につなげたい。
- 今年度の研究は高学年ブロックと低学年ブロックの2ブロックで研究した。授業づくり中心となったので、来年度は情報リテラシーなどについても研究を深めていきたい。

(研究主任 岩下 亜希子)

「自ら学び、豊かに表現し、深い学びに向かう児童の育成」

～新聞を活用しての深い学びの実現～

I 主題設定の理由

昨年度、「自ら学び、豊かに表現し、深い学びに向かう児童の育成～新聞を活用しての深い学びの実現～」を研究主題として、あらゆる学習の基板となる「読解力」の育成を目指し、NIEの実践を中心に研究を行ってきた。新学習指導要領の中でも、読解力や語彙力を養うために新聞を活用することが例示されている。研究成果として、新聞を活用した授業実践を行う中で、各学年、各教科で新聞を教材として活用できる場面や扱いやすい教科が明らかとなった。新聞を授業で活用することに加えて、身近に新聞のある環境づくりも進めていく中で、児童の新聞への興味や関心を高めることもできた。

しかし、前年度の取組では、児童が考えを豊かに表現する力を高めることが不十分であった。そこで、新聞を活用する授業を通して、児童が進んで新聞を読み、自分の考えを持ち、考えを広げ、その考えを記述して表現していく力を高めたいと考えた。さらに、考えをより精査、吟味することで、深い学びに向かわせていきたい。児童が自ら学び、豊かに表現し、深い学びに向かうために、新聞を活用した授業実践やそのための教材研究などを中心に研究を進めていきたいと考え、本研究主題を設定した。また、研究主題を支える土台づくりとして、ICT 端末の活用と新聞活用をリンクさせること、より新聞を身近なものとする環境づくり、家庭学習や学級力の取組の充実なども合わせて進めていく。

II 研究の内容

1 授業づくり・・・各教科において新聞を活用した授業実践を行う。

- ・第1学年 生活科「生きものとなかよくなるよう」 鶴田 望 教諭
 - ・第2学年 国語科「そうだんにのってください」 高野恵美子教諭
 - ・第3学年 国語科「すがたをかえる大豆」 吉澤 成南教諭
- 指導：山梨大学 大学院総合研究部 齋藤 知也 教授
- ・第4学年 国語科「伝統工芸の良さを伝えよう」 行田 玲子教諭
 - ・第5学年 国語科「新聞を読もう」 望月 泰祐教諭
 - ・第6学年 総合的な学習「受け継いでいこう 日川の歴史」 今澤比呂樹教諭
- 指導：峡東教育事務所 中村 弘和 指導主事
- ・はぐくみ 国語科「鳥獣戯画を読む」 廣瀬 明子教諭
 - ・かがやき 国語科「新聞を読もう」 深味 朝日教諭
 - ・のびやか 自立活動「一緒にあそぼう」 荏原 悠光教諭

2 環境づくり・・・新聞に親しむためのよりよい環境を整える。

3 教育課題および学力向上にかかわる取組

○Chromebook を授業で活用するための学習会

講師：山梨県立大学 国際政策学部 八代 一浩 教授

○コミュニティ・スクールと地域の教育力の活用についての学習会

講師：山梨大学 大学院総合研究部 日永 龍彦 教授

○特別支援教育についての学習会

講師：甲州市立菱山小学校 岡 輝彦 校長

○校内での研修会を行い、先生方がもっている、知識や情報の共有をする。

○生活習慣チェックカードを利用し、基本的な生活習慣や学習習慣の徹底を図る。また、自学ノートの展示会を行い、児童の意欲を高める。

○学級力アンケートを実施しスマイルタイムを活用して学級力を向上させる。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・新聞を活用した授業に取り組むことで、子どもたちが新聞に関心をもつようになり、新聞から学んだりすることができた。
- ・新聞の掲示が有効的で子どもたちの知識が広がった。
- ・実際に授業をしていただいた先生方にはご苦勞をおかけしたが、授業実践を見させていただくのは、教師の力量を高める上でありがたかった。
- ・新聞の掲示は子どもが興味を持つ内容であったり、読んでみようと思わせる工夫をしたりすることで、子どもたちが自然と新聞を読むことができていた。
- ・新しく新聞の掲示がされる度に、教室に来るまでに興味深々で読みながら教室に入ってきて、その新聞の内容の話題を子ども達がしていた。拡大されている上に写真や文字も大きいので読みやすく、興味を引く内容だったと思う。
- ・4年生では、国語の教科書にも新聞を作ろうという学習があるので、見出しの言葉の工夫や割り付けなどもとても参考になった。
- ・階段や廊下での掲示に加え、新聞に載っているパズルやクイズ等も児童が新聞に興味を持つ良いきっかけとなっていたと思う。
- ・テレビやインターネットのように莫大な情報がある中から、必要な情報を抜き出すという作業は児童にとって難しいと感じた一方で、子供向け新聞は読みやすく、要点も見つけやすいため、導入資料や補足説明として効果的であったと感じる。

2 課題

- ・教師が意識しないとなかなか実践できなかった。
- ・文字に抵抗がある児童にとって新聞記事を読むことが大変である。基礎的な学力をつける普段の取り組みを継続していきたい。
- ・新聞というと文字が多く、更に読めない漢字が多いというイメージがあるようである。その壁が大きいように感じているので、少しでも興味を持つことから新聞を読もうという気持ちになっていくようにこれからも取り組みを続けていきたい。
- ・新聞をとおして学べることは多いが、今年度は「新聞とは何か」ではなく、「『書くこと』に重点をおいた授業づくりの方法の一つとしての新聞活用とは何か」であったので、子どもたちの書く力の変容に着目することも大切だったかと思う。新聞形式の表現方法を学んだ子どもたちが、別の授業で調べたことや分かったことをまとめる際に、自ら新聞形式を選択し、「書くこと」に抵抗を感じなくなったという姿が見られたら、新聞を活用した授業づくりが成功したということになるのではないかな。だからこそ、このような取組を無理のない範囲で継続していくことが、子どもたちの「書く力（表現力）」を育てることにつながっていくと考える。

(研究主任 鶴田 望)

確かな学力の定着・向上を目指した指導の工夫

～ ICTを取り入れた対話的な学びの工夫 ～

本校の児童は、全体的に明るく素直で、何事も前向きに取り組むことができる雰囲気がある。

本校ではこれまで、基礎学力の確実な定着を図った授業づくり・授業改善を進め、児童の確かな学力の定着・向上を目指し研究を進めてきた。昨年度までの2か年にわたり、山梨県金融広報委員会より、「金銭教育研究校」を委託され、金融教育に取り組み、それを通じて「確かな学力」の主体的に取り組む態度や思考力・判断力・表現力を育成することができた。一昨年度からは、新学習指導要領の実施に伴い、対話的な学びに視点を当て、児童同士の意見の交流を行うことで、考えを広めたりより深い理解につなげたりするような学習を仕組んだ。本年度は、それらを継続するとともに、GIGAスクール構想のもと、1人1台端末等のICTを取り入れた授業を実施し、コロナ禍における対話的な学びを成立させる工夫について手探りながら取り組んだ。また、確かな学力の定着に向けて、家庭学習定着の推進等に取り組んだ。

I 研究の内容と方法

1 授業づくりの研究

R・P・D・C・Aサイクルの確立

(1) 児童の実態把握

- ・「NRT」の結果の分析
- ・Q-Uを活用しての児童の実態把握

(2) 課題解決に向けた取り組み

- ・基礎学力の確実な定着を図るための授業実践
- ・ICTを取り入れた対話的な学びを工夫した授業研究
- ・一人一実践授業
- ・「やまなしスタンダード」による授業改善
- ・家庭学習と連動した授業の工夫

(3) 講師を招聘しての学習会

- ・5月26日 「国語・算数・理科を主にICTを取り入れた対話的な学びの授業実践について」一人一台端末の教科等への活用事例

講師 義務教育課 櫻井 順矢 副主幹・指導主事

- ・6月30日 「自閉症スペクトラム障害やそのグレーゾーンの児童に対する個別や集団における具体的な支援・指導について」

講師 高校改革・特別支援教育課 久保田 雄 主幹・指導主事

2 学習環境・基盤づくり

(1) Q-Uを活用した学習集団づくり

(2) 学習の決まり「学習あたりまえ6か条」の定着

(3) 対話を支える指導の工夫

- ・「各学年の話し方」発達段階に応じた話型の提示
- ・伝え合いの仕方の定着

(4) 主体的な家庭学習の定着を図る

- ・「家庭学習の手引き」の配付
- ・「自主学習ノート」の取り組み
- ・家庭学習チェック8の取り組み

II 研究実践

1 研究授業

(1) 第6学年 家庭科「こんだてを工夫しよう」 授業者 三澤 美穂

(2) 第2学年 生活科「あそび名人になろう」 授業者 仁科 桂太

2 確かな学力一人一実践授業

国語科（1年，特2年，3年，特3年） 算数科（4年）

自立（特4年） 理科（4年） 家庭科（5年）

III 成果と課題

1 成果

- ・6学年で、家庭科の研究授業を「栄養バランスのとれた1食分の献立をたてよう」の目標で実施した。
- ・ICT 端末を使って、一人ひとりが自分の画面で共通のワークシートを操作することで時間の有効活用ができていた。友達の見解が画面上に現れ、そこに注目することでしっかりと他者の考えを認識して自分の考えを表現することができていた。実際に話さなくても対話が成立していた。
- ・付加修正された部分が目に見える形で残るので、試行錯誤の流れを可視化することができ、変容の流れを考えながら振り返ったりさらに付加修正したりすることができた。
- ・自分の意見が付箋で全員に共有されるため、意欲的に自分の意見を出すことができた。話すことが苦手な児童にとっても有効だった。
- ・ジャムボード上で付箋に意見を記入させると、話し合いながら移動させ、分類やまとめるといった作業ができるので、思考ツールとして有効だった。
- ・友達の見解を聞き、考えを深めるような場面では、人数が多い学級では、全員の発言に時間がとられてしまう。しかし、ICT 端末では、みんなの見解を閲覧でき、さらに自分の考えを発信できる。短時間で、考えを深められる手段がたくさんある。
- ・2学年で、生活科の研究授業を「遊び方やおもちゃの紹介動画を見て、その工夫に気付いて表現することができる」の目標で実施した。ICT 端末を活用して、各グループが工夫した遊びをビデオで撮る活動が、児童の意欲を高めるきっかけになった。また、それを全員が見て共有することで、気付きを深め合うことができた。

2 課題

- ・インターネットでレシピを調べて、話し合いをしているのはよかったが、インターネットの情報を安易に信じてしまわないよう情報を精査する力を育てる必要がある。
- ・ほとんどの児童が月一回の自学ノート提出日に、サイン入りのノートを提出しているが、すべての保護者に趣旨を理解して協力を得るのは難しいと感じた。だが、昨年度の点検表よりも実際のノートを見る形は、保護者に児童の実態を把握してもらえるので良い。

(研究主任 松岡 めぐみ)

「生きる力を支える確かな学力の育成」

～主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり～

I 研究の内容

1 授業づくり

(1) 「やまなしスタンダード」の3つの視点に基づいた授業改善

ア②話合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている。

③児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。

④児童生徒は、ノートをとっている。

【特支版】

②障害の状態に応じて自ら考え、判断し、表現する活動を具体的に取り入れている。

③自主的・自発的な学習を促す教材・教具等を用意している。

④達成感や自己肯定感が高められる指導を工夫している。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

1人1実践授業を実施（10月～12月）

・ICTを効果的に活用した授業づくりを行う。

・発問・問い返しや板書を工夫する。

・お互いに授業を参観し合い、ブロックごとに意見交換をする。

第1学年 学級活動 「げんきなからだをつくろう」

第2学年 図工科 「ふしぎなたまご」

第3学年 英語科 「This is for you.」カードをおくろう

第3学年 総合的な学習の時間 「パソコンを使ってプログラミング学習」

第4学年 音楽科 「いろいろな音のひびきをかんじとろう」

第4学年 理科 「とじこめた空気と水」

第5学年 算数科 「面積の求め方を考えよう」

あおぎり学級（第3・6学年）自立活動 「お楽しみ会ですごろくを楽しもう」

たんぼぼ学級（第5学年）算数科 「分けた大きさをあらわそう」

(3) 授業研究会（10月）

第6学年 算数科 「比例の関係をくわしく調べよう」

授業者 向山 敢 教諭

指導助言 山梨県総合教育センター 天野秀太郎指導主事

(4) GIGAスクール構想の実現に向けての学習会の実施（3回実施）

ICT 端末の活用の仕方や学習支援ソフトの使い方などについて学ぶ研修会を実施した。

2 学級・学習習慣づくり

(1) Q-Uの分析方法と学級経営の生かし方学習会の実施

Q-Uの結果を基に、各学年「Q-U学級支援シート」を作成し、学級集団のタイプ・

個別支援が必要な児童の様子・今後の取り組み方針などを確認した。

(2) 家庭学習の充実

- ・自主学習ワークシート(「きりっこノート」)を活用し、家庭学習の習慣化を図る。
- ・家庭学習の主旨について理解を深めてもらえるように、家庭向きに手引きを出し、家庭との連携を強化する。
- ・「きりっこノート」を綴った「きりっこファイル」を持ち帰らせ、保護者にコメント記入を依頼する。
- ・学級や職員室前の廊下にノートを掲示するコーナーを設置したり、掲示されたノートを校長が評価し校長室でしおりを配布したりするなど、児童の継続意欲の向上を図る。

3 その他

(1) 情報交換

家庭学習やICTの効果的な活用方法、教材教具の工夫・活用など、お互いの実践例を発表し合い、年間のまとめを研究紀要に記載。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果の分析

(3) 研修会の還流報告

校内研の時間に情報交換の場を設け、参加した研修会の還流報告や参考になる実践例、最新の情報などについて発表し、参考とする。

II 成果と課題

- 八幡小児童の課題を把握し、研究を進めることができた。
- 授業づくりの研究では、ICTをどのように活用して授業づくりを行うかについて中心に取り組み、試行錯誤しながらも、さまざまな実践を積み重ねることができた。
- 研究授業や一人一実践を実施することで、各学級で研究テーマを意識した授業実践をすることができた。ICTを活用した授業実践が多く行われ、児童同士の考えの交流や自分の考えを表現する際に効果的に使用することができ、学びの質を向上させるとともに、職員同士も学び合い、自身の授業改善につなげることができた。
- 自主学習ノートを掲示することで、学習内容や方法を学ぶ機会となり、参考にし合うことができた。また、学校長より褒められたり、シールをもらえたりすることで、意欲の向上を図ることができた。
- 全国学力・学習状況調査の結果の分析を行い、明らかになった本校の課題に対してどのように取り組むかを職員全体で話し合い、共通認識をもって授業改善に取り組むことができた。
- △ICTを使うことの学習はしたが、効果的な使い方についてはもう少し具体的に研究が必要である。
- △全職員で授業を参観し研究する時間を確保できず、成果の共有という面で課題が残った。
- △きりっこノート(自主学習)の取り組みは、個人差が大きく、家庭学習の習慣がなかなか身に付かない児童に対して、どのような働きかけをしていけばよいのかが課題である。

III 成果物

- 1 研究授業・一人一実践の授業実践報告書
- 2 学級・学習習慣づくりの取り組み」各学級の取り組みと成果・課題
- 3 「GIGAスクール構想の実現に向けての学習会」資料
- 4 Q-U学級支援シート

(研究主任 菊嶋 理奈)

I 研究の内容

1 研究主題

『自ら考えをもち，考えを広げ，創造的に解決させる指導の工夫』
～「学び」にICTの活用を取り入れた授業づくりをとおして～

2 主題設定の理由

新学習指導要領においては，情報活用能力を言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付け，育成を図るとともに，学校のICT環境整備とICTを活用した学習活動の充実を明記している。GIGAスクール構想の実施に伴い，ICTを効果的に活用していく力を育成していくことや，学びを深化するために必要となる情報活用能力や社会とつながる協働的・探究的な学びを通じて，資質や能力を育成していくことも求められている。知識という情報を共有し，考えを交流，議論させ，自らの学びをより深くしていく場を学校の教育現場において多く設定していくとともに，基本となる知識の習得とその知識を組み合わせる創造的に問題を解決する力の育成が求められている。

以上のことから，学力向上の基礎となる確実な知識・技能の習得を行い，得た知識・技能を活用して，深く多角的・多面的に考え，課題を解決することが求められる。

今年度は，児童がより論理的に思考し，互いの考えを交流させながら創造的に問題解決していくことができるよう，ICTを効果的に取り入れた授業づくりを中心に研究を進めていきたい。

3 研究の目標

「主体的・対話的で深い学び」につなげることが出来るICTを活用した授業改善を図ることを目的とする。組織的研究と個々の実践を通じた工夫・改善を共有化することで，授業改善につなげ，プログラミング的思考の研究や言語活動など従来の研究成果を活かしつつ，教員のスキルの向上を目標として今年度の研究とする。

4 研究の内容

- (1) 基本的な知識・技能の習得をはかる指導の工夫
 - ア 知識を確実に習得させる手立ての工夫
 - イ 複数の場面に汎化できる学習技能の指導
- (2) 論理的思考力を伸ばす指導の工夫
 - ア 知識・技能を活用する場を仕組む授業
 - イ ICTを効果的に活用する場を仕組む授業
- (3) 家庭との連携
 - ア 家庭学習への取り組み
 - イ 自主学習の質の向上

5 研究の方法

- (1) 全体研究会…全体会をもち、共通理解のもと研究を進める。
- (2) 研究授業…年間1本行う。全体で研究会を行う。
- (3) 校内研修…効果のあった方法や工夫などを互いに提供する場とし、指導の内容や方法の工夫を学ぶ。
(ICTを活用した実践例, 論理的思考につながるもの, 各種研修で学んだこと, 授業のアイデアになるものなど。)
- (4) 実践授業…全員が校内研のテーマに沿った実践を行う。

II 成果と課題

1 成果

様々な学年や教科でのICTを活用した授業を参観し合い、その有効性や可能性を全職員で確認することができ目標達成に結びついた。GIGAスクール構想実施1年目として、一人一台端末の扱い方を中心に学習し合い、情報を共有し合えたことは、本校の大きな成果となり、財産となった。

2 課題

学習基盤となる資質・能力である「言語能力」「情報活用能力」を育成していくためには、引き続き「主体的・対話的で深い学び」を補助するツールとなるICTを活用した授業改善を研究していく必要がある。そのためには、教師のICT指導力、ICT活用能力といったスキルの向上や、今年度の研究をどのように本校の実態に合わせて系統づけていくのか、来年度の主題をどのようにしていくべきかという課題について検討していく必要がある。また、小・中連携を意識していくと、他校が活用しているツールも共有し合って指導・支援していく必要性も感じられた。端末をツールの1つとして活用しながら、コミュニケーション能力を育成していくことも課題となる。

III 成果物

1 授業実践指導案及び記録（※は全体研究授業）

(1) 1学年	生活「きせつとあそぼう」	古屋万里教諭
(2) 2学年	算数「九九をつくろう かけ算(2)」	中村麻世教諭
(3) 3学年	社会「店ではたらく人と仕事」※	望月美奈子教諭
(4) 4学年	社会「自然災害に備えるまち作り」	大野紗佑里教諭
(5) 5学年	国語「どちらを選びますか」	山宮彩子教諭
(6) 6学年	図工「わたしの感じる和」	三枝清美教諭
(7) わかばと教室	自立活動「先生をコピーしよう」	廣瀬 剛教諭

「自ら考え、進んで学ぶ児童の育成」
～GIGA スクールと家庭学習の充実を目指して～

I 研究の内容

1 主題設定の理由

本校は、統合前の平成 27 年度より 3 年間、文部科学省の「少子化・人口減少に対応した活力ある学校教育推進事業」の研究指定を受け、取組を重ねてきた。その中の一つとして、タブレットを中心とした ICT 機器を活用した授業で、子供たち同士が考えを交流し合いながら課題解決の協働を図る研究を行った。

また、平成 29 年度から 3 年間、山梨県より小中連携研究推進校としての指定を受け、笛川中学校と共に、小中連携を図ってきた。小・中 9 年間の教育課程を算数・数学科と英語科で作成したり、児童会・生徒会活動のあいさつ運動を合同で行ったりしてきた。小学校から中学校への継続を意識する中で、中学校の生活ノートに合わせた宿題を高学年の家庭学習として課してきた。また、昨年度は校内研究として、家庭学習のあり方を研究し、小中 9 年間を見据えた上での、1 年生から系統立てた家庭学習を進めてきた。

これらの成果として、高学年の児童は iPad での調べ学習に抵抗はなく、静止画・動画撮影、編集まで行える児童も見られている。家庭学習においては、学習したノートを紹介する取組を担当が行ったことにより、ノートを通じての学びあいができた。課題としては、家庭学習への取組に意欲的に取り組む児童が増えた一方で、家庭の協力が難しい児童もあり、児童によって、取組への意欲や内容・質の差が生じてきている。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 昨年度からの家庭学習に関する実践の継続
- イ 家庭と効果的に連携した家庭学習の在り方の探究
- ウ GIGA スクール構想に対応した研修及び実践
- エ プログラミング教育の推進
- オ 児童用デジタル教科書の活用法の探究

(2) 研究の方法

- ア 担任が児童の実態を把握するためと児童の振り返りのための家庭学習力アンケート（児童用・毎学期）
- イ 保護者の家庭学習への意識の実態を知るための保護者アンケート（1 学期・3 学期）
- ウ 講師を招聘しての研修会（プログラミング Chromebook）

- エ プログラミングや Chromebook などの外部等の研修への参加
- オ 一人一実践（家庭学習 or プログラミング or デジタル教科書）
- カ 研究授業（ICT活用授業）

3 研究実践

(1) 研修会① 『Chromebookの授業での活用方法及び

Chromebookを活用したプログラミング学習の指導法』

講師 山梨県教育庁義務教育課 副主査・指導主事 雨宮正倫 先生

研修会② 『社会科デジタル教科書の指導法について』

講師 教育出版株式会社 加川 諒氏

(2) 一人一実践（各学級における取組の中間発表）

(3) 研究授業

ア 初任研 島山教諭 4年 国語 『ごんぎつね』

イ 研究授業 川手教諭 5年 国語 『グラフや表を用いて書こう』

(4) 家庭学習力アンケートの実施（6月と1月）

II 成果と課題

1 成果

児童の家庭学習力アンケートや保護者向けのアンケートにより、児童の実態や保護者の意識・考えを知ることができた。家庭学習だけでなくICT端末の活用という両面から研究することができた。研修や研究授業を通してICT活用方法を模索することができ、多くの教諭がICTを授業の中に取り入れる中で、授業のどの場面でどのように活用するのか、教材研究を行う中で考えるようになってきている。また、児童はICT端末を使って、進んで意欲的に漢字練習や計算練習を行えるようになった。ICTを学習で活用することで、児童の意欲を掻き立てることに繋がったと思う。

2 課題

家庭学習の取組において個人差があることが、今もなお課題である。ICT端末の使い方などのルールを全教員で確認することはできたが、活用するという点では、教師の個人差もあり、課題が残る。端末の持ち帰りについての実践が現時点では未実施のため今後実施し、検証していきたい。また特別支援学級では、個人個人の目標につながるまでには難しいものがある。

III 成果物

1 講師からの指導・助言・資料等

2 MYノート（英語用・意味調べ用）

（ 研究主任 上野 瞳 ）

「見方・考え方を働かせ、思考力・判断力・表現力を発揮する児童の育成」2年次
～ICTを効果的に活用し、思考スキルを働かせて～

I 研究内容及び具体的な研究活動

1 研究内容

- ①「見方・考え方」と「考えるための技法」の関係と意義についての研究をする。
- ②本校独自の「考えるための技法（南小思考スキル）」を研究し、設定し、浸透させていく。
- ③ICTを効果的に活用し、思考スキルを働かせて思考力・判断力・表現力を発揮する授業づくり・授業改善を進める。

2 具体的な研究活動

- ①「見方・考え方」と「考えるための技法」の関係と意義についての研究をする。
 - ・各教科や総合的な学習の時間等、「見方・考え方」の視点や方法を研究し、「考えるための技法」との関係性を定めながら、育成する資質・能力を設定した。
- ②本校独自の「考えるための技法（南小思考スキル）」を浸透させ、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業づくり・授業改善を進める。
 - ・子どもたちが各教科等の「見方・考え方」を働かせて個別具体的な対象にアプローチできるようにする。また、教科横断的に汎用性のある資質・能力を育成する観点から、「考えるための技法（南小思考スキル）」を可視化した「思考ツール」を積極的に活用し、授業改善を行った。
- ③GIGAスクール構想のもと、ICTを効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びを実現し、思考力・判断力・表現力を発揮する児童の育成を目指す。
 - ・単元のどこでICTを効果的に活用すると南小思考スキルと相まって「主体的・対話的で深い学び」が実現していくのか試行してきた。

II 成果と課題

【「見方・考え方」と「考えるための技法」の関係と意義についての研究】

- 「見方・考え方」とは何かについて北俊夫の著書「ものの見方・考え方」を基に2年目ということで共通理解を図った。教員自身が理解を深め、見方・考え方を働かせる手立てを学ぶことができた。
- 見方・考え方を働かせるために国語、算数などの具体的な場面での学習会を行った。指示・発問するとき有効な言葉について研究を重ねた。また「問い返し」を心掛けたことにより、児童の思考を活性化させることにつながった。
- 見方・考え方を働かせた「深い学び」の子供の姿とは何かの理論的な研究を行うことができた。深い学びの姿を具体的に提示し、共通理解を図ることができたのはよかった。

【本校独自の「考えるための技法」である南小思考スキルの活用の完全実施】

- 「比較する」、「関連付ける」など考えるための技法を本校独自に17項目設定し、各教科の授業のねらいに合う思考スキルを活用し、児童の思考を支援することができた。
- 考えるための技法を「南小思考スキル17条」として年度当初から各教室に拡大掲示することにより、いつでも児童が思考の拠り所となるように配慮できた。また、児童に南小思考スキルシートを配布し、意識的に活用しやすくした。
- 昨年度の後半に作成した南小思考スキルを改善しながら今年度は4月から取り組むことができた。さらに来年度以降も継続していくことで浸透・定着を図っていきたい。

【「考えるための技法」を用いて思考力・判断力・表現力を発揮する授業づくり・授業改善】

- 「汎用的なスキル」とは何か、全学年の学習内容を俯瞰することにより、身に付けるべき内容を的確に把握して、授業の実践化につなげることができた。
- 2本の算数科の研究授業を通して、どのような思考スキルを重点に置いて授業を仕組むのか共通認識の下で学年間、ブロック間において検討できた。また、授業を見合い、深い学びにつなげる授業改善を進めることができた。

【ICTの効果的な活用】

- 一斉指導、個別学習、協働学習の中にICTを積極的に取り入れた授業を全学年、全学級で行うことができた。共有ソフトを活用することにより、児童同士の意見交換や共同作業を通して思考力・判断力・表現力を発揮することが可能になった。
- 校内研のテーマに関わり、ICTの効果的な活用とは、「協働的な学びを通して共有化を促進し、更に考えを広げ、深めることを補助する活用」と捉え、実践することができるようになった。

III 成果物

- ・低学年・中学年・高学年別 考えるための技法「南小思考スキル17条」シート
- ・自主学習「南小ノートかんぺきガイド」各学年のシート
- ・全国学力状況調査結果の課題の各学年の系統性と具体的取組資料

※以下、成果物として「中学年用の南小思考スキル17条」の簡略化した資料

考えるときに使おう～南小思考スキル17条～ 中学年用 塩山南小学校

- ①どんな点かはっきりさせてくらべる→「AとBとをくらべてみると」
- ②物事のかんけいをみる→「AとBをつなげると」「Aの次はBで」「AとBのかんけいは」
- ③時間ごとのきろくをみる→「大きくかわったところは？」
- ④原いん、根きよ、理由とむすびつける→「原いん：〇〇だから△△だと思います。理由：〇〇だと考えるのは、△△だからです。根きよ：〇〇をもとに考えると、△△だと思います。」
- ⑤いろいろな点に目をつける→「地形に目をつけると」、「土地の使われ方に目をつけると」
- ⑥条件は、何か？ 条件をそろえる→「必要な条件は何か？条件をそろえて調べよう」
- ⑦まよったときは消去法でえらぶ→「このなかで〇〇でないのはどれ？」
- ⑧なかま分けをする→「〇〇は、3つのなかまに分けられます。」
- ⑨なかま分けをして見出しをつける→「関係のあるものをなかま分けして題名をつけると？」
- ⑩正しく公平にみる→「AかBか？どっちの立場も大切にされる方法はあるかな？」
- ⑪いろいろな立場からみる→「Aの立場から、Bの立場から」
- ⑫まとめてみる→「Aはどんな人？」「これまで調べたことをまとめると」
- ⑬ベストではないが、よりよいものをえらぶ→「ほかのものどくらべてすぐれているものは？」
- ⑭「つまり」でまとめる→「これらの工夫をまとめると、つまり、どのような工夫？」
- ⑮「たとえば」でくわしく説明する→「どんなところからそう思ったのか？」「たとえば？」
- ⑯前に学んだ見方・考え方を使う→「Aの方法は、Bでも使えるかな？」
- ⑰「もし～だったら」と考える→「もし、〇〇だったら、どうなるかな？」

(研究主任 那須 栄樹)

「主体的に学び、考える児童の育成」 ～ICT 端末を効果的に活用した授業づくり～

I 研究内容

1 研究について

今年度は、ICT 端末を効果的に活用した授業づくりを通して、「主体的に学び、考える児童の育成」を主題に研究を進めてきた。また、山梨県教育委員会より「深い学びの実現に向けた ICT 推進活用事業」の2年間の指定を受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研究を進めている。

2 研究の具体的な内容と方法

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現のための理論研究(算数科・道徳科)

ア 指導主事を招聘しての学習会の実施

[算数科]…「『深い学び』の実現」につなげていくための効果的な場面、授業づくり

山梨県義務教育課 主査・指導主事 岡里真実先生

[道徳科]…「『深い学び』の実現」につなげていくための交流場面や評価につなげる

活用方法

山梨県義務教育課 指導主事 小嶋庸子先生

イ 講師を招聘しての学習会の実施

「算数科の授業におけるICTの効果的な活用」について

講師：山梨大学教授 清水宏幸先生

(2) ICT端末(Chromebook)活用した授業研究及び一人一実践

ア 研究授業

第4学年 算数科「計算のやくそくをしらべよう」

中根絵里教諭

指導助言 山梨県義務教育課 主査・指導主事

岡里真実先生

峡東教育事務所 主幹・指導主事

中村英彦先生

甲州市教育委員会 指導主事

小椋規雄先生

イ 第5学年 道徳科「オオカミから教えられたこと」(D 生命の尊さ)

倉田和美教諭

指導助言

山梨県義務教育課 指導主事

小嶋庸子先生

甲州市教育委員会 指導主事

小椋規雄先生

ウ 一人一実践

第1学年 算数科「かたちあそび」

平山沙織教諭

第2学年 道徳科「とおるさんのゆめ」(A 個性の伸長)

雨宮由香教諭

第3学年 道徳科「よわむし太郎」(A 善悪の判断, 自律, 自由と責任)

畑佑弥教諭

第4学年 (教務) 図画工作科「ポーズのひみつ」

古屋ゆか教諭

第6学年 算数科「順序よく整理して調べよう」

三森翼教諭

第6学年 外国語活動 Unit8「What do you want to be?」

木下里江子教諭

たんぽぽ学級 自立活動「言葉集めをしよう」

清水新果教諭

(3) 「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」と連携した取組

ア Q-U調査の実施。結果を分析し、アタックシートを活用した学級集団づくり

イ 学校と家庭が連携した家庭学習の取組

II 成果と課題（○成果 ●課題）

1 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための理論研究（算数科・道徳科）

○指導主事や講師を招聘しての学習会を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習指導や評価に関わる理論研究を行い、共通理解を図ることができた。

○効果的な活用について、事例を紹介していただきながら具体的に考えることができ、授業づくりの視点を深めることができた。

2 ICT端末（Chromebook）を活用した授業研究

○研究授業や一人一実践を通して、ICT端末の効果的な活用を図るための視点をもちながら、授業改善に取り組むことができた。

○校内でのICT端末活用講習会や日々の情報交換を行うことにより、教員の情報活用能力が高まった。

○ワークショップ型の研究会では、学習過程が教科の目標やねらいの達成に有効であったか、また、ICT機器の活用が児童の学びに有効であったかをグループや全体で討議を行い、研究の成果と課題を明らかにすることができた。ICT端末を使って研究会を行うことにより、同時編集や情報の共有化を円滑に行うことができた。

●一人一実践を計画的に行うことができればよかった。また、指導案やレポートについては、今年度の形式を来年度も継続し、授業の視点を明確に示した中で参観や意見交流を行っていききたい。

3 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した取組

○Q-U分析を継続的に行うことにより、個々の児童や学級の変容が見られたり、児童理解につながったりした。学級の様子を客観的に見ることができ、状況を把握することができた。

○具体的な取組や実践の方法を出し合うことで、教員の指導力の向上と日々の学級経営に役立てることができた。

○児童の取り組んだ自主学习ノートを壁面や教室に掲示することにより、児童がノートの使い方や内容に対して関心をもつことができた。また、プロジェクトの部会が制作した「自主学习ノートリーフレット」の掲示や家庭への配布を行い、市内統一取組の様子を伝えることができた。

●家庭の協力には差があり、十分に連携が図られている状況ではない。今後も各家庭に周知していくことが必要である。また、家庭学習の取組について、内容や方法について学校全体として新たな取組を検討していきたい。

III 成果物

1 研究授業指導案・一人一実践指導案

2 授業の概要及びICT端末事例紹介シート

3 児童の情報活用に関する意識アンケート

4 教室掲示資料・家庭学習掲示用資料

（研究主任 平山 沙織）

「確かな学力」を育む学習指導に関する研究

—算数科における主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり—

I 研究の内容

1 授業研究

- (1) 児童の教科の状況把握と改善すべき課題の整理
(令和3年度 NRT 検査結果分析(全学年)と課題の明確化)

(2) 研究授業

第6学年 算数科 「比例の関係をくわしく調べよう」(比例と反比例)

雨宮 正 教諭

指導助言 山梨県総合教育センター 廣瀬 雅美 指導主事

(3) 一実践授業

第1学年 算数科 「たしざん」

奥山 美恵教諭

第2学年 算数科 「新しい計算を考えよう」

小河真由美教諭

第3学年 算数科 「大きい数のわり算, 分数とわり算」

村松 夏帆教諭

第4学年 算数科 「どのように変わるか調べよう」

向山 紀子教諭

第5学年 算数科 「分数のたし算, ひき算を広げよう」

岡村 理恵教諭

知的[すみれ]学級 第1学年 算数科 「どちらがおおい」

筒井ひさ美教諭

自閉症・情緒[つくし]学級 第2学年 算数科 「新しい計算を考えよう」

矢崎さつき教諭

第5学年 理科 「物のとけ方」

金井 巖 教諭

(4) 算数の基礎学力定着に向けての取組

『算数オリンピック』・・・「数と計算」領域の学年相当の基礎学力定着

2 学級集団づくり

Q-U 検査(全学年)実施と K13 法による分析・アタックシートの作成・活用の充実

3 ICT 機器の活用

- (1) ICT 端末に関わる技術向上のための研修
(2) 「ICT 端末活用の記録」作成

II 成果と課題

1 成果

- ・本校児童の実態（客観的な数値及び教師の日々の見取り）に即して、課題を明らかにし、新たに「算数科」に焦点を絞って取り組みをスタートできた。全学年を通して、基礎基本の積み重ねが特に重要な教科について、全職員の共通理解のもと、全校的な取り組みを進めることができた。
- ・授業づくり部会を中心に、主体的・対話的で深い学びの授業づくりに向け、題材の検討や学びの工夫など練り上げられた研究授業を行うことができた。教科の学びを「生活に生かす」ことや ICT の活用と児童同士の対話を両立させることなど、多くの学びがあった。算数科の学びはスパイラルになっているので、研究授業の学年だけでなく、そこまでに必要な他学年の学習内容の理解も大切であることなど、教科の特性に合わせた学びを深めることができた。児童の特性や反応によって対応パターンを考えるなどの準備がされていた。しかし、児童の反応は想定を上回ることも多い。想定外のことに対応できることも大事であり、本実践は瞬時の対応力が素晴らしかった。
- ・研究主題を意識した授業実践・授業参観を行うことができた。発達段階に応じた発問や補助・支援の仕方、及び発達段階を超えて共通する学習の進め方を学び合う良い機会だった。
- ・算数の基礎学力として「計算力」に焦点を絞り、研究を進めた。基礎づくり部会を中心に、授業時間の確保を第一に考え、児童にも教師にも「負担にならずに継続できること」を意識して、『算数オリンピック』に取り組んだ。児童のやる気を引き出すことが鍵であり、『算数オリンピック』というネーミングやポスター・認定証など、意欲づけが功を奏した。
- ・ICT 端末について、情報主任を中心に常に情報交換をしながら色々な実践が共有できたことは良かった。児童が慣れるだけでなく、教師も学び、共有し、活用しようという流れができた。

2 課題

- ・一実践は大変学ぶことの多い有意義な活動なので、実践時期の見通しを持ち、計画的に実践を行い、できるだけ参観できる体制をとって学び合っていけるようにしたい。
- ・「算数オリンピック」は、実施方法・回数を検討したり、個人差のある児童の意欲を高めるアプローチの仕方を模索したりしていくことが必要である。
- ・今後、鉛筆やノートと同じようにタブレットもマストアイテムとして活用し、教育効果を上げることが期待される。授業でどのように活用できるのか、また個々の実践例だけでなく、より汎用的に、どの教科でもどの学年でも活用できるようなツールを研究していきたい。

III 成果物

- 1 研究授業・一人一実践授業の指導案、使用した教具、ワークシート
- 2 「算数オリンピック」に関する資料・問題等
- 3 ICT 端末活用の記録

（研究主任 岡村 理恵）

「主体的に表現する児童の育成」

～小集団における ICT を活用した対話的な学びをつくる授業の工夫～

I 研究の内容

- (1) **教員の ICT 活用指導能力の育成** . . . 指導者自身が有効に ICT を活用していくために、指導者の ICT 活用力を高めていく。
 - ・講師を招聘しての研修
 - 「小集団における ICT を活用した対話的な学びをつくる授業」の学習方法について
 - ・校内での実践研修
- (2) **授業づくり** . . . 学力の実態把握と少人数や集団における効果的な学習方法と授業実践
 - ・NRT 検査、全国学力・学習状況調査を分析して、学習面の成果を把握し、課題を明確にして今後の授業改善に生かす。
 - ・各種調査で明らかになった児童の課題を改善するための効果的な学習方法の実践をする。
 - ・少人数や小集団、個を生かした「対話的な学び」の実現のための授業実践と検証。
(コミュニケーション、ICT の活用も含む)
 - ・甲州市 Teacher's Note の活用
 - ・めあてと目的を明確にした一人一実践
 - ・授業における ICT (デジタル教科書・一人一台端末) の効果的な活用
- (3) **学級集団づくり** . . . 児童の実態把握と集団づくり
 - ・hyper-QU を生かした児童理解と集団づくり。PDCA サイクルを活用。
 - ・K13 法を用いた hyper-QU の結果分析とアタックシートを活用した集団づくりを行う。児童一人一人を丁寧に見とり、個を大切にする。
 - ・アタックシートの対応策には、学年全体だけでなく、要支援群に属する児童や、プロット的位置が教師の見とりと違う児童を中心に置いた策も考える。
 - ・全校プロットを作成し、分析と考察を行う。
- (4) **学びを促す環境づくり** . . . 学校生活の基盤づくり
 - ・「大藤スタンダード」「家庭教育・子育て Q&A・家庭学習の手引き」「学習のすすめ」を活用した家庭学習の効果的な実践の取組。
 - ・5つの合言葉の具体的な場面での取組を実践。学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。
〈わくわくべんきょう〉 . . . 勉強のスタートは、驚きや疑問、楽しく学ぶ。
〈のびのびとうこう〉 . . . 何事も夢中である。徹底してする。
〈みんななかよし〉 . . . いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。
〈にこにこあいさつ〉 . . . あいさつ、返事をしっかりする。
〈いきいきかつどう〉 . . . 自ら考えて行動する。自分で決めて、自分で守る。
 - ・家庭学習定着を図る環境整備

- ①「ふじっこノート」(自学ノート)の年間を通しての実施をする。
- ②家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。
- ③家庭学習と授業を有機的に結びつけ、知識探求や学習の復習をする。
- ④ノートが終わったら、校長先生にも見てもらう。
- ⑤ふじっこノートをコピーして、1年教室の廊下に学年ごと掲示する。
- ⑥月・水・金の朝学習は、1年廊下の算数プリント・漢字プリントを行う。個々の能力に応じて、目標を設定し、計算の基礎・基本の力を付け、計画的に学習を進める自主性を養う。
- ⑦「大藤スタンダード」に基づき、生活面や学習規律の統一を行う。

(5) **研究実践**

第1学年	算数科	授業者	中村 千春
第2学年	算数科	授業者	相澤 由佳
第3学年	国語科	授業者	堀口 藍花
第5学年	国語科	授業者	中村 亜矢子
第6学年	理科	授業者	堀内 美紀
なかよし	2・3学年 国語科・算数科	授業者	川崎 剛

II 成果と課題

(成果)

- ・講師による「小集団におけるICTを活用した対話的な学びをつくる授業」についての学習会を通して、教師の操作技術や、授業の中で活用することで児童が意欲を引き出すようなICTの効果的な活用の仕方を教えていただいたことは、研究を進めるにあたり大きなヒントとなり、指導者側の意識を高めることができた。また、日常的に教員間で授業の中でどのようにICTを活用しているか情報交換を行うことで、実際に使う中でどんなメリット・デメリットがあるのか、留意点は何かを確認することができた。
- ・一人一実践を行い、授業を見合うことで、授業の中でのICTの活用方法や、児童の考えを引き出す発問の仕方等をお互いに学び合うことができ、授業改善へとつながった。
- ・職員全体でK13法を用いたhyper-QUの結果分析ができたことが良かった。これにより自分のクラス以外の児童にも、個に応じた指導を行うことができた。また、分析結果をもとに行った取組・成果・課題・児童の様子についてまとめたシートを作成した。

(課題)

- ・実際にICTを用いることにより、ICTを使うとよい活動と、具体物や紙・鉛筆を利用したほうが良い活動が明らかになってきた。それぞれのメリット・デメリットを教師が把握し、児童の実態や場面に合わせて、様々な教材・教具を選択できるようにする必要がある。
- ・ICTの活用が、どのように「対話的な学び」へとつながっているのかを検証していく必要がある。

III 成果物

- ・hyper-QUの分析結果、アタックシート
 - ・全校プロット図(2回分)
 - ・児童の実態調査
 - ・ICT学習会資料
 - ・NRT検査の分析結果
 - ・一人一実践指導案
- (研究主任 相澤 由佳)

「少人数学級における思考力・判断力・表現力の育成」
～アウトプットを意識した学習を通して～

I 研究の内容

1 研究目標

学習過程において、アウトプットを意識した授業の工夫と改善を図っていくことで、子供たちの主体性と思考力・判断力・表現力等を育むことを目指す。

2 具体的内容

(1) 低学年部会の具体的内容

- アウトプットを前提に見通しをもって活動を行う。
 - ・学習の中でどんな表現活動を行うのかを確認して学習を行う
 - ・考えるための時間を確保する。
- 語彙を増やす取り組みを行う。
 - ・帰りの会の時にスピーチ活動をおこなう。スピーチ原稿のためのメモを用意する
 - ・朝読書など読書活動の充実。
 - ・N I Eを推進する。新聞を活用していく。
- 「書く」活動の指導の充実。
 - ・授業で学習感想を書く時間（5分）を確保する。
- 一人一台端末などI C Tの活用
 - ・教材・教具や学習ツールとしてI C Tを積極的に活用する。

(2) 高学年部会の具体的内容

- アウトプットを前提に見通しをもって活動を行う。
 - ・見通しをもたせるため活動の前に、何のためにするのか（友だちと交流する、みんなの前で発表する、他の学年に説明する、掲示するなど）を伝える。
 - ・活動時間を確保する。
- 語彙を増やす取り組みを行う。
 - ・帰りの会で日直によるスピーチ活動、集会や始業式などでの感想発表
 - ・辞書引き
 - ・クイズ形式での言葉の掲示（慣用句等）
 - ・N I Eを推進する。
- 「書く」活動の指導の充実
 - ・新出漢字や意味調べをした語を使って文作り
 - ・授業の最後に学習感想を書く時間を確保する。
〔学習感想には、分かったこと、よく分からなかったこと、もっと知りたいことなどを書かせる。（楽しかった、おもしろかったではなく）〕
 - ・神小ノートに短文で1日の振り返り
 - ・神小ノートにめあてと学習の振り返り

- ・板書以外に学んだことや気付きを自分でメモできるようになるために、声をかけたり、書いているものを紹介したりする。

○一人一台端末などICTの活用

- ・調べ学習，資料の提示，スライドの作成等に活用
- ・ジャムボードでの活動，アンケート形式でのミニテスト等

(3) 授業づくり

- ①児童の実態把握
- ②一人一実践と研究授業の実施
- ②「ふるさと学習」の取り組み

(4) 学習基盤づくり(甲州プロジェクトと関わって)

- ①Q-U 調査の実施(2回)と分析
- ②互いに認め合い，高めあえる集団づくりを目指した学級活動の取組
- ③「朝の基礎学習」の取組
- ④家庭学習や学習規律の確立の取組

3 一人一実践

第1学年算数科「かたちあそび」	大島めぐみ教諭
第2学年算数科「かけ算(1)」	小石澤淳子教諭
第5学年算数「四角形と三角形の面積」	保坂 恵教諭
第6学年理科「電気とわたしたちの暮らし」	飯田 憲政教諭
第6学年道徳科「正義の実現のために」	前島 国学教諭
第5・6学年保健体育科「けがの予防」	加藤 真菜教諭

II 成果と課題

1 成果

- ・児童の実態から主題を設定し，少人数学級の中で思考力・判断力・表現力等を育てるために，アウトプットをキーワードとして研究や授業実践をすることができた。
- ・一人一台端末やICT機器の利用や活用について研修を深めることにつながった。一人一実践をお互いに参観することで，活用の仕方を学ぶことができた。
- ・感染症対策をとりながら，地域学習をすることができた。発表のため，児童がICTを活用したことも成果であった。

2 課題

- ・できるだけ内容を精選し，効率のよい研究を進める必要がある。
- ・集団づくりについて，少人数の学校なので，より深い関係のあり方など，まだよりよく伸ばしていく価値があると考えます。
- ・児童が課題を理解することがアウトプットにつながるため，より一層，基礎学力の定着をはかりたい。

III 成果物

- 1 一人一実践授業案
- 2 ふるさと学習実践資料

(研究主任 大島 めぐみ)

個を高める確かな学力の育成

～ICTを活用した授業づくり～

I 研究の内容

1. ICTを効果的に活用した授業づくり

(1) 学習会 (chromebook 活用方法)

(2) 指導主事を招聘しての学習会

「ICTを活用した授業づくり」講師 義務教育課 櫻井 順矢 副主幹・指導主事

(3) 情報交換会

(4) 一人一実践授業及び効果の検証

・ 第1学年 生活科「きせつとあそぼう ーあきー」

授業者 畠山 忠 教諭

・ 第3学年 社会科「火事からまちを守る」

授業者 田邊真由美 教諭

・ 第4学年 総合的な学習の時間「玉宮の自然」

授業者 川崎 幸江 教諭

・ 第4学年 特別支援学級自立「詩を読んだり言葉をつなげたりしよう」

授業者 柏原 真澄 教諭

・ 第5学年 総合的な学習の時間「玉宮水神池自然公園で米づくりをしよう」

授業者 青木 恵 教諭

・ 第6学年 国語科「古典芸能の世界」

授業者 青木 宏美 教諭

・ 第6学年 理科「変わり続ける大地」

授業者 滝島 正彦 教諭

2. 学習基盤づくり (甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと関わって)

(1) 学習規律の確立に向けた取組

ア「玉宮小学校 学習のルール」の確認・全校での取組

イ「学習のきまりふりかえりシート」を活用しての児童による自己評価・改善に向けての取組

(2) K13法による hyper-Q-U の分析と対策

(3) 家庭学習の充実に向けた取組

ア 玉宮小「家庭学習の手引き」の見直しと作成

イ 「こつこつバンク」の見直しと作成

ウ 自主学習ノートの掲示

(4) アウトメディアに向けた取組

3. その他の取り組み

- (1) 教育課程遷流報告会
- (2) 全国学力・学習調査の分析
- (3) NRT検査の分析と対策

II 成果と課題

1. 授業づくりに関わって

GIGA スクール元年となる今年度は、学習会や情報交換会、一人一実践授業及び研究会を行い、ICTの効果的な活用について研究を進めてきた。

指導主事を招聘しての学習会では、Google for Educationの基本的な操作を教えていただいたり、活用事例などを紹介していただいたりした。情報交換会では、一人ひとりが試行錯誤しながら実践した授業を報告し合い、ICTの効果的な活用方法や場面等について共有した。また、一人一実践授業では、お互いの授業を参観し合い、参観後には研究会を設け、効果の検証を行った。

その結果、様々な教科・場面（教員による教材の提示、調査活動、表現活動、協働制作等）における1人1台端末の活用方法について学び合い、お互いの実践に活かすことができた。また、研究会では、1人1台端末を活用することが主体的・対話的で深い学びにつながっていたか、本時のめあてを達成するための手段として効果的に活用されていたか等、議論する中で、理解を深めることができた。

今後、さらに教員のICT活用のスキルアップを図ることで、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりにつなげていきたい。また、情報セキュリティ、情報モラル教育の指導も同時に進めていきたい。

2. 学習基盤づくりに関わって

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと関わって、学習基盤づくりを進めてきた。学習規律の確立に向けての取組では、定期的に児童が自己評価することで、児童の意識付けだけでなく、教師側の指導重点についても確認ができた。

集団づくりの取り組みでは、年2回のQ-Uアンケートの結果を全職員で分析・対策を行うことで共通理解が図られ、日々の児童観察や生徒指導、声掛け等に活かされた。今後、小規模校の実態に合わせた実施を考えていきたい。

家庭学習の充実に向けた取組では、自主学習ノートの掲示を行ったり、こつこつバンクに学習の記録を残したりすることにより、児童の意欲や関心が高まった。ほとんどの児童が毎日自主学習に取り組んでいるが、学習内容については個人差があるので、今後も個に応じた指導が必要である。

アウトメディアに向けての取組では、児童だけでなく家庭の意識を高めるのにも有効であった。今後、上手なメディアとの付き合い方について、さらに家庭との連携を密にして取り組んでいくとともに、児童自身によるタイムマネジメント力も高めていきたい。

III 成果物

- ・ICTを活用した各教科の授業案，教材

(研究主任 青木 恵)

『全ての児童の「主体的・対話的で深い学び」を めざした授業づくり』

～ICTの活用を通して～

I 研究内容と方法

1 具体的な研究内容

(1) 授業改善に関わって

○授業改善におけるICTの活用に関する学習会と授業実践

- ・「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童を育成するための理論研究
- ・児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現するICTを活用した授業の実践
- ・ICTの活用方法に関する学習会

(2) 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトに関わって

○確かな学力を育成するための取り組みの継続

- ・Q-U検査とK-13法の実施
- ・朝学習・家庭学習への取り組み
- ・授業の構造化と授業改善

2 研究の方法

(1) ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」についての研修・指導主事を招いての理論研修

(2) 「確かな学力」育成プロジェクトに関わる取り組みの検討・実践

(3) ICTの活用方法に関する学習会

(4) 一人一実践

3 具体的な取り組み

(1) 学習会

ア 「授業等におけるICTの有効的な活用方法」

講師 山梨県総合教育センター

岡田 幸久 指導主事

イ 「Google chromeを使ってみよう」

講師 山梨県産業短期大学校

安本 岳志 准教授

(2) 研究授業

第4学年 岡村 澄人教諭 算数科「計算の約束を調べよう」
※ 峽東教育事務所 中村 弘和 指導主事を招いての研究会を実施

(3) 一人一実践

- ・ 第1学年 中村 悦子教諭 国語科「ものの名まえ」
- ・ 第2学年 小野 愛子教諭 生活科「町のすてきをはっぴょうしよう」
- ・ こすもす 高石 圭子教諭 国語科「かんじをいくつかの部分に
色分けしておぼえよう」(2年)
- ・ 第3学年 岩下 和子教諭 算数科「分数を使った大きさの表し方を考えよう」
- ・ ひまわり 菰原 美海教諭 算数科「四角形の特徴を調べよう」(4年)
- ・ 第4学年 古屋 岳治教諭 理科「閉じこめた空気と水」
- ・ 第5学年 川崎江里子教諭 算数科「単位量あたりの大きさ」
- ・ 第6学年 黒瀬 貴広教諭 社会科「武士の政治が始まる」
- ・ 第6学年 大村 隆 教諭 外国語「Unit6 This is my town」
- ・ たんぼぼ 窪川純一郎教諭 算数科「場合の数」

II 成果と課題

1 成果

- ・ 講師を招いての学習会を早い時期に行えたことで、理論を共有し、実践につなげることができた。
- ・ 発達段階が違う低学年・高学年の部会に分かれ、それぞれの学年でどのように活用していくかを具体的に学び、共有できた。ICT 端末を操作しながら学び合えたことで、個々のスキルアップにつながった。
- ・ 「まずはやってみる」という姿勢で、全員が積極的に ICT 端末を活用した授業を行うことができた。また研究授業や一人一実践という形で、実際の授業での活用方法について学び合えたこともとても有効であった。
- ・ Q-U の分析結果を職員が共通理解し、学級集団づくりに効果的に取り入れていくことができた。また、今年度初めて取り組んだアウトメディアの取り組みは、保護者からも「続けてほしい」という意見が多く、意義のある取り組みとなった。

2 課題

- ・ 本年度は研究の1年目として「ICT 端末の活用」については成果があった。しかし今後は「ICT を生かした主体的で対話的な深い学び」へと研究を進める必要がある。
- ・ ますますオンライン授業や ICT の活用が進む中で、更なる研究の積み重ねが必要。
- ・ 授業の公開は学ぶことがたくさんある。来年度は年度初めから実践を公開し合い、参観の機会を増やしていきたい。

(研究主任 岩下和子)

思考力・判断力・表現力の育成 ～ICTを積極的に活用した授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 研究の目標

○ICT機器を積極的に活用し、より主体的、協働的な学びとなるように課題設定や学習活動の工夫をすることによって、子ども達の学習意欲を高め、「思考力、判断力、表現力」を育成する。

2 研究の具体的内容

(1) 学級づくり・集団づくり

ア Q-Uアンケート実施及びK13法による分析・「今後の対応策」の検討
イ 各学年の「今後の対応策」の共有化、不満足群の児童の再確認

(2) 授業づくり・授業改善

ア 「自分の考えを持たせるための手立て」「自分の考えを表現する場の設定と言語活動」「自分の考えを深めるための手立て」を考え、実践を積み重ねる。

イ ICT機器を積極的に活用しながら、「甲州市 Teacher's Note」に沿った授業づくりを行う。

第5学年 道徳科授業研究「ロレンゾの友達」

授業者 守屋 博貴教諭

指導・助言 峡東教育事務所 中村 英彦主幹・指導主事

ウ 学習会「一人一台端末の活用方法について」

講師 山梨県総合教育センター 笠井さゆり副主幹・指導主事

エ 一人一実践（授業研究者以外全員）

オ 授業の構造化 板書用「めあて」「まとめ」プレートの活用

カ Q-U分析結果を載せた指導案づくり・座席表づくり

キ 授業において子どもが「思考・判断・表現」している具体的な姿についての意識調査の実施（年2回）

(3) 保護者との連携

ア 「家庭学習の手引き」を利用した家庭学習ノート（いじりの子ノート）の指導・保護者への周知

イ 各学年の取り組みについての情報交換・系統的な支援の共通理解

ウ 授業参観に合わせた「いじりの子ノート展覧会」の実施

エ アウトメディアの取り組み

II 成果と課題

1 成果

- (1) K13 法による Q U 分析の実施で、自分の学級を改めて見直すきっかけになった。また、「今後の対応策」を全職員で共有化したことで、普段気づかない部分をアドバイスしてもらったり、より多くの目で確認をしてもらったりしたことがよかった。
- (2) I C T 機器を活用し、より主体的、協働的に学習することで「思考力・判断力・表現力」を育成するための授業づくりについては、意識調査を参考にしながら、授業づくり・授業改善に努めることができた。また、さまざまな教科で、I C T 機器を積極的に活用したり、分からないことは職員間で教え合ったりすることもできた。
- (3) 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの講演会は、どれも充実した内容のものばかりで、自分自身の教育活動を振り返ることができた。日常の授業や教育活動にどのように生かしていくかで、価値も変わってくる。保護者に啓発していくことも大切であると感じた。
- (4) 「いじりの子ノート」は、全職員共通理解のもと繰り返し取り組んだ。アシストカードの提示・活用などの工夫が、レベルアップにつながった。「いじりの子ノートアイアイ週間」は、担任以外の先生に見てもらえるため楽しみにしている児童も多かった。

2 課題

- (1) アタックシートを全体で交流・情報交換したことによって、ある程度は共有できたが、十分に生かしきるところまでには至らなかった。また、アタックシート集を更に活用し、対応策をその中から選ぶような方策もとっていきたい。
- (2) I C T 機器を用いることで、児童がより主体的に学ぶ姿がどの学年でも見られた。また児童の意識調査からも、学習意欲が高まっていることが分かった。しかし、I C T 機器を用いた時の学習のルールの徹底ができていなかったり、I C T 機器を使う場面の見極めが不十分で、めあてが達成できなかつたりすることもあったので、今後も継続して研究していきたい。
- (3) 「家庭学習の手引き」・「いじりの子ノート」については、今後も年度初めに、職員の意志の統一を図っていきたい。保護者には家庭学習の意義が伝わっていたと思うが、なかなか成果につながらない児童もおり、個別に支援することの必要性を感じた。児童が、いじりの子ノートをすることの良さを実感し、継続していけるような指導を今後も考えたい。

III 成果物

- 1 Q-Uアタックシート（全学年）
- 2 授業研究授業案・一人一実践授業案及び実践のまとめ
- 3 授業において子どもが「思考・判断・表現」している具体的な姿についての意識調査
- 4 井尻小「家庭学習の手引き」（低・中・高）
- 5 いじりの子ノートアシストカード

（研究主任 遠藤香織）

「自ら考え、進んで表現できる児童の育成」
～主体的・対話的で深い学びを意識した授業の工夫と改善～

I 研究内容

1 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ア 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業研究を行う。
- イ 「主体的・対話的で深い学び」の授業につながるICT活用の学習会を行う。
- ウ 研究を生かし、ICTを効果的に活用した一人一実践の授業を計画的に行う。
- エ 児童の実態把握と分析を行う。
- オ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究を行う。

(2) 研究方法

- ア 全体研究会とブロック研究会(低学年・高学年)を取り入れた研究体制で研究を行う。
- イ 研究授業に講師を招き、研究会を行う。
- ウ 一人一実践の授業公開を行う。
- エ NRT検査やQ-U、研究テーマに関わるアンケートを行い、児童の実態について把握し、具体的な指導法を研究する。
- オ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究を行う。

2 具体的な取り組み

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業の改善と工夫

- ア 主体的・対話的で深い学びの授業につながるICTの積極的活用
- イ 多様な考えに触れ、考えの変容を意識した、授業のポイントの工夫

(2) Q-U調査の結果を分析

- ア 各学級ごとのQ-U調査の結果を分析
 - ◇K-13法(簡易版)を取り入れたQ-U調査の結果の分析を実施。低・中・高のブロックごとに検討会を行い、各学級の実態に応じた対応策を共通理解する。
- イ アタックシートの作成と取り組みの成果の検証
 - ◇各学級の実態に応じた取り組みの実践と、その後の学級の変容を検証。

3 具体的実践

(1) 学習会

「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業へのICTの活用
・ロイノート ・Jambord ・Forms 等の授業への活用方法

(2) 実態調査

学習に関わるアンケート(第1回 7月, 第2回 1月)

(3) 授業実践

ア 研究授業

・第5学年 保坂洋仁教諭 算数科「比べ方を考えよう」

指導助言:山梨県総合教育センター 指導主事 廣瀬雅美先生

イ 授業公開(一人一実践)

・第1学年 志村多恵教諭 道徳科「あいてをおもいやって」

- ・第2学年 前田 文教諭 国語科「わたしはおねえさん」
- ・第3学年 山岸美香教諭 国語科「山小屋で三日間すごすなら」
- ・第4学年 内田俊彦教諭 算数科「広さの表し方を考えよう」
- ・第6学年 伊藤 健教諭 算数科「円の面積の求め方を考えよう」
- ・たんぼぼ 相川和彦教諭 算数科「ならした大きさを考えよう」
- ・コスモス 平山菜穂教諭 国語科「作文を作って発表しよう」
- ・専科教諭 荻原幸菜教諭 図画工作科第4学年「絵を語ろう」
- ・外国語専科 兼山茉佑子教諭 外国語「My Best Memory」

II 成果と課題

1 成果

- (1) GIGAスクール事業も本格的にスタートした中で、ICT活用の学習会は大変有意義であった。ICTは実際に使ってみないと活用できないと感じられた。今後も積極的にOJTを進め、ICTを授業に取り入れ、ICT端末を児童も日常的に使いこなせるようになってほしい。また、一人一実践の授業でもICTの様々な活用の仕方を見ることができてよかった。
- (2) 研究授業では、情報端末をフルに活用されていた。児童の様子からも戸惑いなくICT端末を操作していて、学習スタイルの一つとして浸透していることが見て取れた。ICT端末を持ち帰り、課題を達成しようとする様子も感じられ、使い方の幅を感じることができ、参考になることがたくさんあった。
- (3) 低・中・高の3ブロックに分かれ、K-13法によるQ-Uの分析を協働して行うことができた。人間関係やクラスの雰囲気、問題を抱えている児童の存在があるかなど、学級を振り返ることにつながった。学級経営、ホームルーム経営の充実の為に有意義であった。
- (4) 市の統一取り組みの内容が習慣化され定着につながってきている。甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの教育講演会も今の学校現場に必要な力を学ぶことができとてもよい機会となった。今後も連携を進めていきたい。

2 課題

- (1) 研究主題と授業実践をつなげる要素がはっきりすると、日常の授業に大きく生きる研究になるのではないかと。研究テーマを具現化する、具体的な方策が明確になるとよい。
- (2) 継続して「表現」に関わるテーマでよいと思うが、研究・実践の成果が具体的に見えるような形として取り組むことができるとよい。(例:学習版勝沼小ギネス等)
- (3) 実効性のあるICTの活用をもっと進めていきたい。低学年では文字入力難しいという実態がある。低学年の授業でどのように活用できるのかを考える機会もつくっていく。

III 成果物

- 1 研究授業及び公開授業の指導案10点
- 2 学習に関わるアンケート結果(2回実施)
- 3 Q-U調査の結果(2回実施)

(研究主任 相川 和彦)

「学習の基盤となる言語能力を身に付けた児童の育成」

—読む・書く・聞く・話す・話し合う等の言語能力向上に向けた授業づくりを通して—

I 研究の内容

本年度は、研究主題に迫るために、国語科を中心に、授業作り・授業実践に取り組んだ(2年目)。読む・書く・聞く・話す・話し合う等の学習活動を工夫し改善することで、児童の言語能力の育成が図られるという仮説の元、授業や日常的な取り組みを大切にして校内研究に取り組んだ。

1 国語科を中心とした授業実践

各学年で研究した国語科を中心とした授業を公開し、参観し合った。授業後には授業改善のための手立てについての意見交換の場をもった。

ブロック(低学年・高学年の2ブロック)の中で、学年児童の課題について共有し、発達段階に応じた課題についても共通理解を図って授業を構想した。全学年で実践を行い、児童の実態に応じた工夫や手立てについても学び合った。

(1) 授業実践

第1学年国語科授業実践	単元名	よんでたしかめよう	「うみのかくれんぼ」
第1学年特別支援学級国語科授業実践	単元名	すきなことなあに	
第2学年国語科授業実践	単元名	あつめるときにつかおう	「メモをとるとき」
第3学年国語科授業実践	単元名	わかりやすい文章を書くために、説明の工夫について話し合おう	
第4学年国語科授業実践	単元名	伝統工芸のよさを伝えよう	
第5学年国語科授業実践	単元名	本は友達	作家で広げるわたしたちの読書
第5学年理科授業実践	単元名	物のとけ方	
第6学年国語科授業実践	単元名	みんなで楽しく過ごすために(目的や条件に応じて、計画的に話し合おう)	

2 喫緊の課題に対応した研修と研究授業後の学習会

ICT 端末利活用の実践を積み重ねるために、「GIGA」研修(5月・8月実施)を行った。全校集会や日常の授業に ICT 端末利活用の機会を増やすことができた。「GIGA」研修を通して、教員同士の情報交換も活発になり、スキルアップにつながった。

「いじめを許さない集団づくりを目指す」研修(10月実施)では、NITS(独立行政法人教職員支援機構)の動画を使った。社会通念上のいじめと法的ないじめの区別や、いじめが集団の問題であるという点について、具体的な場面を考えながらいじめのとらえ方を確認し、いじめの未然防止について考えることができた。

興水美香指導主事にお越し頂いた研究授業後の学習会（11月実施）では、研究主題設定の仕方や国語科における言語活動を「深い学び」につなげるための授業づくりのポイントを学んだ。さらに、系統性を見ることの大切さも教えて頂き、大きな学びとなった。

3 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

3部会との連携を図り、Q-U検査の実施（年2回）と分析・活用、家庭学習の推進、「家庭教育・子育てQ&A」の活用等の取組を全職員の共通理解のもと行った。中でも、アウトメディアの取組に関しては、学校保健委員会（1学期実施）の学習会で、山梨県教育庁生涯学習課の小沢哲也先生から「今こそ考えよう！スマホやゲーム機の使い方」との演題でゲーム障害やネットトラブルについて教えていただき、保護者と共にアウトメディアチャレンジシートの取組（11月実施）につなげることができた。

II 成果と課題

1 成果

- ・国語科を研究し、授業と日常的な取り組みを行う中で、教職員・児童共に学習の基盤となる言語能力向上に向かうことができた。また、全学級の授業を学び合ったことで、発達段階における課題やその先の見通しについても考えることができた。
- ・授業後の共有化の時間の確保は、授業者・参観者共に国語科の授業づくり、授業改善につながる学習の場となった。言語活動の具体的な手立てを、実践で検証するなかで、「主体的・対話的で深い学び」のある国語科の授業づくりができた。
- ・国語科4領域の児童の学力向上につなげることができた。
- ・ことわざ検定を毎年行っている。本校の伝統となっている。検定を通し、基礎学力・粘り強さを身につけること・自己肯定感の高まり等の成果を感じる。

2 課題

- ・【話す・聞く】【読むこと（説明文）】について、児童の主体的な学びが実現できるように、学ぶことの楽しさや学ぶことの意義を全ての児童が感じられるように、継続指導をしていく。
- ・児童が身に付けたことわざや対話力を生かし、さらに言語能力を高めていく。
- ・「主体的・対話的で深い学び」が可能な学習集団づくりのために、地道な継続指導をしていく。

III 成果物

- ・授業実践の指導案，実践記録，ワークシート，資料等
- ・祝小家庭学習の手引き ・学校生活意識調査



（研究主任 小林 淳子）

「主体的に運動を楽しむ児童の育成」
～体を動かす楽しさや喜びを感じる体育の授業を通して～

I 研究の内容

- 1 体育科における「体を動かす楽しさや喜びを感じる」を意識した授業づくり
- 2 遊びを通じた体力づくり
 - (1) 環境整備 (校庭・体育館)
 - (2) 教材, 教具の工夫
- 3 日常的な体づくりなどの活動紹介
 - (1) おたより, 掲示物
 - (2) 遊びの紹介
- 4 児童の実態把握
 - (1) 新体力テスト
 - (2) 体育アンケート
 - (3) Q-U 検査, NRT 検査と K13 簡易法を用いた学級づくり

II 研究の方法

1 学習会

- (1) 「体を動かす楽しさや喜びを感じる活動や授業の在り方について」

山梨県教育委員会保健体育課 清水宏次 主幹・指導主事

- (2) 「主体的に運動を楽しむ授業づくり」

山梨県教育委員会保健体育課 清水宏次 主幹・指導主事

- (3) 「もっと楽しい体育授業で体力アップ！」事業

カメラリアスポーツクラブ望月一徳さん 甲州スポーツクラブ中村実さん

山梨県教育委員会保健体育課 清水宏次 主幹・指導主事

2 研究授業

- ・第4学年 体育科 A体づくり運動 イ多様な動きをつくる運動

「Win Shinonome Olympic Gold Medal」

令和3年11月25日(木) 授業者 阿部伸之介教諭 中村伸也教諭

指導助言 山梨県教育委員会保健体育課 清水宏次 主幹・指導主事

3 運動の日常化の取り組み

- (1) 休み時間を活用した遊びを通じた体力づくり, 運動の場づくり, 掲示物, 検定
(遊具, ボール投げ, エイトマン, なわとび, ドリブル, 一輪車, 竹馬等)

(2) 遊びを通した体力づくり運動を全校一斉に行う「東雲チャレンジデイ」の取り組み(10月28日, 12月10日に実施)

(3) 全校集会での先生たちの遊びの紹介(竹馬, 一輪車, ゴム跳び, Gボール)

(4) 健康についての絵本の読み聞かせとクイズ

4 一人一実践報告

Ⅲ 成果と課題

令和2年度・3年度の「山梨県小中学校体育連盟保健体育研究推進指定校」となり,今年度は11月25日に公開研究会を行い,4年生が主体的に生き生きと運動する体育の授業を多くの先生方に参観していただくことができた。

研究主題「主体的に運動を楽しむ児童の育成～体を動かす楽しさや喜びを感じる体育の授業を通して～」に向けて,重点目標「①自らすすんで運動することを楽しむ児童の育成」「②どの子ども運動することを楽しむことができる児童の育成」を設定した。体を動かすことを楽しみ生き生きと運動する子供の姿を目指して,体育の授業づくりだけでなく休み時間の子供たちの運動の日常化に向けて研究を進めてきた。

学習会で清水指導主事から「三間(時間・空間・仲間)」を教えていただき,運動時間を確保すること(時間),場を作り教材を用意すること(空間),どの子ども仲間と協力することで楽しく活動できるようなルールを工夫すること(仲間)を意識して授業づくりを行った。運動する場が日常的にあることで,体育の学習にもさらに意欲的に活動ができるようになった。

運動の日常化に向けて,校庭にストラックアウトやバトンスローを常時設置したり,遊具に掲示をしたり,8秒間で何メートル走れるのか挑戦する「エイトマン」,30秒で「ドリブル」何回できるか等の多くの運動の場を用意したりすることで,子供たちは自らすすんで運動することを楽しむ姿が見られた。そして,たくさんの運動を経験してきた集大成として,全校で一斉に取り組む「東雲チャレンジデイ」を2学期に2回行い,それに向けて休み時間に練習する等とても意欲的に活動ができた。来年度も継続して取り組む予定である。

全校集会で先生方が一輪車や竹馬に乗る姿を披露することで,今まで経験したことがなかった子供たちもすすんで一生懸命練習する姿が見られた。先生たちも休み時間に一緒に外で遊ぶことも増え,子供も先生も生き生きと輝くことで学校全体が活気あふれる雰囲気になったことは,とても大きな成果であった。

また,甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとも連携し,望ましい学級集団づくりを基盤とし,今後も児童一人一人の成長を目指していきたい。

Ⅳ 成果物

- 1 研究授業の体育科指導案,一人一実践の指導案,学習カード
- 2 全校での「東雲チャレンジデイ」の取り組み,遊びを通した体力づくりの充実
- 3 教材教具の工夫と活用

(研究主任 菱澤 里美)

主体的に学び、よりよく生きようとする児童の育成 ～考え、議論する道徳科の実践を通して～

道徳科の学習過程において「多面的・多角的に考え、議論する」場面を設定し、授業の工夫をしていくことで、よりよく生きようとする児童の育成を目指していきたいと考えた。

I 研究の具体的な内容と方法

1 理論研究，学習会

「考え、議論する道徳」の授業について

講師 山梨県総合教育センター 主査・指導主事 天野秀太郎先生

2 児童の実態調査

道徳の学習アンケート

道徳の授業に対するアンケートを1学期と3学期の2回実施し、実態と変容を把握することで指導に生かした。

3 道徳の授業実践

(1) 研究授業

第1学年

授業者 三森 美礼教諭

主題名 温かい心で親切に (B親切, 思いやり)

教材名 「はしの上のおおかみ」 (小学道徳1 教育出版)

指導・助言 峡東教育事務所指導主事 中村弘和先生

(2) 一人一実践

第2学年

主題名 楽しく働く (C 勤労, 公共の精神)

教材名 「ゆかみがき」 (小学道徳2 教育出版)

授業者 廣瀬きよ美教諭

第4学年

主題名 感謝の思い (B 感謝)

教材名 「学校の歴史」 (小学道徳4 教育出版)

授業者 金井 京子教諭

第5学年

主題名 ネットいじめをなくそう (C 公正, 公平, 社会正義)

教材名 「だれかをきずつける機械ではない」 (小学道徳5 教育出版)

授業者 内田絵理奈教諭

第6学年

主題名 みんなの幸せのために (D よりよく生きる喜び)

教材名 「日本を守るために」 (小学道徳6 教育出版)

授業者 志村克人教諭

(3) 学習会

PCスキルアップ演習「一人一台端末の活用」

提案者 築城豪佑助教諭

3 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

(1) 学級集団づくり

Q-U検査とK-13法の実施，結果を生かした児童理解と学級集団づくりへの取組

(2) あいさつ，学習規律

毎朝毎夕の職員室へのあいさつ，児童会を中心とした「あいさつビンゴ」等の取組

(3) 自主学习・学習スタンバイ

1:10 ~ 1:55	5校時
1:55 ~ 2:00	学習スタンバイ
2:00 ~ 2:10	帰りの会
2:10 ~ 2:55	6校時

学習スタンバイの時間の日課表への位置づけ

(4) 家庭との連携

「家庭教育/子育てQ&A」「家庭学習の手引き」の活用，アウトメディアに関わる取組

II 成果と課題

1 成果

- ・指導主事を招聘しての学習会や研究授業は，本校のテーマに沿った課題や疑問にそった具体的な内容で学ぶことが多く，研究の参考になった。
- ・研究授業や一人一実践の授業において，理論研究で学んだ「物事の多面的・多角的な捉え」「発問の工夫」「導入の工夫」等を意識し，それらを生かすかたちで授業実践を行うことができた。児童の実態に合わせ，様々な指導方法の工夫を取り入れた授業が行われたことに加え，授業後の研究会でも活発な意見交換がなされた。
- ・1学期と3学期に行った道徳アンケートでは，全校児童の実態や変容を見取ったことにより，実践に行かすことができた。

2 課題

- ・児童の考えを深めさせたい場面での「問い返し」や，授業の中でのICTの効果的な活用法については，さらに実践の場での取り組みを重ねていく必要がある。

III 成果物

- 1 研究授業指導案
- 2 一人一実践の指導案
- 3 児童の道徳意識調査

(研究主任 金井 京子)

大和小学校

「学び合い高め合い意欲的に学ぶ児童の育成」

～対話的な学びの実現に向けた授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 対話的な学びを取り入れた授業づくり

(1) 研究授業及び研究会

第4学年 道徳「本当の友達とは」

指導助言 北杜市ほくとっこ元気課 内藤 雅人 先生

(2) 実践授業及び振り返り

第1学年 算数「どんなけいさんに なるのかな？」

第2学年 国語「自分とくらべて、かんそうを書こう」

第6学年 算数「データの特徴を調べて判断しよう」

ひまわり学級 生活単元学習

「みんなを招待して、ミニ学習成果発表会をしよう」

さくら学級 国語「じどう車ずかんをつくろう」

(3) 講師を招聘しての学習会

ICT 活用についての学習会

講師 義務教育課 副主幹・指導主事 小林 紀浩 先生

特別支援教育学習会 講師 菱山小学校 校長 岡 輝彦 先生

授業づくり学習会（菱山小・大和中合同）

講師 全国ネット・菊池道場 道場長 菊池 省三 先生

2 意欲的に学ぶ学習集団づくり

(1) 学習規律の確立

- ・「大和小学習のきまり」の定着
- ・学習規律に関するアンケートの実施と分析

(2) Q-U 調査の分析と対策

- ・年2回 Q-U 調査の実施
- ・K-13 法による分析と対策

3 家庭と連携した学習環境づくり

(1) 家庭学習習慣化の取組

- ・自主学習の取組についてのアンケート実施
- ・自主学習掲示板による自主学習の紹介
- ・自主学習強化週間（チャレンジ週間）の実施
- ・自主学習ビンゴの取組

- ・家庭学習の必要性などについての家庭への啓発
- ・大和小自主学習スタンバイの確立

II 成果と課題

1 授業づくりに関わって

研究授業，一人一実践では，対話的な学びを取り入れた授業実践を行った。4年生道徳の研究授業では，グループでの話し合い活動や役割演技を取り入れ，より考えを深められるような授業を行った。また，内藤雅人先生に研究授業の指導助言をしていただき，道徳の授業づくりについても指導していただいた。一人一実践では，ペアやグループ等を取り入れた学習形態の工夫，ICT 端末の活用，話し合いのルールの提示等，様々な手立ての工夫が見られた。全員が授業を公開し，お互いの授業を見合うことで，それぞれの児童の実態にあった指導の工夫や手立てについて学び合うことができた。

2 学習集団づくりに関わって

2回のQ U検査を行い，K 1 3法を全職員で行ったことで，全学年の実態を知り，問題点に対して様々な視点から解決法を探ることができた。小規模校のよさを活かし，全職員が共通理解したうえで，指導にあたることができた。また，ヘルプサインポジティブチェックにより，個への対応を細かく考えることができた。前回のアタックシートや，他校の取組も参考にしながら，対応策を考えることができた。

「大和小学習のきまり」については，児童用の評価規準をもとに，児童が意識して取り組んでいた。日常的な声掛けを行い，さらなる定着を目指して取り組んでいきたい。

3 学習環境づくりに関わって

ほとんどの児童が毎日自主学習に取り組むことができている。3回の自主学習チャレンジ週間を通して，多くの職員でノートを見たり，ビンゴの取組をしたりすることで，様々な内容に取り組むようになり，学習の幅が広がった。また，今年度から自主学習掲示板の場所を校長室前の廊下にしたので，掲示されたものをじっくり見ることができるようになり，他学年のものを参考にしたり，お互いに声をかけあったりして，児童の関心や意欲が高まった。自主学習スタンバイの記入についても定着している。今後は，めあて，振り返りの記入，内容のスキルアップについて指導をしていきたい。

III 成果物

研究授業，実践授業の授業案（ワークシート等も含む）

Q U検査の分析結果，アタックシート

大和小学習のきまりと評価規準 自主学習ビンゴ

（研究主任 飯室 美華）

学 校 研 究

中 学 校

山梨南中学校	・ ・ ・ ・ ・	4 7
山梨北中学校	・ ・ ・ ・ ・	4 9
笛川中学校	・ ・ ・ ・ ・	5 1
塩山中学校	・ ・ ・ ・ ・	5 3
塩山北中学校	・ ・ ・ ・ ・	5 5
松里中学校	・ ・ ・ ・ ・	5 7
勝沼中学校	・ ・ ・ ・ ・	5 9
大和中学校	・ ・ ・ ・ ・	6 1

「 確かな学力の定着・向上を目指した授業改善の工夫 」
～ 学びの質的向上と ICT を利活用した授業を通して ～

I 研究の内容

1 本年度の研究の重点

これまでの5年間で「確かな学力の定着と向上」を基本テーマとし、特に学力向上のために「やまなしスタンダード」をベースとした構造的な授業づくりと家庭学習の定着について研究を行い、多くの成果を挙げてきた。

そして今年度は、前年度までの研究を継続し、更なる定着と質的向上を目指すと同時に、GIGA スクール構想に伴う ICT 活用を積極的に実践することで、学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に繋げていく。

2 研究部会

(1) 教科別研究会

- ・「やまなしスタンダード」を取り入れた授業づくり・授業改善
- ・ICT の利活用，情報交換
- ・新しい教科書（学習内容含む）の進め方
- ・3 観点に伴う評価のつけ方

(2) 学年別研究会

- ・Q-U 検査の分析→個への対応，集団づくり
- ・学びの質的向上を目指した学級・学年集団づくり
- ・GU ノート（自主学習ノート）の取り組みから，授業改善の工夫につなげる
- ・キャリアパスポートの実践

(3) 本校の授業研究

全教職員が同じ視点で授業を観察するために、次の2つについて、事前に示した。

ア 「やまなしスタンダード」授業づくりの7つの視点（①～⑦）から、本時は特に何を意識した授業なのか。

イ 「主体的な学び，対話的な学び，深い学び」の中から、本時は特に何を意識した授業なのか。

◇道徳 1年4組 令和3年11月26日（金）実施

教材名 「ごみ箱をもっと増やして」

授業者 山本茂樹 教諭

ア 視点②話し合い，討論，発表などの言語活動を効果的に取り入れる。

イ 対話的な学び

コロナ禍ということもあり，jamboard を使用した。

授業後の研究会は、ワークショップ方式（付箋紙法）を採用し、全員参加型の研究会を展開している。小グループで可視化しながら、活発な意見交換をすることで、教職員が主体的に研究を進めることができる。

◇総合 2年3組 令和4年2月15日（火）実施

教材名 「学習への主体的・創造的な態度を育成する」

第2学年「修学旅行の取組を通して」

授業者 糠信恵理香 教諭 ・ 古屋浩紀 教諭

ア 視点②話し合い，討論，発表などの言語活動を効果的に取り入れる。

イ 主体的な学び

奈良調べとして，2人1組になって「建築・歴史・仏像」のテーマの中から一つを選び，そのテーマに沿って「ここ見てポイント」を調べ，発表する

(4) 学習会

・授業における ICT 端末の利活用に関する学習会 7月7日（水）実施

II 成果と課題

1 成果

- ・すべての教科において「やまなしスタンダード授業づくりの7つの視点」を取り入れた授業展開ができており，定着していると感じる。コロナ禍ということもあり，従来型の言語活動には制限があるが，授業で jamboard を取り入れる等，ICT の利活用を推進している。具体的には国語科で，classroom を利用して課題を提示し，jamboard で物語読解の意見共有をした。また，美術科では，学びポケットを利用して毎時間，自分の作品を写真で撮って記録を残し，クラスメイトからコメントをもらう機能を使っている。他にも数学科や社会科でデジタル教科書を利用した授業を展開し，大型モニターで図や表を効果的に使用している。
- ・自学 R.G. の時間では，学級担任が指導にあたり，一日の振り返りと家庭学習への見通しを持たせることができた。来年度以降も更なる定着を図りたい。
- ・クラス GU ノートを通して，ノートの使い方やまとめ方を共有し，振り返りや反省を書く等の工夫が見られ，個人 GU ノートの質を向上させることができた。

2 課題

- ・個人 GU ノートに一日の振り返りを書いているが，学習した内容（例えば単元名等）だけでなく，具体的に何を学んだのか，詳しく丁寧に書かせる指導をしたい。
- ・クラスも個人も GU ノートの質は高まっているが，家庭学習する教科に偏りがあることや取り組むページ数をどう増やしていくのかが課題である。

III 成果物

・学習指導案（1年道徳・2年総合）

（研究主任 村田勝一）

I 研究主題

自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と「考え、議論する」道徳の授業づくり～

II 主題設定の理由

学習指導要領では、社会において自立的に生きるために必要な「生きる力」を育むために身に付けさせる資質・能力として

- ①生きて働く「知識・技能」の習得
- ②未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成
- ③学びを人生に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

の三つの柱が掲げられている。単元の題材など内容や時間のまとまりを見通しながら「何を学ぶのか（教科の目標）」にとどまることなく「何ができるようになるか（資質・能力）」を明確に見据えたなかで「どのように学ぶのか（学習過程の改善、主体的・対話的で深い学び）」の授業改善、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学びの過程の重視を求めている。本校では、これまでに上に記した①～③の資質・能力を身に付けさせるために「どのように学ぶか」の更なる学びの質の向上に向けた研究・取組を行ってきた。

平成29年度から研究主題を「自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究～主体的・対話的で深い学びによる授業改善～」として3年間の継続研究に取り組んだ。

そのなかで研究の3つの柱として、

- 1 「思考・判断・表現力を高める取組（山北スタイルづくり）」
- 2 「基礎学力定着の取組」
- 3 「教材教具の開発・工夫とICT活用」

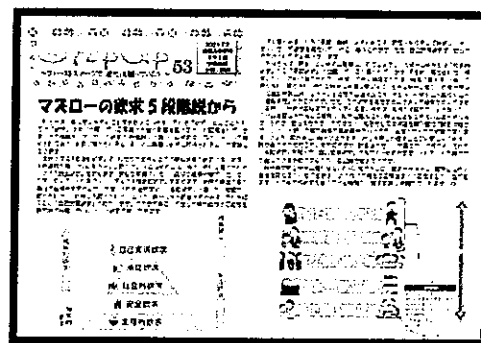
を通して主題にせまるべく研究を進めてきた。1年目に話型の研究（話し合いの手順や方法、発表のルール確立）、2年目に課題提示の工夫（考えるときの視点や方向性のもとになる「問い」づくり）、3年目にまとめと振り返りでの工夫に取り組んでおり、これまでの研究を継続する中で、授業過程の相互解決での話し合い活動の研究にも取り組むことができた。そして、本校は、令和元年度から令和3年度までの3年間、山梨県道徳教育推進事業の指定を受け「特別の教科 道徳」の研究の機会をいただいた。令和元年度は、「考え、議論する」道徳の授業づくりを目指して「発問の工夫」、及び「評価文（通知表への記述）」の研究へ取り組みを進めた。令和2年度は前年度の課題として挙げられた「生徒の意見を有効活用する手段の工夫」へも取り組むことができた。

そして今年度は、山梨県道徳推進事業の最終年度として、3年間の集大成とすべく、これまで培ってきた研究の成果を継続しつつ、さらに「補助発問の工夫」を重点項目として研究を進めていきたいと考えた。

Ⅲ 研究内容

1 基礎学力定着の取組

- (1) 学力を向上させるための自主学习ノートの活用
- (2) 朝読書→読書活動の定着
- (3) 山北サポートタイム，自学の時間等



(上図 学級通信 武藤英紀教諭)

2 教材教具の開発・工夫と ICT 活用

(1) 夏季休業中の校内研究会

「GIGA スクール構想 タブレットの活用について」 齊藤和裕教諭 山口啓史教諭

(2) ICT の活用

生徒に一人一台タブレットが貸与されている。授業で表に出ない生徒の意見を取り上げることや生徒の意見を共有するために使用した。全員の意見が一度に見えるため、考えの違いを知ることや新しい視点を得て、考えを深めることができた。また、自らの学習履歴の振り返りを行い、新たな気づきを発見できることや、個別最適化した学習の実現に向けて個々に課題を提示したり深めたりすることができた。

3 「考え，議論する」道徳の授業づくり

(1) 道徳教育研究推進校 授業公開 令和3年11月18日(木)

授業者	村田裕紀教諭	1 学年	遵法精神，公德心 (内容項目：C-(10))
	大村彩佳教諭	2 学年	相互理解，寛容 (内容項目：B-(9))
	今村裕樹教諭	3 学年	勤労 (内容項目：C-(13))

(2) 生徒の反応を予測し，問いを検討した発問作成シートの使用

発問に対する生徒の返答を予測し，問いを検討した。生徒の実態を考慮しながら，主発問はどのような問いが良いのか，また補助発問は何を問うべきか，を多面的で多角的に考えることができた。

(3) 振り返りシートの活用

令和元年度からの継続研究の中で生み出されたシートであり，全校生徒が共通して使用している。3年間，道徳教育推進校の指定を受け，昨年度までの研究主任や道徳推進教師が何度も文言の検討を重ねながら作りあげたものを今年度も活用している。振り返りシートの活用によって考えを深めることができた。

Ⅳ 成果と課題

○令和元年度からの継続研究の集大成として，公開授業研究会を実施できた。

▲学力向上に向けた基礎学力定着の取組を見直し，個別最適化及び教材教具の工夫等，各教科で工夫し取り組んでいることについて全体で共有する時間を確保していく必要がある。

(研究主任 秋山悦子)

研究主題

主体的に学習に取り組む生徒の育成
～対話の幅を広げ、深い学びの実現に向けた授業改善～

I 研究の内容

1 言語活動の充実

- (1) 主体的・対話的で深い学びを意識した継続的な授業実践（一人一実践授業）
- (2) 日常的な取組（生活ノート指導，学活，各教科指導 等）
- (3) 効果的に新聞を活用した実践（NIE）

2 深い学びへとつながる工夫

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と学習評価
- (2) ICTを活用した学習活動の充実

3 望ましい学習集団づくり

- (1) 保護者や地域・小学校との連携（家庭学習他）
 - ア「自主学習ノート」の有効活用
 - イ 家庭学習について，保護者にも協力を呼びかける。
 - ウ 学習規律や板書方法などを確認して徹底する。
- (2) Q-Uの分析と結果を活用した取組

II 成果と課題

1 自主学習ノートの有効活用について

笛川ノート（自主学習&生活記録ノート）を活用して家庭学習の充実を図るために本校では3つのことに重点的に取り組んできた。

(1) 家庭学習スタンバイの時間の徹底

家庭学習スタンバイの時間は，帰りの会前の5分間でその日の授業を振り返り授業の内容を思い出してポイントを書く時間になっている。取り組みの様子を見ると，学年の違いや個人差があり，書くスピードが個々に違うことがわかった。また，まとめきれず家庭で書いてくる生徒も見られた。スタンバイの時間で笛川ノートをどこまで書くようにするのかを検討することが必要であると感じた。授業で学習した内容を帰宅してからスムーズに学習することがスタンバイの時間の目的だと思うので，生徒1人1人に声かけをしながら笛川ノートをチェックすることが大切であると考えている。今後もスタンバイの時間の活用について，全職員で共通理解を図っていきたい。

(2) 生徒同士の意見交換会と全職員によるノートチェック

1学期の家庭学習強化週間に笛川ノートの意見交換会を行った。縦割りごとで教室に集まって，3～4人程度の小グループで笛川ノートを見せ合い，意見を出し合った。仲間のノートを見て良い所を見つけたり，アドバイスをしたりする姿を見ることができた。最後に自分自身の取り組みを振り返り，これからも継続していききたいところや改善したいところをワークシートに記入した。生徒同士の意見交換会は，今年度1回の取り組みだったが，生徒にとって印象に残っている様子であった。生徒総会の場においても，「継続して取り組んでいきたい」という意見がでた。仲間のノートを見るだけでなく意見の交流ができたことで，笛川ノートの活用の仕方について自己の考えを深めることができたと思う。

笛川ノートは普段は担任や学年の先生方が目を通してコメントを書いている。期末試験前に設けている家庭学習強化の1週間は、チェックする先生を学年に関係なくシャッフルした。管理職を含めた全職員が全校の笛川ノートを見て指導していくことで色々な視点からアドバイスをもらい新鮮な気持ちで家庭学習に取り組むことができるのではないかと考えた。自主学習ノートの活用について、復習の仕方については、生徒だけでなく教師のアドバイスが必要不可欠だと思うので、今後は教科の先生にも協力していただき、チェックできるような取り組みをしていきたい。

(3) 笛川ノート自己チェックシートの活用

2学期には、笛川ノートを自己点検できるようにチェックリストを作成して生徒にアンケートを行った。家庭学習をよりよくするために笛川ノートを振り返る項目を7つ設定しチェックシートを作成した。チェック内容を具体的に示したことで生徒はスムーズに振り返ることができた。

生徒のアンケート結果から分かることは、自分で取り組む教科を決めて意欲的に家庭学習に取り組んでいる生徒が増えてきたことである。しかしながら、継続して取り組むことや学習内容の充実を図るためにも教師のはたらきかけが必要であると感じた。今後も生徒に自覚を促し、気づかせるためにも自己チェックシートを有効的に活用しながら生徒の自主性や自立性を高めていく工夫をしていきたい。

2 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と学習評価

2学期に、道徳科の研究授業を行った。「考え・議論する」授業づくりを目指して、対話を重視した授業に取り組んだ。山梨大学附属教育実践総合センターの准教授である川本先生をお招きし、指導・助言をして頂いた。研究会では、ねらいの達成に向けた教師の発問・問い返しや自己の考えを広げ、深める「対話的な学び」について、全職員で協議を行った。対話をする上で大切なことについて学ぶことができ、今後の目指したい生徒像につながる貴重な学習の場になったと感じる。

本校は全国学力・学習状況調査の結果を受けて、国語科においては、「読むこと」領域の正答率が低く、記述された言葉に即して的確に読み取る力を定着させるために、記述を根拠に読解を進めたり、自分なりの考えを持てたりするような学習活動に取り組んだ。詩や小説など文学的文章や説明的文章の読解では、比較読みなどを取り入れ学習した。また、単末利用で、短時間で多くの語の意味用例に触れさせ書く活動を取り入れさせるようにしたところ、意欲的に取り組む姿が見られた。

数学科の課題については、基本的な知識や計算技能は十分に定着しているが、論理的に考えて、身についた知識等を使って説明する問題等、考えやその過程を表現する力はまだ十分でないことがわかった。学習した内容を家庭学習や自主的な学習の中でさらに定着させ、それらを活用する場面をできるだけ設けた。「解」にたどり着くための過程をしっかりと意識させたことで、途中の過程を丁寧に書けるようになった生徒が多く見られた。それによって、生徒は問題の解法が感覚的ではなく論理的に答えを導き出すやり方に慣れてきたと言えるのではないかと。今後も継続的に取り組んでいきたい。

III 成果物

一人一実践学習指導案、学習評価一覧、Q-U分析、タブレット使用ルール、

笛川ノート自己チェック表

(研究主任 永関亜美)

「主体的に学ぶ心豊かな生徒の育成」

～「Q-U」を活用した集団づくりを基盤とした学力向上への取り組み～

I 研究の内容

甲州市では国や県の施策を受けて、地域に根差した教育を進めていくための取り組み（平成23年10月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）が今年度も継続して行われている。4月の説明会において、今年度も昨年度までの取り組みを継続して、定着を目指していくことが確認された。取り組みを継続して行うことの大切さを改めて感じる1年間だった。

本校の現状を見てみると、市のプロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点において、生徒相互のあいさつや支え合いを通して、さわやかで充実した学校生活を送っている様子がうかがえる。Q-U分析において、「満足度群」の割合が全国平均を上回っていることから、落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。

しかし、不登校生徒の数を見てみると、長期欠席者の人数がここ数年増加傾向にある。生活習慣の乱れが主な原因となっているが、友人関係の問題が原因となっていることも多い。

また学力面においても、NRTテストで多くの学年と教科で全国平均点を下回るなど、生徒の学力向上に対する取り組みが喫緊の課題となっている。

以上のことを踏まえ、今年度は「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ、それを基盤とした学力の向上を目指した研究を進めてきた。

*研究の柱となる具体的内容と方法

(1) 「学力向上」に関する取り組み

「SUN（ステップアップノート：自主学習ノート）」「SUT（ステップアップテスト：各学年ごとの小テスト）」「一人一実践」「GIGAスクール」の取り組み

①SUNとSUTの活用を検討する。

- ・授業の中で家庭学習とつながる働きかけの方法の研究を行う。
- ・「スタンバイの時間」における課題設定の方法の研究を行う。

②市のプロジェクトと連携した板書計画や指導案作りを行い、授業の構造化を目指す。

- ・市のプロジェクトで作成された「Teachers note」を全員で確認して、学力向上に向けた授業実践を行う。

③「一人一実践（ステップアップ授業）」を行い、全員が授業を公開することで各教科の授業力を高める。

(2) Q-Uを活用した集団づくりの取り組み

①Q-U調査の分析を行い、生徒の実態を把握する。

- ・市のプロジェクトにおける「各校の取り組み内容」を参考にして、各校の実践で効果のあったものを共有しながら実践していく。

②SST（ソーシャルスキルトレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）を用いた人間関係づくりを進める。

II 成果と課題

(1) Q-Uを活用した集団づくりについて

今年度もQ-U調査を、4月21日（前期）と10月11日（後期）の年2回実施することができた。年2回のQ-U調査は甲州市のプロジェクトによって、甲州市内の全校で実施されている。学年ごとに結果を分析する会議を実施して生徒の情報を学級担任だけではなく、学年全体で共有することができたのは大きな成果といえる。さらに各学年の結果を管理職も含めた全校職員で共有することができた。特に養護教諭との連携によって、問題を抱えている生徒への対応方法等を相互に確認しながら取り組むことができた。

前期で「要注意群」に入っていた生徒への対応を学年全体で工夫したことにより、後期は「要注意群」ではなくなった生徒もいた。学級担任だけではなく、職員全体で課題に取り組むことが効果的であることが改めてわかった。

課題としては、各学年で行ったQ-U分析の結果について、職員全体で話し合う機会を持つことができなかったことである。資料の回覧だけではなく、職員会議等の機会を利用して職員全体で情報を共有できる方法を工夫していきたい。

(2) 「SUN（ステップアップノート）」「SUT（ステップアップテスト）」の取り組み

学力向上を目指して、市のプロジェクトと連携して上記の取り組みを通年で実施することができた。来年度は取り組み内容をさらに検討して、生徒の学習内容に合わせた、より柔軟な取り組みを進めていきたい。取り組み内容が学年ごとに異なることがないように、年度当初の校内研究会で共通理解できるようにしていきたい。

課題としては、現在行っている「ステップアップテスト」という学年ごとの小テストの実施方法が学力向上に資するものになっていないという反省が出ていることである。教職員の学校評価でそのような傾向が強い。「個に応じた学力向上」に向けて実施内容と方法を改善する必要性を感じている。

(3) 研究のまとめと来年度に向けて

甲州市の「確かな学力育成」プロジェクトを校内研究の基盤とし、それを深化・発展させるべく1年間の研究を進めてきた。Q-Uの分析により、普段はそのような素振りが見えない生徒も集団の中で悩みを抱えていることも発見できた。学校全体で分析結果を共有して、支援が必要な生徒に対する支援の方策を考え、それぞれの立場で生徒に接することで、確実に集団づくりや学力の向上を進めていきたい。

本校の学校全体での「基礎学力」を分析してみると、「基礎学力」が定着しているとはいえない現状がある。「学力の向上」については本校の喫緊の課題といえるため、来年度もこの点を最重要課題として研究を深めていく必要性を感じている。

今年度は「GIGAスクール」の取り組みが始まったが、その充実に向けた研究が今後も必要になってくると考えている。通信設備やタブレットの配備が進む中、教員がその有用性を理解し、実際に授業で活用し、学力向上につながるような研究を進めていきたいと考えている。

新型コロナウイルスの感染拡大により、「リモート」の形式で行う授業が増えてきた。「リモート授業」における「思考・発表・学習ツール」としてのタブレット活用の研究を来年度は計画に入れるようにしていきたい。

来年度の研究テーマの根本ともいえる「学力の向上」や「授業改善」を進めるためには、教師が自ら学ぼうとする意識が必要になる。教師の資質向上や「授業改善」を進め、「学力の向上」に資することができるように、学校カリキュラムマネジメントの意識を持って校内研究を進めていきたい。

（研究主任 田辺 秀樹）

「生き生きと学びつづける生徒の育成」

～主体的・対話的で深い学びを意識した学習を通して～

I 研究の内容

1. 主題設定の理由

本校では、平成29年度まで「心豊かで主体的に活動する生徒の育成」という研究主題のもと、研究を進めてきた。甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの「学級づくり・集団作り」に着目し、QU アンケートを活用した実践を行うなど、各学級のより良い集団作りに結び付け、学級集団としての質の向上を図ってきた。また、QU アンケートの活用を継続しながら、甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの「授業づくり・授業改善」にも注目し、「～集団作りと授業づくりの実践を通して～」と副主題を設定し、集団作りと授業づくりの両面から研究を進め、学びあい支えあう学級集団を目指して研究を進めてきている。

特に、授業と家庭学習の有機的な結びつきを目指して、帰りの会の前に「家庭学習スタンバイ」の時間を設定し、取り組んでいる。基礎学力の定着を目指したランクアップテストや定期テストでの取り組みの充実の他、生徒の主体的な学習への働きかけを継続することで、生徒の意識と学習習慣の定着に効果がでている。

また、本校は、平成30年度から3年間、県教育委員会から、「主体的・対話的で深い学び推進事業」の推進校の指定を受けた。これまでの研究の成果を生かしつつ、主体的・対話的で深い学びを実現する授業の創造に向けた研究を進めていき、本年度全面実施の新学習指導要領への円滑な移行と、それに先立つ適切な教育課程の編成を図り、確かな学力の向上が実現できるよう研究を行ってきた。指定は昨年度で終了したが、これまでの研究を検証・改善をし、PDCAサイクルを確立させるためにも、「主体的・対話的で深い学び」についてさらに研究を進める必要があると考える。

2. 研究の主な具体的取組内容

(1) 基礎学習

- ①研究についての基礎学習（確認）
- ②研究における実態把握
- ③確かな学力を目指すための環境づくりとしての研究

(2) 授業実践に向けた研究

- ①「主体的・対話的で深い学び」を実現するための工夫についての研究
- ②各教科等における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業研究
- ③甲州市GIGAスクール構想を踏まえた研究
- ④甲州市確かな学力育成プロジェクトとの連携

(3) 新学習指導要全面実施に伴う研究

研究の成果と課題

1. 成果

今年度は特に「指導と評価の一体化」「授業におけるICTの活用」「カリキュラムマネジメントを意識した年間指導計画」を中心に研究を行った。

「指導と評価の一体化」については、4観点から3観点になることを見据え、評価をするタイミングや効果的な評価の方法について、事例をあげたり授業公開を行いながら研究を深めることができた。また、評定の算出方法についても様々な方法を試行錯誤しながら考えることができた。

授業研究においては、英語の授業を通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため評価のタイミング、また、評価をする内容を精選する事等を意識した。

さらに、一人一台パソコン導入に合わせて、効果的なICTの活用についても考え、宿題や小テストなどをタブレットで行うほか、生徒総会資料や生徒会役員選挙の公約なども書面ではなく、電子でやり取りするなど、来年以降につなげる研究ができた。

「カリキュラムマネジメントを意識した年間指導計画」については、現行の年間指導計画をもとにワークショップを行い、教育目標や本校に必要なものは何かを考えながら、指導の中心となるものを全員で考え、本年度の振り返りとそれを来年度につなげていくことを確認することができた。

2. 課題

新型コロナウイルス流行に伴い、授業形態が変わったり、オンラインでの授業が始まったりと、それに対応するために新たな問題が出てきた。来年度以降、生徒の学びを止めないために、どのように工夫をしながら授業を進めていくかを考えていく必要を感じた。

また、新学習指導要領全面実施初年度として、指導と評価の一体化について詳しく研究をしたが、PDCAサイクルを大切にしていきながら、指導についても振り返りと改善を大切にしていきたい。

「自ら求め、学ぶ生徒の育成」

—対話を通じた授業づくり・ICTの活用を通して—

I 主題設定の理由

新学習指導要領では、次の6点

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
 - ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
 - ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
 - ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
 - ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
 - ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)
- を柱にカリキュラム・マネジメントの実現を目指すことが求められると示している。

1時間の授業において、生徒が「何を学ぶか」という見通しを持ち、【めあて】を理解した上で授業に参加し、授業の終わりに「何が身に付いたか」が明確となるような【自己評価】や【振り返り】をすることが重要であると考え。このことを実現させるためには、まず生徒の「主体的に学ぶ姿勢」が前提にあり、その根本には生徒と教師がともに楽しいと思える授業を展開することであると考え。また、協働を通して互いの考えを交流させることで「分かった」や「できるようになった」が増えることは、自信へとつながる。ICTの活用についても、これからの時代を考えると必要不可欠なツールである。GIGAスクール構想によって導入された1人1台パソコンも、今のところは使うことが目的になっており、学力の向上に直結しているわけではない。しかし、生徒にとっては意欲の向上につながるツールであることは間違いのないと思われる。積極的にICTを使用することによって、本当の意味で活用になり、生徒がICTを使って様々な表現ができるようになることを考える。それが学習に向かう意欲となり、自ら求め、学ぶ生徒へと成長していこうと考えている。

以上のことから、今年度の研究主題を「自ら求め、学ぶ生徒の育成～対話を通じた授業づくり・ICTの活用を通して～」とした。

II 研究の具体的な内容と方法

1 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとタイアップした教育研究

(1) 家庭学習の充実

自主学習ノートの取り組みを充実させるために、全校統一でその日の授業を振り返り、ノートにまとめること(左側のページ)を定着させる。右側のページについては、自分で考える他、プリントを配布するなど、個に応じた学習ができるような工夫を行う。

(2) ハイパーQ-Uの実施と結果分析

学級・集団づくりの質の向上のため、ハイパーQ-Uを実施し、【学年ブロック研究部会】分かれて、K13法による結果分析を行い、各クラスの担任は、アタックシートの作成を行った。

(3) 授業の構造化への追求

昨年度までの校内研の取り組み、また、甲州のプロジェクトの一環として、授業のはじめに「めあて」を生徒に示してきた。また、生徒に身につけさせたい力を明確にさせるために、ピクトグラムの活用と思考ツールの活用を行ってきた。本年度は、これらに加え「1人1台パソコン」の活用をすることで、学び合いを深め、授業の構造化をさらに深めた。

2 本校独自の教育研究

(1) 新学習指導要領実施に向けた研究

新学習指導要領の全面実施を前に、各教科でどのように意識をして授業を構成していくのかについて学べる機会を設ける。さらに、NIEの実践指定校であることをいかし、新学習指導要領で求められる資質・能力を育成するために新聞がどのように活用できるのかを研究する機会を設けた。

(2) お互いの授業を見合う

小規模校で、各教科1人で行っているため、教職員一人ひとりがさらなる授業力の向上を目指すためには、教科横断的な授業の視点を持つことが大切である。今年度は、授業を直接見ることができず、授業ポイントの情報交換を行った。

(3) 学びの基盤づくり

授業規律の継続指導として「話を聞く」「声を出す」「時間を守る」「あいさつ・返事をする」等の指導を継続して行った。

III 成果と課題

1 成果

今年度は新学習指導要領実施を前に「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点で学びの質を高める授業を意識してきた。特に、今年度はコロナ禍の中で学びを深める手段として「1人1台パソコン」の活用を、積極的に取り入れることができた。

2 課題

協働的な学びの方法は、これまでグループ学習が一般的であったが、コロナ禍でグループを活用した学習ができない時期が増えた。代わる方法として、ICTを上手に活用した協働的な学びが理想的だったが、それを補うスキルが不足していた。

IV 成果物

一人一実践、1人1台パソコンの活用、家庭学習ノート

(研究主任 佐々木 英司)

「確かな学力を育む学習指導の在り方」

～個別最適と協働的な学びを実現させる ICT の効果的な活用の探求を通して～

I 主題設定の理由

勝沼中学校の学校経営における基本方針は、甲州市で進める「確かな学力育成プロジェクト」の3つの視点である「授業づくり・授業改善」「学級・集団づくり」「保護者・地域住民等との連携」の中にすべて含まれている。ゆえに、甲州市のプロジェクトをもとに、生徒に確かな学力を保障する集団づくり・授業づくりを推進し、併せて豊かな心を育む取り組みを実践することで、基本方針の実現へと向かっていくと考えられる。校歌の歌詞の中にある「学び舎は常に愉しく」という言葉は、勝沼中のキーワードであり、生徒が学ぶことが愉しくなるように教師集団がひとつのチームとなって授業づくりと学級づくりに主体的に挑戦し励んでいくことを表している。

今年度は、新学習指導要領において示された資質・能力の育成を確実にすすめることが重要である。「深い学びの実現に向けた ICT 活用推進事業」の指定校として、ICT を最大限活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図っていきたい。

「個別最適な学び」では、子ども一人ひとりの特性や学習進度、学習達成度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等に柔軟な提供・設定を行う「指導の個別化」と、一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子どもたちが主体的に学習を最適化する「学習の個別化」が必要である。そこで本校の取組として「Chromebook」を活用した授業デザイン、「学舎タイム」を活用した学力のボトムアップを実施していきたい。

「協働的な学び」では、探求的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士や、教師と子ども、あるいは他校や地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることができるように必要な資質・能力を育成していきたい。その一つの手法として、「わだつみ平和文庫」を取り入れた授業実践を通し、大和中学校との交流を考えている。

以上の通り、2つの領域で ICT の効果的な活用を教職員で探求したいと考える。日本の学校教育が大事にしてきた同じ空間で時間と学びを共にする「オンサイト」と、ICT を活用した遠隔地の他校や地域との交流を取り入れた「オンライン」のハイブリッド型の新しい教育を創り出す教職員集団を目指していきたい。

II 研究の具体的内容と方法

(1) 授業づくり、授業改善に関わって

ア ICT の効果的な活用の探求

- イ ユニバーサルデザインを意識した学習環境づくり（掲示物やチョークの色等）
- ウ 単元テストや小テストによる指導改善，一人一実践
- エ N R T 検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析及び改善
- オ 授業の構造化及び朝読書（朝学習）の実施，「ティーチャーズノート」の活用

(2) 学級づくり，集団づくりに関わって

- ア 授業評価シートを活用した授業規律の質的向上
- イ QU 調査を実施し，K-13 法での分析・活用及び「ティーチャーズノート」の活用
- ウ 平和教育の実施（わだつみ平和文庫見学），帰りの会でのスピーチの実施

【研究授業の実施】上記の（1）と（2）をふまえ，研究授業を行った。

- | | | | |
|------|-----|-----------------|----------|
| 2 学年 | 社会科 | 単元名「日本のさまざまな地域」 | 宮下 智英 教諭 |
| 3 学年 | 道徳科 | 教材名「足袋の季節」 | 雨宮 光平 教諭 |

(3) 家庭学習の習慣化に関わって

- ア 定期試験前の「学び舎タイム」の実施
- イ 基礎・基本の定着を目指す「できドリタイム」の実施
- ウ 甲州市「学習の手引き」「家庭教育・子育て Q & A」の活用

III 成果と課題

「授業づくり・授業改善」「学級づくり・集団づくり」「家庭学習の習慣化」の3つの柱を立て，具体的な取り組みを行った。

授業づくりにおいては，教科担当が積極的に ICT を用いてその効果的な活用を探求した。ICT 利活用の成果と課題を積み重ねる中で，デジタルとアナログのベストミックスを生み出してきている。また，N R T 検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析を行い，学校全体で課題を見つける中で授業改善に取り組んだ。

学級づくりにおいては，授業規律の均等化を目指し授業評価シートを活用して，毎時間，授業規律の向上を図ることができた。これを生徒会の自主的な活動として位置づけるなど，活用の仕方に工夫を凝らし取り組みの幅が広がった。また，「hyper-QU アンケート」を実施し，K-13 法で学年毎に分析を行い，改善策を考えることで「チーム」として学級・集団づくりに取り組んだ。

家庭学習の習慣化においては，5教科の基本的な問題を一週間，家庭で取り組み，それを確認する「できドリタイム」という時間を設定し，基礎・基本の学力の向上を行った。取組時間の確保，全生徒の家庭学習の習慣化には至らず，次年度への課題となった。

今後も生徒の実態に合わせた ICT の効果的な活用や取り組みを展開していくことで，確かな学力を育む学び舎，生徒の育成へとつなげていきたい。

（研究主任 広瀬竜太）

研究主題 これからの社会を生きる力を身に付けたたくましい生徒の育成
副題 ～主体的・対話的で深い学び，ICT 機器を生かした授業実践を通して～

I 研究の内容

1 主題設定の理由

現代社会は目まぐるしいスピードで変化が進み，子どもたちが活躍する頃には，厳しい挑戦の時代を迎えると言われている。グローバル化が進展し，絶え間ない技術革新により，社会構造や雇用環境は大きく変化し，今までの価値観だけでは対応できない社会がくることも予想されている。そんな中，学校教育に求められているものには，「子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い，他者と協同して課題を解決していくこと」，「様々な情報を見極め，知識の概念的な理解を実現し，情報を再構築するなどして，新たな価値につなげていくこと」，「複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになること」が求められている。また「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト」においても，Q-U 検査を活用した学級づくり，授業づくりを行い，「思考力」，「判断力」，「表現力」の育成をはじめとする学習活動の課題を洗い出し，甲州市児童生徒の確かな学力の定着・向上を図っている。その中でも「主体的で対話的な深い学び」の視点からの授業改善が求められている。

本校は，全校生徒 17 名の少人数の学校である。「目が行き届き，細やかな指導ができる」ことや「全員に活躍の場が与えられる」などの利点が挙げられるが，「固定化した人間関係」や「コミュニケーション能力の不足」などの課題も挙げられる。特に今年度は汎用性の高い社会性を身に付けさせることが喫緊の課題である。現在まで，勝沼中学校との交流や地域の人々との交流，学習を通して，「地域に生きる」「地域に誇りをもつ」ことや将来，自立した社会人として生活できる力を身に付けられるように交流を重ねてきた。また，生徒達が地域の行事に積極的に参加し，地域で活動することによって，その大切さやよいところを再発見することができ，地域の人々との関係は今まで以上に密になっている。昨年度はコロナ禍において，地域人材を活用した授業や勝沼中学校との交流を十分行うことができなかつたが，一人一台端末を利用しての勝沼中学校とリモート授業に取り組むことができた。

今年度は昨年度の成果と課題をふまえ，今まで行ってきた Q-U 分析をもとにした学級づくり，授業づくりを継続し，多様な考えに触れることや社会性を身につけさせるために行ってきた地域や勝沼中学校との交流を活発に行うことや昨年度導入された一人一台端末を積極的に活用した授業を実践していくことで，これからの社会の変化に柔軟に対応し，主体的に学ぶ生徒，社会で生きる力を身に付けたたくましい生徒の育成を目指し，本主題を設定した。

3 具体的な研究内容とその経過

(1) 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した学力の向上

ア：Q-U 検査の分析と今後の取り組み

イ：NRT 検査の分析と今後の取り組み

ウ：学習のふりかえりとやまプロノートへの取り組み

(2) ICT 端末を利用した学習活動の工夫

ア：ICT 端末の活用方法についての学習会（計 3 回）

イ：ICT 端末を利用した，一人一実践

	教科・領域	日時	学年	内容
林教諭	保健体育：球技	10月8日（金）	1～3年	バレーボール
石田教諭	家庭科：調理の基本	10月18日（火）	1年	包丁の適切な取り扱い
鶴田教諭	音楽：鑑賞	10月25日（月）	3年	組曲「展覧会の絵」
小林教諭	国語：古典	10月26日（火）	1年	「蓬萊の玉の枝」
奥山教諭	理科：回路の抵抗	11月2日（火）	2年	電流と電圧の関係
深澤教諭	数学：平行と合同	11月9日（火）	2年	平行と合同
太田教諭	社会：地理	11月16日（火）	2年	北海道地方の自然環境

ウ：3年英語科による ICT 端末利用した研究授業と研究会

11月4日（木） 5校時 「Let's Read 2」 筒井教諭

総合教育センター 研修指導課 三枝朋佳指導主事招聘

II 成果と課題

1 成果

- ・ICT 端末の学習会を情報主任と連携しながら行うことができた。学習会を行ったことで教職員が授業での活用方法を考える機会となった。
- ・教科外の授業を参観したことで他教科の内容を知ることができ、自分の教科とのつながりやさまざまな ICT 端末の利用方法について考えることができた。
- ・全職員で Q-U 分析を行ったことで多方面から生徒を捉え、その成長を目指した取り組みを考えることができた。
- ・勝沼中学校との交流では、多様な考えに触れたことで子どもたちの考え方や視野の広がりを感じることができた。

2 課題

- ・「端末の利用ありき」ではなく、端末の有効な利用と今までの授業資料（ワークシート）との兼ね合いの研究を今後も続けていきたい。
- ・学習のふりかえりと家庭学習、やまプロノートとのつながりは子どもによっては違うものとして考えている様子がある。それらがつながりのある学習として捉えられるような日常的な指導の確立が必要である。

（研究主任 石田 周子）

教育協議会研究

○2021年度東山梨教育協議会研究の概要・・・・・・・・・・63

【教育研究部会研究】

国語	小学校・・・・・・・・・・67	生活科	・・・・・・・・・・95
	中学校・・・・・・・・・・69	自治的諸活動と生活指導	・・・・・・・・・・97
外国語	・・・・・・・・・・71	特別支援教育	・・・・・・・・・・99
社会	・・・・・・・・・・73	福祉教育	・・・・・・・・・・101
算数数学	算数・・・・・・・・・・75	食教育	・・・・・・・・・・103
	数学・・・・・・・・・・77	平和・人権教育国際連帯	・・・・・・・・・・105
理科	・・・・・・・・・・79	環境教育	・・・・・・・・・・107
音楽	・・・・・・・・・・81	情報化社会と教育・文化活動	・・・・・・・・・・109
図工・美術	・・・・・・・・・・83	進路教育	・・・・・・・・・・111
技術科	・・・・・・・・・・85	保護者・地域住民との提携	・・・・・・・・・・113
家庭科	・・・・・・・・・・87	教育条件整備	・・・・・・・・・・115
保健体育	小学校・・・・・・・・・・89	カリキュラムづくりと総合学習	・・・・・・・・・・117
保健体育	中学校・・・・・・・・・・91	教育評価	・・・・・・・・・・119
保健教育	・・・・・・・・・・93		

2021年度 東山梨教育協議会研究の概要

研究推進委員長 広瀬 竜太

I はじめに

東山梨教育協議会は、東山梨地域全体の教育振興を願って、1964年（昭和39年）に校長会・教頭会・教連の三者が、県教委、各地教委の協力により設立された。これまでの活動の中で、私たちは「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」を目標に、今日的な課題の解決に向けてとりくんできた。また、管理職・教諭・専門職員が協働して組織研究を進め、東山梨地域の学校教育の向上、教職員個人の資質の向上、教職員相互の強固なネットワークの構築を図り今に至っている。

一方で、子どもたちや学校教育を取りまく状況を見ると、多くの課題が山積している。情報化やグローバル化は急速に進み、様々な分野において IOT や人工知能の普及により、今後の社会生活は加速的に変化していくことが容易に想像できる。さらに昨年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなう全国一斉休校の影響により、子どもたちに当たり前に保障されていた「学校に登校する」という権利が脅かされる状況となった。さらに学校再開後は、新学習指導要領が小学校で全面实施され、その内容の履修と、長期に及んだ一斉休校による授業時間の減少を補填するため、多くの学校行事の中止・削減、長期休業の短縮などによる、授業時間の確保にどの学校も苦勞を強いられた。そのような中で、道徳や英語の教科化、プログラミング教育の導入など、教職員の戸惑いや保護者の不安、目の前の子どもたちのゆとりある学びに大きく影響を与えることとなった。複雑で変化の激しい時代であるからこそ、地域や目の前の子どもたちの実態に応じた指導過程を確立し、自主創造的に子どもたちの学びの質を高めていくことは今まさに必要不可欠である。

加えて、子どもの貧困、ヤングケアラーの問題は新型コロナウイルスの影響を受け、さらに深刻な状況として捉えられている。家庭の経済格差が子どもたちの学力格差につながっていることが様々な調査から明らかになり、教育費の負担軽減をさらに図っていくことが求められる。私たちは家庭環境や住んでいる地域に左右されず、学校に通う子どもたちの学力が平等に保障されるよう、日々研鑽を重ね指導に当たらなければならない。さらに、私たち教職員を取りまく環境にも、教職員の大量退職・大量採用等の影響、教職員の多忙化等の課題が多い。昨年度は、それらの改善に向け、新しい形の研究体制の構築、発展的再編を行い、課題改善へと歩を進めることができた。ただ、新型コロナウイルスの影響で検証できていない部分もある。教育活動は時代と共に変化していくことが必要だが、ただ時代の変遷に流されるのではなく、我々は、教育の不易と流行をしっかりと捉えた教育研究を行っていかなければならないと考える。今年度もさらに、子どもたちを中心に据え、学校・家庭・地域に根ざした「心豊かなふれあいのある教育」を、東山梨の教職員が一丸となってすすめていきたい。

II 研究の推進について

1 研究の目標

「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」

2 研究推進の基本的方針

- (1) 1964年発足より半世紀以上が経過した歴史的な重みや意義を重視し、東山梨の抱える今日的な教育課題解決のための研究を推進する。
- (2) 教育課程（カリキュラム）の自主創造的な編成にとりくむ。
- (3) 各学校の校内研究と教協研究との有機的結び付きとその充実を図る。
- (4) 保護者・地域住民との連携を強化する。
- (5) 組織研究の意義を理解し充実発展させるために、積極的な参加意識の高揚と組織的参加体

制の確立を図る。

(6) 平和・人権・環境教育を積極的に推進し、生命の尊さや平和の大切さの意識高揚を図る。

3 研究の組織づくり

研究の基底は校内研究にあるとの認識に立ち、課題の本質に迫り、解決の方法・内容を考えたり、専門的力量を高めたりする教育研究部会と、同じ地域に勤めるものが課題を共有し、連携をはかりながらその解決策を探るブロック交流研究会、さらに特別委員会を設け教協研究の推進を図った。以下、具体的に掲げる。

(1) 教育研究部会

共通テーマ：「人間性豊かな子どもの育成と教科教育課程の自主創造的な編成をめざし、教育の本質を実践的に追究する。」

	部 会 名		部 長	学校名	テーマ
1	国語科教育	小学校	向山紀子	奥野田小	思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～
		中学校	阿部孝代	塩山中	主体的・対話的で深い学び実現する国語科の指導 ～言語活動の充実をめざして～
2	外国語教育		筒井栄太	大和中	意欲的に英語学習にとりくむ児童・生徒の育成 ～表現につなげる活動の工夫～
3	社会科教育	小学校	徳良賢治	祝小	科学的社会認識を育てる授業研究 ～主体的・対話的で深い学びの創造～
		中学校	荻原佐知	山梨南中	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」 どのように実現するか
4	算数・ 数学科教育	算 数	三澤美穂	山梨小	つくり、いかす算数授業の創造
		数 学	柵 加奈	山梨北中	わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～
5	理科教育	小学校	雨宮玲子	後屋敷小	わかる理科授業の創造 楽しく学び 自然を豊かにとらえる理科授業をどのようにすすめるか
		中学校	村田裕紀	山梨北中	わかる理科授業の創造 ～考える力の育成と教材教具の工夫～
6	音楽科教育		鶴田 心	大和中	確かな学び 広がる音楽 知覚・感受をもとにした音楽的思考力・判断力・表現力の育成
7	美術・図工科教育		小澤朋子	山梨北中	一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか
8	技術科教育		岡田 強	塩山中	未来社会を展望し生活を創る力を育てる 技術家庭科教育
9	家庭科教育		村田有希子	山梨北中	未来社会を展望し生活を創る力を育てる 技術家庭科教育
10	保健体育科教育 (小学校)		堀内友貴	日下部小	教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～ゲーム・ボール運動を通して～
11	保健体育科教育 (中学校)		金森智絵	山梨北中	生きる力を育てる保健体育学習を目指して ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～
12	保健教育		雨宮二葉	塩山南小	自らの健康づくりに意欲的に 取り組む子どもをどう育てるか
13	生活科教育		赤荻美弥	祝小	子どもが生き生きと学ぶ生活科 ～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～
14	自治的諸活動と生活 指導		小林千恵美	塩山南小	一人ひとりの自立をめざした学級づくり

15	特別支援教育	門田寛子	山梨北中	自立をふまえて（どの子も共に生き、共に育つ） ～一人ひとりの実態をふまえた支援・指導のあり方～
16	福祉教育	高石圭子	松里小	学校教育における福祉教育のあり方を探る
17	食教育	島田直美	日下部小	食生活を考える ～子どもたちのより良い食習慣づくり～
18	平和・人権教育と 国際連帯	佐野理恵	日下部小	平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして
19	環境教育	岡村理恵	奥野田小	「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～
20	情報化社会と教育・ 文化活動	中根 淳	東雲小	情報活用能力を高める研究
21	進路教育	水上陽介	塩山北中	一人ひとりにあった、生きる力をつけるための進路指導キャリア教育はどうあるべきか ～小・中学校の実践を通して～
22	保護者・地域住民との連携	倉田和美	塩山北小	地域とともにある学校づくりをめざして
23	教育条件整備	雨宮美沙	笛川小	豊かな教育を子どもたちに
24	カリキュラムづくりと総合学習	小宮山公仁	祝小	豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成 と実践
25	教育評価	小林光三	笛川小	「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

(2) ブロック交流研究部会

共通テーマ；「地域が抱える教育課題を共有し、解決に向けた交流を行い、同一地域の
小中連携や小中の系統的な教育のあり方を追究する。」

ブロック名	ブロック長	ブロックテーマ
山梨 支 会	山梨南 ブロック 鶴田 望 (日川小)	○ICTの活用と小中連携
	山梨北 ブロック 山宮彩子 (岩手小)	○小中の連携を深め、山梨北中ブロックの児童・生徒の指導に生かす。
	笛川 ブロック 永関亜美 (笛川中)	○ICTを活用した主体的で対話的な学びの工夫についての小中連携
甲 州 支	塩山 ブロック 岡村理恵 (奥野田小)	○新学習指導要領の全面实施を受け、小中の系統性をつかみ、授業に生かす。
	塩山北 ブロック 青木 恵 (玉宮小)	○小中の連携をはかり、塩山北中学区の子どもたちを育てていこう。
	松里 ブロック 岩下和子 (松里小)	○同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために、小・中・地域の交流と連携を深めよう。
	勝沼 ブロック 金井京子 (菱山小)	○甲州市「確かな学力育成プロジェクト」との連携を図りながら同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。
	大和 ブロック 石田周子 (大和中)	○小中連携を深め、児童生徒の教育課題についてともに考え、指導に生かそう。

(3) 特別委員会

- ア 教育環境研究特別委員会（委員長 倉田憲一 委員…校長会・教頭会・教連・事務職）
- イ 児童生徒連絡協議会（会長 塩山北中学校生徒会会長 小野叶夢 顧問教員 武井松里子）

4 部会運営

本年度は、教育研究部会 25 部会、ブロック交流研究会 8 部会の成立をみた。教育研究部会は年間 8 回（新型コロナの影響で 1 回中止。参集しての研究会は 3 回中止）、ブロック交流研究会は年間 2 回設定（新型コロナの影響で 1 回中止）し研究活動を行った。年間計画等しっかりと見通しの上にならざる研究活動を更に推進していくことが重要である。

5 研究日と研究集会

毎週水曜日を研究日とし、地区教協研究日以外は校内研究にあてる。厳に校内行事等を入れずに研究時間を確保するようにしたい。春季・秋季・冬季教育研究会は新型コロナウイルスの影響で一同に集まっての開催はできなかった。

6 研究推進地区

甲州支会を研究推進地区とし、塩山南小校を会場に各種教研活動を行う計画であったが新型コロナウイルスの影響で一会場に集まっての開催はできなかった。

7 教育講演会

※新型コロナウイルスの影響で中止となった。後日、動画配信による視聴を行った。

III 今後の課題

「子どもたちの学び、私たち教職員の学びを止めない」という視点を持ち、この 2 年間新たな教育・教研活動を模索してきた。文部科学省からのトップダウンな道徳・英語の教科化、プログラミング教育、GIGA スクール構想等により、学校現場には課題が山積している。だからこそ、教職員の多忙化改善の視点に立った新しい形の研究体制のもとで、様々な教育課題解決に向けて、さらに質の高い研究活動をすすめて行く必要がある。このウィズコロナの時代に積み重ねてきた教育実践をいかし、アフターコロナの時代における持続可能な教研活動を構築していきたい。目の前の子どもたちの姿がスタート。東山梨教育の長い歴史の中で、先輩方が積み上げてくださった私たちの組織研究に誇りを持ち、一人ひとりがその意義を自覚する中で、東山梨教育がさらに充実・発展するよう努めていきたい。

〈東山梨教育協議会役員〉

役職名	氏 名
会 長	青柳俊雄（塩山南小）
副会長	大村健一（勝沼小） 内藤 健（加納岩小）
事務局	広瀬竜太（勝沼中） [研究推進委員長・事務局長] 日野原和貴（加納岩小・教育会館） [事務局次長]
委 員	青柳俊雄（塩山南小） 植原 彰（笛川小） 渡辺良仁（笛川中） 新藤 徹（塩山北小） 吉澤直樹（塩山中）
	大村健一（勝沼小） 三枝一哉（加納岩小） 依田久幸（塩山中） 土屋弘明（東雲小） 廣瀬敦子（大和小）
	内藤 健（加納岩小） 金森 淳（塩山北中） 広瀬竜太（勝沼中） 前田大輔（塩山中） 日野原和貴（加納岩小・教育会館）
会 計	前田大輔（塩山中）
会計監査	永田恵子（後屋敷小） 鮎澤智美（大和中） 若月敬二郎（後屋敷小）

思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導
～言語活動の充実を通しての研究～

I 研究テーマについて

日本語教育をめぐる状況を振り返ると、「言語教育の面においても、読み方教育の面においても言語や作品の内容を深く読み取ることを重視せずに、様々な活動を行わせる傾向が見られる」ことや、「全国学力学習状況調査を悉皆調査で行っていることで、点数を上げることが目標とした指導が求められるようになり、私たちの教育実践にも多大な影響を与えている」といったことが課題としてあげられている。

日本語を教えるとは、何をどう育てることなのか、子どもたちにとって真の「生きてはたらく力」がどのような指導過程によって育っていくのか、言語活動の充実を通して、課題を明らかにしながら実践を積み重ねていきたいという思いのもと本年度の研究を進めてきた。

II 研究の内容

1 実践交流

国語科の学習で思考力・判断力・表現力を育むための指導をどのように行ったか実践を発表し合い、交流した。様々な年齢層の先生方がいる中で、研究テーマを意識しながら実践発表ができ、学ぶことが多かった。すぐに実践できるような取り組みもあり、参考にして自身の実践に還元することもできた。教科書や指導要領が変わり、新しい教材もあるので悩む部分もあり、他の先生方の実践を知ることができたことは有意義であった。

2 授業研究

(1) 教材名 くらべて読もう 「どうぶつの赤ちゃん」(光村図書1年下)

甲州市立塩山南小学校 第1学年 後藤 美樹教諭

(2) 単元の目標

①文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。【思C(1)ウ】

②共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。【知(2)ア】

(3) 成果と課題

○しっかりした授業案が提案されたことにより、授業案検討の話し合いが充実した。

部員が教材や動物に関する資料を持ち寄り、授業案や学習内容検討の教材研究の

時間を十分に確保することができた。

- 感染症の予防対策として今年度は、授業の様子を事前にビデオ録画したものを参観しながら研究会を行った。実際の授業を参観できなかったことは残念であったが、感染症のことを考えると妥当であった。また、ビデオで授業の様子を視聴し、授業者の先生の話、プリントからも子どもたちの様子を十分見取ることができた。このような手段も今後取り入れながら研究をすることが可能になると考えられる。
- 実物大の動物の写真や挿絵を使い板書の工夫を行うことが、児童の本文の読み取りや理解に大いに役立っていた。
- 生まれたばかりのカンガルーの赤ちゃんをライオンやしまうまの赤ちゃんと比べる場面では、児童が「～とくらべて」「～と～では」など、違いを比べるための言葉を用いて発言することができていて、前時までの学習で比べて読む読み方を身に付けることができていた。
- 授業者は3つの動物の成長の違いについて具体的に読み取ることができるよう、子どもたちの発言に対して効果的に発問・問い返し・賞賛などをタイミングよく行っていた。

III 成果と課題

- 「生きてはたらく力」を目指した授業を行うことで、思考力等だけでなく、知識・理解もおさえることができた。
- コロナ禍で活動に制限があり、回数も減った中での研究であったが、実践発表・授業研を通して充実した研究ができた。実践発表する人数が多い日にはもう少し時間があるとさらに実りの多いものになると思うが、今年度は実施できない回もあり、回数が減少してしまったので、次年度以降は改善することが可能だと考える。
- 統一授業研等、今年度同様に中学校とは別れて研究することがよい。それぞれで研究を行った方が小学校部会としての研究が深まると思う。8月か2月どちらかで研究授業でよいと考えるが、8月に統一授業研を行うとなると、授業案の検討の時間が短くなってしまふことが心配である。
- 言語活動の充実を目指した実践に数多く触れることができた。しかし来年度以降、「言語活動」というテーマが新学習指導要領でどのように位置づいているのかを再検討し、現在提起されている「資質・能力」論との関係性を吟味し、刷新していく必要性がある。

(部長 向山 紀子)

主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～

I 研究の内容

本部会では今年度より学習指導要領が改訂されたこと、また生徒の実態を踏まえ、上記のようなテーマを設定した。また、研究テーマに即した授業実践に向け、全体で検討し合い、研究を重ねている。コミュニケーションツールの変化や人間関係の希薄化、情報があふれている現代社会において、生徒達にとってより良い人間関係を構築していくための表現力や、自分で考え、判断し、必要な情報を取捨選択していく力が、今まで以上に必要となってくる。それらについて言語活動を通して、生徒が主体的に学べるようにするためにはどのような指導が効果的なのかと研究を進めてきた。

本年度は、島崎藤村の「初恋」について、文体を比較することで効果と特徴を考えるとという実践を行った。文語定型詩である「初恋」と口語自由詩、恋に関わる詩とを比較対象させ、且つ生徒自身に比較対象する詩を選択させていき、主体的に学ぶ姿勢を引き出すことをねらいとした。

II 成果物

指導者 小野 渚

1 単元名・目指す言語能力

詩の表現を読み味わおう。

～文体を比較し、効果と特徴について考える～

2 教材名 「初恋」島崎藤村（光村図書）

3 展開

目 標 「初恋」と他の詩の表現を比較し、その効果について自分の考えを持つ。

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	1 これまでの学習を振り返り、本時の目標を知る。		
「初恋」と他の詩の表現を比較し、その効果について自分の考えを持つ。			
展開 前段	2 表現の特徴を記述したノートを見直し、整える。	・どの言葉や表現、技法に注目したのか。どのような効果があるのかを説明できるように促す。	

	3 小グループで交流をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ詩を選んだ人たちと交流をする。 ・交流した意見はノートに書き留めていく。 	
展開 後段	4 グループごと発表する。 5 文体や言葉遣いの違いによる効果を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような意見が出たか、説明させる。(一つにまとめなくても良いとする。) ・それぞれの特徴を整理し、確認する。 	
終末	6 本時の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・記述と具体的なイメージをどのように結び付けて考えたか。それぞれの文体に見られる言い回しや技法の効果などにも踏まえた上で、読み取れたか。読書や創作に今後どのようなことが生かせそうか、書かせ、発表させる。 	思・判・表 ①

本時の評価

- ・「Bと判断する状況」
- 詩の表現を根拠としながら、詩に表れている情感や世界観を考えている。
- ・「Cと判断する状況への手立て」
- 意味調べなどを丁寧にもう一度させ、作者が描こうとした心情や語り手が置かれている状況を確認させる。

III 成果と課題

授業実践を通して、生徒に選択肢を与えることが生徒の主体的な学びにつながるということを実感できた。主体的な学びにするためには、生徒につけさせたい力、何を学ばせるのかを明確に指導者がねらいをもって行っていくことで効果的になるということ改め確認し合えた。今年度は、コロナウイルスの感染拡大の為、これまでの研究の形から大きく変更せざるを得なかった。その中で新しい形での研究の仕方や、ICT 端末を使用した授業の進め方など、これまでとは違ったことを学ぶ機会ともなった。言語を指導する国語科において、ICT 端末をいかに言語活動の中に組み込んでいくのか、どのようにして使用していくのか、まだまだ課題点が残る。ICT 化が進む中で、上手く授業実践の中でも活用できるように来年度以降も検討を重ねていきたい。また、今年度から完全実施となった評価のあり方について今年度では検討し合えない部分があったので、来年度はその部分についても検討していきたい。

(部長 阿部 孝代)

意欲的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成

～表現につなげる活動の工夫～

I 主題設定の理由

本研究会では毎年、研究会で学んだことを授業で生かせるように、部会員による具体的な実践報告、およびその検討を主とした研究を行ってきた。

2年前までは「意欲的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成～書くことにつながる音声活動の工夫～」というテーマのもと、「書くこと」につながる音声活動に焦点をあてた研究を行ってきた。しかし、新学習指導要領においては、それまで広く定義されていた「話すこと」の領域が、「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」の2つに細分化されたことも受け、昨年度からは、「書くこと」だけではなく「話すこと」を加えた「表現につなげる活動の工夫」についての研究を進めてきている。新型コロナウイルスの影響で十分な研究ができていなかったこともあり、研究をさらに深めていくためにも昨年度と同じ「表現につなげる活動の工夫」についての研究を継続した。

今年度は、中学校においても新学習指導要領への対応が求められている。取り扱う単語数の増加、新しく中学校段階に取り入れられた指導事項なども大きな変更点である。しかし、その中で最も大きな変更点と考えられるものが学習評価である。新学習指導要領では、これまでの「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」からなる4観点から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」からなる3観点へと変更となった。そのため、本年度は指導案検討や夏季学習会などを通して3観点による新たな評価方法に関する研究を深めていくことを研究の一つの視点とした。

もう一つの視点として、特に「教科書題材(学習資料)をどのように扱って児童・生徒の意欲を高めていくか」ということについての研究も行った。教科書は授業の中心となる学習教材であり、新学習指導要領において新たに導入された教科書の題材から、どのように児童・生徒の意欲を引き出す授業をしていくのかという「視点」や「考え方」を学習することは重要となる。小学校では昨年度より、中学校は今年度より使用教科書が変更となったことから、今年度は学年別の部会を設け、教科書題材をどのように扱うか、共通教材の作成や指導法のシェアに視点を置くこととした。

英語学習においては、小学校と中学校の連携を軸に、児童・生徒達が「楽しい」と感じ、「わかる」と思う授業を創造することで、学習者がより意欲的に取り組むことができる。そのためには、苦手意識を持ちやすい「書くこと」や「話すこと」といった表現活動を工夫することが大切であると考え、本部会テーマを設定した。

II 研究の内容

1. 授業実践研究

9月29日 塩山中学校 的場 貴政 先生 「Our New Friends」

2月 2日 笛川小学校 上野 瞳 先生 「This is for You」

今年度も小・中1本ずつの研究授業を行った。新型コロナウイルス感染症の影響により、いずれも授業の様子を録画したものを視聴する形で行った。また、2月については授業研究会自体をオンライン会議により実施した。それぞれの指導案については、1度目をメール配信による文書提案、2度目をオンライン会議で指導案検討を行った。

2. 学年別研究部会

部会員がそれぞれ主として指導している学年ごとの部会に所属し、教科書題材の活用や指導方法についての研究を行った。対象となる単元をきめ、実践を持ちよったり、各自で作成した教材を1つにまとめたり部会ごとに工夫しながら、研究を行った。

III 成果と課題

1. 部会の構成・研究方法について

今年度は研究会の回数が減った中でのスタートとなったが、部会として2本の研究授業を行うことができた。学年別研究会を持つなど、教科書題材やICT機器の効果的な活用について考える中で、「表現」につなげる活動について、研究を深めることができた。昨年度課題となった、「小中連携」については、今年度指導案検討・授業研究会を合同で行うことができ、学年別研究についてのシェアリングなどからも迫ることができた。また、今年度はオンラインによる会議を実施することができたことも、今後の研究の可能性を広げていく上で、1つの成果と考えられる。課題として挙げられるのは、評価についてである。当初は夏季学習会で扱う予定でいたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により実施できなかつたため、来年度の研究の中で扱っていききたい。

2. 授業研究会について

ビデオ提案となったことで、狙いに迫る一連の流れをその場で見られなかった点は、残念ではあったが、2本の研究授業を行えたことが何よりの成果といえる。小・中の教員が集まって1つの授業について検討したり、参観したりすることができ、「小中連携」の視点からもよい学習の機会となった。

3. 学年別研究会

教科書題材の活用について、同じ学年を担当している者同士の情報交換の場とすることができた。研究会日程の変更等もあり、十分な時間を割くことはできなかったが、時間のない中、各部会で研究した内容について、全体で共有できたことは一定の成果といえる。教材等の共有について、より円滑で日常的に活用できる方法が見出せばさらに良かったと感じている。

科学的社会認識を育てる授業研究 ～主体的・対話的で深い学びの創造～

I 主題設定の理由

小学校社会科教育部会ではこれまで、「科学的社会認識を育てる授業研究」を研究テーマに掲げ研究を推し進めてきている。

「社会認識」とは、社会の事象・事実の本質を客観的に把握することである。社会科において、わかる授業づくりを進め教科の目標を確実に実現するためには、子供たちの社会認識を着実に育成することが大切であると本部会では考えた。さらに、社会の事象・事実の本質を客観的に把握することは社会科学の手法に基づいて進められることから、社会認識を「科学的社会認識」（大森昭夫「新社会教育基本用語辞典」：明治図書）としてその育成に焦点をあてて部会研究を推し進めてきている。

昨年度より実施となった。新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善の方向として、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善が求められており、本部会では昨年度に引き続き、今年度も、「科学的社会認識を育てる授業研究～主体的・対話的で深い学びの創造～」を研究テーマとして掲げ部会研究を進めてきている。

II 部会研究について

1 研究の内容

- (1) 社会的事象の教材化
- (2) 教師の効果的な指導や支援（発問や板書、資料の提示、資料の活用等）
- (3) 社会認識の深まりの見取り（学習の評価）
- (4) 授業の振り返り（授業の評価）
- (5) 言語活動の充実（位置付け、内容）

2 研究の方法

- (1) 授業実践研究（後屋敷小 4年 小野 晃裕 教諭 2月）
「わたしたちの県のまちづくり」【昔の良さを未来に伝えるまちづくり～勝沼地区～】

III 成果と課題

1 成果

- (1) コロナ禍であったが、新学習指導要領の視点を意識した主体的・対話的で深い学びにつながる研究授業をおこない、学び合うことができた。
- (2) 地域教材を開発する中で単元設計の重要性を再確認し、その方法を学ぶことができた。
- (3) リモートではあったが、小中合同の授業研究会を行って小中の交流を深め、小から中への学習内容の系統性についても学ぶことができた。
- (4) 制約がある中でも研究をすすめ、部会の積み上げてきた研究内容を新部会委員に伝え、学び合うことができた。

2 課題

- (1) コロナ禍に対応して、ICT 活用法の研究と教師のスキルを向上させることが課題としてあげられる。
- (2) 新学習指導要領に対応した新単元への取り組み方について、地域教材の教材開発を含め研究できると良い。

（小学校部長 徳良 賢治 祝小学校）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

I 主題設定の理由

昨年度同様、市民を育てる「主体的・対話的で深い学び」を得るために、必要な手段及び方法を研究するとした。研究会の回数も少ない中ではあったが、小中合同の研究授業、指導案検討、学習会等を行い、次のような生徒の育成に繋がるものとして進めた。

- ① 学習課題に対し、主体的な学びに向かうことのできる生徒
- ② 追及すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
- ③ 他者と協働し対話的な学びから考えを深めることのできる生徒
- ④ 導き出した結論を、様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証することのできる生徒

「主体的な学び」や「対話的な学び」は、生徒たち自身の力を着実に育み、その力が将来に繋がるよう努めていかなければならない。これまでの科学的認識を育てる授業研究を土台に「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を考え、研究を進めた。

II 研究内容

- 1, 研究授業にむけての指導案検討 浜辺 はるか 教諭（勝沼中学校）
中学校1年生 地理的分野 「乾燥した地域の暮らし～アラビア半島での生活～」
- 2, 小学校部会の研究授業参観と研究会 小野 教諭（後屋敷小学校）
小学校4年生 「わたしたちの県のまちづくり」
- 3, 学習会 …「東日本大震災について」 講師 奥田耕也さん・香世さん
- 4, 情報交換

III 成果と課題

- グループワークが制限される中ではあったが ICT 端末や思考ツールを活用することで、具体的な考えを子どもたち同士で共有することができ、「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて、どのようなアプローチができるか考えることができた。
- 小学校での授業参観を通して、資料の重要性や現地での情報収集、地域学習の在り方という点で学ぶことが多かった。今後も小中連携を図っていきたい。
- 東日本大震災の経験者から直接お話を伺うことができ、社会科教育のみならず防災教育という視点からも、良い機会をつくることができた。日常の中での心構えや備え、地域と学校の連携の重要性など多くのことを学ぶことができた。
- 「使う」ことを目的としない ICT の活用、単元構成の工夫、主体性を見とるための評価方法など「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりを今後も研究していきたい。
- リモートや分割授業のより良い学習方法や授業実践を検討していきたい。

（中学校部長 荻原 佐知 山梨南中学校）

つくり，いかす算数授業の創造

- 数学的な考えを培う，意味のある算数的活動とわかりやすく楽しい授業づくり
- 子どもたちが主体となり，数学的表現を通してかかわり合う授業づくり
- 子どもたちの認識の上に築かれた，教材研究が十分になされた授業作り
- 数学を活用する意識や実践力を育てる「生活・社会とつながる教材」の研究と実践
- 授業の実際や子どもの考え方の変容が明示された研究と実践

I 研究テーマについて

小学校学習指導要領では、算数的な活動の充実や数学的思考力・表現力と算数を生活の中で活用しようとする態度の育成が示されている。数学的な表現（図・式・言葉・記号・操作）を通して子どもたちにコミュニケーションをさせていき，そこで出てきた表現を使ってできるだけ子どもの言葉でまとめさせていきたい。また，知識の活用が話題になっている。教科書の教材内での活用や生活内での活用を通して，算数で学習したことが，日常生活でも活用できるということが子どもに実感できる授業の研究をしていきたい。以上のことから，この研究テーマを設定した。新学習指導要領になりコンテンツベース（内容中心）からコンピテンシーベース（資質能力中心）への授業改善の研究をさらにすすめていきたい。

II 研究の内容

1 授業実践研究

（1）日時・場所：令和4年2月1日

日下部小学校 第4学年

授業者：辻 祥実 教諭

単元名：箱の形を調べよう

（2）研究討議より

コロナウイルス感染症予防のために，実際に参観することができなくなった。授業後の研究討議も，オンライン会議で行った。そのため，授業者の振り返りを中心としたまとめである。

○ 図形の単元であったが，体験的な活動を通して数学的思考を育てる目的でポリドロンを活用した。考えを深める1つの手段となった。

○ ICT端末で友だちの考えを見て，考えを比べた。その結果，納得できたと感想を書いていた児童が何人もいた。ICT端末を活用することで，容易に友だちの考えをみることができ，学習の定着につながった。

○ 目標である「直方体・立方体の辺の長さや面のつながり，位置関係に着目して，

特徴をおさえながら展開図を書くことができるようになる。」は、児童の感想や事後の様子からも、達成できたと感じる。

- 授業者が児童の実態をふまえた授業過程，教師の発問や提示の仕方，板書について互いに考えることができた。
- この学習で活用するためのワークシートをアプリの中に作成し，そのワークシートは，他の教員も活用できるように設定した。研究授業だけでなく，他の教員も活用できることがよかった。
- オンラインでの研究会の開催になってしまったが，プロトコルとして残したので，授業の流れがわかりよかった。

Ⅲ 成果と課題

- 実際の授業研究を1本，それ以外に実践報告を毎回行った。多くの実践に触れる中で，思考力・表現力を生活の中で活用できるようにどのような指導がよいのか研究をしてきた。回数が少ない中ではあった，様々な意見が出され研究を深められた。
- ICTの活用実践を交換し，算数で活用できるアプリの研修を通して，今後「どの単元で，どんなアプリで何ができて効果的」という学習ができた。
- さまざまな生活の場面から問題場面を設定するなど，生活に算数を活用する力の育成に結び付く内容を研究できた。
- 研究会が授業実践を含めて進めることができ，意見交換を通して多様な指導方法を共有できた。
- 数学的な見方・考え方を深める問いについて検討することができた。
- コロナ禍の中で，「対話」についての在り方について年間を通して部会で考えることができた。
- 「数学的表現を通してかかわり合う」とは，一体どんな姿であればいいのか，そのあたりについて，もっと具体的に話を詰めていき，授業の中で児童が見せた姿について，みんなで考えていけると，さらに成果が大きくなったと考えられる
- 授業参観ができなかった。研究会も，オンラインでの開催となってしまった。やはり，直接参観し，研究会を行うことができるとよいと感じた。
- 関数・数列・図形だけでなく，算数・数学の系統を指導者が理解していくために，外部講師を招いたり小中の連携を図ったりする機会を設定して学習を深めたい。来年度は，中学校との交流もしていきたい。
- 算数の県教研のレポートの準備に時間を要する。特に補助資料（プロトコル）はチームで作成していけるように，来年度は役割分担を検討していきたい。
- 教育協議会の限られた時間の中で研究していくため，継続して部会に所属していくことが大切である。

（部長 三澤 美穂）

わかる授業の工夫と授業実践

～基礎学力の定着と考える力の育成～

I 研究の内容

数学科教育部会では、研究テーマの中の「考える力の育成」に焦点を当て研究を進めてきた。ここ数年は、主に「単元の導入や既習事項の活用に関する授業研究」に重きを置き、各校から指導案等を持ち寄りながら統一授業研に向けて研究を深めてきた。また、新学習指導要領導入により、新しい指導内容として2学年に加わった「箱ひげ図」についても、昨年度から研究を進めてきた。今年度も昨年度から引き続き部会全体を、研究をさらに深化させる「箱ひげ図」グループと、「単元の導入や活用の研究」を引き継ぐ「関数」グループの2部会に分け、より具体的な授業実践について話し合いを進めてきた。それぞれのグループで、①生徒が興味を持って取り組める題材や教具の提示、②考える力や思考の深まりを引き出せるような授業形態や発問設定、③生徒の興味をひく上で効果的な操作活動や、動的なものを捉えるのに有効なICTの活用を取り入れた授業展開等を踏まえ、様々な角度から研究を深めることができた。コロナ禍ということもあり、なかなか思うように研究を進めることができなかったが、どちらのグループでも生徒が「わかる授業」を通して考える力を身につけることができるよう、部会員全員で積極的に研究活動に取り組むことができた1年だった。

II 成果と課題

1 成果

- ・2年に渡って、グループに分かれて研究を行ったことで、1つの単元に対して深く研究することができた。特に、箱ひげ図については、新学習指導要領で出てきた新しい単元なので、複数の考えが出し合えて良かった。
- ・ICTの活用や作業的活動を通して、生徒たちにとってわかる授業になるような授業の工夫を知ることができた。
- ・箱ひげ図については、昨年度から継続し研究を行ってきたこともあり、昨年度提案していただいた指導案をもとにして考えることができたので効果的だった。
- ・単元を見通した授業づくりを考えることで、他の単元にもつながる知見を深めることができた。
- ・関数グループでは、各校から実践例を持ち寄り、よりねらいに近づける指導法について考えを深めることができてよかった。

2 課題

- ・感染症対策もあり、授業を参観する機会をつくることができなかった。作成された指導案をもとに、各校で実践し来年度持ち寄って検証する必要があると感じた。
- ・ICT端末を有効的に活用することについて課題を感じる。この1年間で、少しずつ授業実践が行われていると思うので、来年度から共有できるようにしていきたい。
- ・評価についても研究を深めていった方がよい。特に主体的な学習態度についての評価を考えていきたい。
- ・小学校との連携の機会がなかったので、来年度は情報交換も含め、小学校との連携を図りたい。

III 授業実践（成果物）

1 関数グループより

昨年度よりどの単元で授業を行っていくか検討し、1年生の「比例・反比例」の単元で研究成果となる授業を行うことを決定し、11月に実施した。部員全員で参観することはできなかったが、これまでの研究の成果となる授業実践を行うことができた。

授業者：青柳 瑞希教諭（山梨南中学校）

単元名：4章 比例・反比例（砂時計をペットボトルでつくろう）

ねらい：関・比例、反比例について学んだことを生活や学習に活かそうとしている。

・比例、反比例を活用した問題解決の過程を振り返って検討しようとしている。

考・具体的な事象の中の数量の関係が比例や反比例であることを見だし、問題を解決することができる。

・ $a = b c$ で表される関係において、それらの数量の間の関係を考察することができる。

2 箱ひげグループより

昨年度より継続して研究を進めてきた「箱ひげ図」の授業を、統一授業研に合わせて行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、休校並びに直接的な参観を控えることとなり、予定とは異なったかたちでの実施となった。データを分析し、自分の考えをまとめることに重きを置いた授業は、難しさはあるが今後の研究へとつながる授業とすることができた。

授業者：梶 加奈（山梨北中学校）

単元名：7章 データの比較 箱ひげ図（「地球温暖化について考察しよう」）

ねらい：関・データの分布の傾向をとらえることに関心を持ち、批判的に考察しようとしている。

考・箱ひげ図からデータの分布の傾向を読みとり、批判的に考察し判断することができる。

（部長 梶 加奈）

「わかる理科授業の創造」

【小学校部会テーマ】

～楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか～

I 研究の内容

- 1 研究の深まっていない領域・単元を重点的に研究していく。
- 2 臨地研修や実験工作演習などを積極的に取り入れる。
- 3 授業に関わる情報交換を積極的に行う。
- 4 研究の成果を授業研で検証する。

II 研究の具体的取り組み

今年度は、大藤小学校・堀口藍花教諭による第3学年「音を出して調べよう」の研究授業を行った。新型コロナウイルス感染予防の観点から、事前に撮影した動画を視聴したあと、研究協議を行った。授業研究では、音の出る楽器を複数用意し、音が出ている時の楽器の様子や、楽器を持っている手から感じること、音の大きさや高さなどに注目して、一人一台端末の付箋機能を使って、気づいたことを交流した。疑問に思ったことや、調べてみたいこと出し合い、次時以降の学習の見通しをもつ授業となった。少ない知識の中でも生活経験や体験を通して、理由付けをして予想する姿が見られた。一人一台端末も効果的に活用され、すべての児童の考えを引き出す授業となっていた。

その他、地域の自然の教材化の観点から、乙女高原の臨地研修と、山梨県の地質・岩石についての学習会を企画した。臨地研修は感染予防の為、中止となってしまったが、地質・岩石の学習については、県内の地質の概要を学んだ後、県内各所で採取した岩石を使って、岩石標本づくりをした。

III 成果と課題

小学校での理科学習は、児童にとって「課題→予想→実験→結果→考察」という科学的思考の流れを養う大切な時期であり、語彙や知識、理論に制限のある中で、わかる授業を行うためには様々な実験の工夫が必要であるとわかった。また、中学校の先生方と合同で研究会を行い中学校の先生と情報交換をする中で、小中9年間（理科は7年間）を通した指導の流れを検討することができた。

子どもが、「なぜ」「不思議だ」「調べてみたい」と探求したくなるような教材・教具をどのように用意するのが研究の中で重要になってくるので、教材研究を効率的に進めるうえで、部会での情報共有をしていくことが必要である。

(小学校部長 後屋敷小学校 雨宮玲子)

部会テーマ 「わかる理科授業の創造」

【中学校部会テーマ】 ～考える力の育成と教材教具の工夫～

I 研究の内容

1 教材教具の発表

各校から授業で実践した教材教具を持ち寄り、研究討議を行った。延べ4名3教材。

2 新学習指導要領の学習会

今年度から中学校での新学習指導要領が全面実施になることから、昨年度に引き続き、新学習指導要領における「理科の目標」や「学習評価」などについて理解を深め、具体的な観点の見取り方の例示を参考に学習会を行った。

3 県下児童生徒理科自由研究の審査会

各校から自由研究の代表作品を2点持ち寄り、県下児童生徒理科自由研究の代表作品2点を選考した。

4 統一授業研

授業者：塩山中学校 五十嵐詩歩 教諭 2年「生物の体のつくりとはたらき」

授業者：勝沼中学校 廣瀬 直樹 教諭 1年「大地の変化」

の研究授業を行う予定であった。しかし、9月1日は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会場校で分割授業実施のため実験を含む授業の実施ができなかった。また、2月2日は、サテライト方式（授業を会場校の別室で観察する方式）で視聴し、小中合同で研究討議を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、授業実施が不可能になり、指導案の通じての研究討議となった。

II 成果と課題

今年度より全面実施となった新学習指導要領についての学習会をおこなったことが成果としてあげられる。特に、教材教具の発表で出された、一人一台タブレット（GoogleChrome）のアプリである jamboard を活用した事例は大変有効なツールとなった。コロナ禍の中で、実験結果等を班でまとめたり、ホワイトボードを共有しながら話し合い活動をしたりするなど、積極的な人との関わりを制限しなければならない中で、1枚のシートを班やクラスで共同編集できる jamboard はシート上で生徒同士が関わることができるので、多くの授業に活用できることがわかった。また、一人一台タブレットを活用することで、教師側が紙ベースで集計していた単元テストや振り返りシートなどもペーパーレスかつ、効率的に集計が可能であるとわかった。

一方で、理科という教科の特性上、すべてをタブレット端末でおこなうには困難も生じる。やはり、実験などを通して実物に触れることで理解が深まる部分もあり、体験を通して自己の経験と照らし合わせることもできる。昨今のコロナ禍において、タブレット端末が有効な手段であることは理解しつつも、あくまでツールの一つであり、どのようにこのツールを活用していくかを考え、部会テーマである「考える力の育成」につなげていく必要がある。今後の継続課題としたい。

(中学校部長 山梨北中学校 村田裕紀)

「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力、判断力、表現力等の育成～

I 主題設定の理由

本年度の研究では、「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」については、これまで同様、重要な学習と捉える。そして、児童生徒が感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において、「そのよさや価値等を考えるなどして、創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう、さらに研究を推進していく。

この「よさや価値等を考える」ためには、音楽のよさ、面白さ、美しさを感じ取りながら想像力を働かせて聴き、どのように表現したいのか、音楽表現に対する思いや意図を明確にもち、自らの言葉で適切に表すことができるなどの力が求められる。これは、基礎・基本の習得とともに、音楽に関わる思考力、判断力、表現力等をどのようにして育成していくのかといった視点が重要であり、研究の中核となる。

義務教育9年間の積み重ねを意識する中で、9年間で身に付けた音楽の学力が、その後の人生において生きて働くものとなり、生涯において生活の中で豊かな関わりを続けていくことが重要となる。これは、「学びに向かう力、人間性等」に関わることであり、生活の中に音楽を生かしたり、我が国や諸外国の音楽に親しんだりする態度を養うこととなる。授業においては、生活や社会における音や音楽の働き、そして音楽文化についての観点及び理解を深めることによって実現できるものとする。

これまでの研究実践の成果を基に、児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い、音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が図られ、生活や社会の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され、生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指して、本研究を進めていきたいと考えた。以上のことから研究主題を設定した。

II 研究の視点 及び 具体的な研究内容

1 研究の視点

- (1) 知識・技能を活用し、一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫

授業では、児童生徒が「分かる」「気付く」ことができる発問の工夫を行い、知覚と感受が行き来しながらそれらの関わりを考え、音楽のよさや楽しさを感じ、深める学習活動を展開する。習得した知識・技能を生かしながら自分の思いや意図を表現したり、主体的に音楽を学んだりする姿が見られることを目指す。

- (2) 一人一人が明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫

音楽を表現したり聴いたりする活動を通して、感じたことや考えたことなどを音楽的な根拠や理由を示しながら仲間に伝え、音楽に対する思いや意図、価値を

仲間と共有する学習活動を展開する。仲間の思いや表現のよさを認め合う体験を積み重ねることで、自他の感じ方や考え方を広げ、自らの成長を実感し、音楽の学びが広がる。

- (3) 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫
仲間と音楽活動しながら考えたり発見したりすることで、学びが広がり、音楽をより深く表現したい、より深く味わいたいという思いにつながる。そして自己の学びや変容を自覚し、これまで以上に音楽に対する喜びや活動の充実を図り、自分の生活や社会の中で音や音楽と豊かに関わることができる。

2 具体的な研究内容

- (1) 学習会「音楽科における学習評価」

講師 山梨県総合教育センター指導主事 小林 美佳 先生
夏季学習会「ICT 端末を使用した音楽科授業の提案」※中止

- (2) 実践報告

加納岩小学校 平井祥子先生（9月）※資料提案

題材名「重ね方を工夫してリズムアンサンブルをつくろう」第4学年

塩山中学校 竹川美和先生（9月）

題材名「箏の奏法を工夫し音色の変化を生かしながら表現しよう」第2学年

塩山中学校 廣瀬里奈先生（2月）※資料提案

題材名「曲想と音楽の構造との関わりを理解して、歌曲の魅力を味わおう。」

第1学年

III 成果と課題

最初の研究会では、コロナ禍でどのような研究ができるか、またどのようなことを学びたいか話し合った。そこで、学習指導要領が改訂されたので改めて「音楽科における学習評価について」と「ICT 端末を使用した音楽科授業の提案」の学習会を計画した。「音楽科における学習評価について」は総合教育センター小林美佳指導主事を招聘し、具体例を示しながらわかりやすく説明をしていただいた。それを受け、各授業実践では学習指導案検討の段階から授業に至るまで、学習会で学んだ学習評価の視点で研究を行った。しかし、実際に授業を参観することができない中で、指導された先生方から子どもの様子を聞いたり記述を見たりしたが、実際に授業を参観したかった、という意見も多かった。「ICT 端末を使用した音楽科授業の提案」の学習会は感染拡大予防のため中止となってしまったが各授業実践の中で「どう ICT 機器を使用しているか」の視点でも研究を行い明日への授業へつなげた。

課題として2つあげられる。1つ目は、ICT 機器の具体的な活用法を学ぶ機会をつくることである。授業のなかで ICT 機器を道具として使えるよう教師の力量を伸ばすことである。2つ目は、学習会や学習指導案検討等を行っている中で、改めて音楽科としてこのコロナ禍でどう音楽の指導を行っていくかも大きな課題だと感じた。簡単に答えは出てこないが、今後は音楽科の資質・能力を育成する中で、今までとは違う新しい音楽科の授業方法も研究していかなければならないと考える。

（部長 鶴田 心）

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか

I 研究の内容

1 研究の柱

(1) 子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり

(ア) 目の前の子どもの課題や実態をつかみ、ねらいを明確にして、より造形的な資質や能力が発揮できる題材の研究をすすめる。

(イ) 様々な場面で、子ども一人ひとりに表現する喜びを感じさせる。また、その表現を通し、子どもが自分や周りの人々、社会、自然や環境などを見つめ、子ども自身が主体となるような授業の組み立て方を工夫する。

(2) 子どもの表現活動によりそう支援のあり方

(ア) 子どもの思いによりそう支援のあり方を考える。

(イ) 子どもが何に悩み、考え、試行錯誤した末、どのような表現につながったのか、活動の様子を観察、子どもとの対話、スケッチや記録など、いろいろな方法で作品や活動を読み取る研究をする。

(3) つながりと広がり、先を見通した実践の積み重ね

(ア) 子ども同士が関わり合い、話し合うなど、互いに学び合うことのできる場の設定を試みる。

(イ) 題材と題材の関連や小・中学校の連携を考えたり、他教科との関連を図ったりすることで、子どもや学校の実態に応じた、系統的・発展的なカリキュラムの工夫をする。

(ウ) 子どもの生活を取り巻く地域や社会、それに関わる人々とのつながりをもった美術教育を通し、自分自身や社会を見つめていけるようにする。

2 研究の方法

- ・授業研究を実施し、授業の在り方を考える。
- ・実技研修を実施し、授業に還元する。
- ・一人一実践による作品研究を行う。
- ・研究会場を持ち回り、各校の展示環境などを参考にする。

II 成果と課題

成果として

コロナ禍や図美展の搬入などで、集まることのできる回数は少なかったが、作品研究やビデオでの授業研究などを行うことができ、研究を止めることなく進め、さらに積み重ねる事ができた。那須先生の動画による実践発表や部会での完成作品の鑑賞会による研究など、発表した教師の授業で伝えたい熱い思いやこだわり、細かいところまでの工夫などが感じ取れて素晴らしかった。統一授業研では実際に授業を見ることは出来なかったが、動画による提案から皆で意見を交換し合うことができ、大きな学びになった。少ない部員数ではあるが、各自がテーマのもとにした一人一実践の研究発表を通して、小中学校それぞれの造形教育の必要性と共通の悩みなどを再認識できた。どの実践も各校の児童生徒

の実態に合わせたもので、造形教育を通して育てたい資質能力を明確にしていることが良かった。

2 課題として

各校の子ども達の実態から、造形教育を通して育てたい資質能力を明確にして研究を進めていけたが、研究をより深めるためにも「一人ひとりの力を引き出す」とはどういうことかを、年度当初の部会でしっかりと確認した後に個人研究すべきだった。具体的には、①児童生徒一人一人の感性や想像力をどのように把握するか、②個々の能力を育てるために必要な指導とは、③3 観点による評価により指導が個別最適であったかを確認し指導改善につなげることができたかなど。特に 3 観点による評価の実際については、夏季学習会で新野先生に講義をお願いしてあったので、ズームをフル活用して「新野先生の学習会」の実施をしたかった。その他にも、研究授業を行うのに、指導案検討など意見交換が十分にできなかったり、授業も授業者が撮影しながらの授業の中で、生徒の様子を伝えきれなかった。図工美術教育の特性から、児童生徒の表情や活動を直接見ることがやはり重要である。教師の意見の交流から学べることも大きいですが、実際の子どもの活動や姿から検証し学べることも大きい。コロナ対策は今後も続くと思われるので、その部分をどうしていくかが課題となる。

III 統一授業研と県教研の実践報告

1 統一授業研 「自分を見つめて～今の自分を形や色で表現しよう～」

〈A 表現(1)ア (ア) (2)ア (ア) B 鑑賞(1)ア (ア) 共通事項(1)ア〉

自分の心の中をみつめる中で、主題を生み出し、色や形、質感、構図などの効果を考え、材料や用具などの特性を生かし、表現の意図に応じて創意工夫して表現する題材。ワークシートを使用して深く自分と向き合い、自分を表す主題を決定していた。主題が明確だと表現活動もスムーズに行えた。また、毎時間の終わりに ICT 端末で写真を撮り、コメントを付けて教師に提出させていた。学習の振り返りと自己評価・相互評価に効果的な取り組みであった。

2 県教研レポート 「現れた線や形から」

〈A 表現(1)イ (2)イ 及び B 鑑賞(1)ア 共通事項(1)アイ〉

第 4, 5 学年(複式学級)で実施 (岩手小学校 指導者 三枝 清美)

コンテや消しゴムを使って、自分の表したいことに合わせて、イメージを広げながら工夫して表す活動。主題のもち方、線や形の探り方、色の使い方、画面構成から受け取るイメージなど、発達の段階による違いを実際の姿から学ぶことができた。5年生では、知識・技能の中の「動き」「奥行き」の獲得がよく感じられた題材だった。指導者の「子どもの思いが見える作品づくり」を心がけていることが伝わってきた。導入では、「それぞれの考えを大切につくっていくこと」が明示された。活動中では、子どもたちが一本一本の線を大事に引いている姿が見られた。終末部では、「みんなちがったいろいろな作品が生まれた」ことが価値付けられた。指導が一貫していた。

(部長 小澤 朋子)

I 研究の内容

昨年以上に研究の機会が減少する中、研究の方向性をしっかり定め、効率よく研究を進めていくことが求められている。本年度の研究については、前半について関東甲信越ブロック研究大会に提案する「地域教材を生かした教材（山梨ブランドを目指した養殖マス：甲斐サーモンレッド）」についての検討を行った。また後半については新型コロナウイルス感染対策として各校で実施している分散授業や分割授業、リモート授業（配信授業）などにおけるICT端末の有効的な活用方法についての研究を行った。

II 成果と課題

1 地域教材を生かした教材（山梨ブランドを目指した養殖マス：甲斐サーモンレッド）

昨年度からの継続的な研究であり、昨年12月に行った研究授業をもとに、生徒が考えを書きやすいような若干の修正を加え、提案原稿を提出することができた。今年度のブロック研究大会は全国大会も兼ねており、東山梨の研究を全国的に紹介することができた。

未来社会を展望し、生活を創る力を育てる技術・家庭科教育
～地域資源を生かした生物育成の授業～

山梨県中学校技術・家庭科研究会
甲州市立豊山中学校 岡田 浩

1 はじめに

東山梨地区では、ここ数年の産地・関心を引く、いっつも賑わっているような身近な資源を生かした教材の開発について検討・研究してきた。

新たな教材を開発する時期は、学習指導要領の改訂により、作物の栽培、動物の飼育及び水産生物の栽培については、これまではいずれかを「選択」することになっていたものが、「いずれも扱うこと」と大幅に変更された。尚のな山梨県において水産生物を扱うことは、一見ハードルが高いように感じられるが、さまざまなアグロを調べてみると、県産品の種類が非常に多いことが分かった（人口は全国1位）、水産物の種類・出荷量は全国トップクラスであることが分かった。

私たちが生産する東山梨地区は、果物から酒や醤油まで用途は多岐にわたる。全国的にも有名な産地はブドウやりんごなどの果樹栽培の普及に大きく影響してきた。この豊富な水産資源とともに、水産物の栽培が国内の一つであると同時に、県外にも水産物の消費量は、それほど多くないことも分かってきた。

これまでの地域教材展開の経験を生かし、水産物の栽培に関する教材開発を研究が研究テーマとして、研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 生徒の基礎調査
本校の2年生3名を対象にアンケートを行った。生徒がイメージしやすいように、水産物を中心に水産生物について質問した。

水産物としての水産生物については、45%がとて好まず、30%ほどは好きといふほど好きである。90%近い生徒が水産生物を知らないことが分かって、調理の仕方や調理法や食法として食する機会が少なく、飼育や育てて食する機会が多い（「食べ方」に関する質問では割合95%、平均90%から98%であった）ことも分かった。

特に淡水魚については、アンケートの回答より回答の傾向が気になり、魚の飼育方法が分からなかったりすることが観察される。環境の変化により飼育や飼、おりにでの飼育による環境が格段に減少（2019年の釣り人口は約70万人は2009年比で約半減の約35万人に減少した）ことも一因と考えられる。

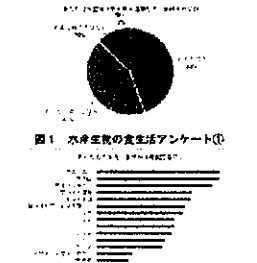


図2 水産生物の食生活アンケート②

また魚に関して調理法について調べてもらったところ、魚のような区別や調理法がなかった、肉よりだった、いろいろな食べ方があっているななどを実感することができた。

アンケート全体を通して、生徒は水産生物に関心をもっていることや、淡水魚の飼育や飼育の仕方の知識が乏しいことが分かった。魚の飼育方法について調べたことは、成育段階の学習のみならず、東山梨の地域の教材を生かした調理法や、学校現場が採用している教材の観点からも、大きな意味をもつと考えられる。

(2) 山梨県における水産生物の栽培の現状
山梨県産品推進協議会自身は山梨県水産物センターと研究が協力のもと、本研究が検討し、授業で扱うことができると考えたアグロや特産品をまとめた。

- 山梨県では（H29産額・養殖物生産額より）
- ニジマスの生産額71億（全国3位）
- リケマス産品の生産額28億（全国3位）
- アマゴ、ヤマゴ、ブリなど
- 生産量はバフム類をピーク（およそ200t）に減少、その後は増加（およそ1000t）
- 人口10万人当たりの養殖物消費額は約400kg（全国1位）
- 飼育飼育の仕方に伴うコスト削減により、養殖場は増加している。
- 山梨県産品推進協議会にて大型メダカ「甲斐サーモン」「甲斐サーモンレッド」の開発・養殖・販売。

○山梨県水産物センターにて新たな養殖種「富士の舟」の開発・養殖・販売
※メダカとキングサーモンの掛け合わせによる遺伝子

(3) 「甲斐サーモンレッド」の教材開発
県内で開発された品種では「甲斐サーモン」「甲斐サーモンレッド」「富士の舟」として商品化されており、東山梨地区では「甲斐サーモンレッド」を栽培する養殖場の現状がある。

この「甲斐サーモンレッド」の特徴は3点に集約され、次のように「県産品推進協議会」発行のパンフレットにもまとめられている。

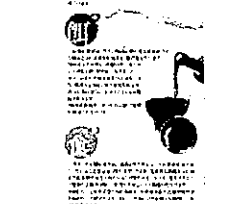


図3 甲斐サーモンレッドのパンフレット
以上の特徴を学習指導要領で示されている内容に「生活や社会を支える生物育成の技術について調べた内容など」を添えて、次の事項を身に付けることができるよう指導する。この学習内容を担うしつらけのようによりに概観した。

学習内容	甲斐サーモンレッドの特徴
社会からの期待	環境にやさしい飼育方法の普及の安心をアピール
生徒の関心	環境にやさしい飼育方法の普及の安心をアピール
学習指導要領の観点	環境にやさしい飼育方法の普及の安心をアピール

未来社会を展望し、生活を創る力を育てる技術・家庭科教育

～「住生活」における授業の研究～

I 研究の内容

1 テーマ設定の理由

新学習指導要領では「住生活」において少子高齢化の進展や自然災害への対応が一層求められており、幼児や高齢者の家庭内事故を防ぎ、自然災害にそなえるための住空間の整え方を重点に扱い、安全な住まい方の学習の充実を図ることをねらいとしている。

また小中学校の各内容の系統性の明確化が強調されているため、小学校での学習内容も十分に理解していく必要があると考えられる。

中学生にとって住まいは、心の安定を図る大切なものである。しかしその反面、自分が積極的に働きかけなくても比較的快適な生活が成り立っており、よりよい住まいを主体的に考えようとする生徒は少ない。食生活の学習などと比べ比較的生徒の興味・関心が低いように感じられ、指導の工夫がより必要な領域であると考えられる。

今年度は生徒が「主体的に住生活にかかわろうとする力の育成」を目指し、住生活から課題を見つけ出し、解決していく力を身につけさせるためには、どのような指導の工夫をし、実践していくかということをテーマに研究を行った。

2 授業実践

(1)「住まいに関するアンケート」の実施

研究にあたりよりよい授業を展開するために、まず生徒の興味・関心や知識などの実態を把握することとした。そのためにまず事前アンケートを作成し、各校で実施した。

掃除・快適な生活・エコ・防災など各分野を意識した内容にし、その結果を分析・考察し、それをもとに授業の組み立てや扱う内容・指導法等を考えるための参考とした。

(2)「住み方の意識度チェック」の活用

住生活において、生徒が自分自身の生活から問題点や課題点を見つけることが難しいと考えられる。そこで授業の導入の段階で実施することにより、生徒自身が住まいにかかわる意識の現状を把握することができ、住生活の学習への興味・関心や授業に向かう態度の向上へとつなげた。「点数の低い項目へ意識をもって生活しよう」という生徒への動機付けにもなった。

(3)「振り返りシート」の工夫

毎時間「授業で学んだこと・発見」「調べたいこと・実践してみたいこと」などを記入した。その日の授業を受けて、もっと知りたいなと思うことを書かせておくことで課題を

見つけやすくなった。

(4)住生活における「生活の課題と実践」の授業実践

「住生活」の学習を振り返り、既習事項の中から問題だと思っていることや、自分や家族にとって必要性があり、もっと調べたり、実践したりしてみたい課題を設定し、仲間などのアドバイスを参考にして計画・実践を行った。その後、計画をもとに冬季休業中に各自実践してきたことをレポートにまとめてきたものを、グループに分かれ発表し合い、お互いに意見や感想などを交換し合うことで学習を広げ、成果を振り返る。仲間からの意見やアドバイスをもとに気付いたことをまとめ、自分の生活の改善に目を向けさせ、これからの生活に生かすことをねらいとする。

II 成果と課題

1 成果

小学校と連携を図り、小学校での学習内容を把握したり、住生活の領域に関して興味・関心を高めたりするためにアンケートをもとに、よりよい授業づくりの工夫ができた。また生徒が自分自身の住生活から問題点や課題点を見つけ出すことが難しいと捉え、様々な工夫をしてきた。毎時間の「振り返りシート」を活用することにより、学んだことへの理解とともに、自分自身の生活と結び付けて考えることができ、問題点などを見つけやすくなったといえる。

事前アンケートや振り返りシートなど、全部員で案を出し合いながら作成し、各校で実践した後、結果や分析を行い授業づくりに生かすことができた。コロナの影響で研究会の回数が減ってしまったものの、それぞれが実践した授業の成果や課題をお互いに出し合い、共有できたことが研究の大きな成果だったといえる。

2 課題

住まいにかかわる内容は、調理や被服実習のように授業の中で実習しにくい領域であるので、授業での学習を家庭や地域で実践しレポートにまとめたり、レポートを通じて仲間と共有し、解決法を見つけたりするような話し合いの学習が必要であると感じ実践した。しかし、それには家庭や地域の協力を得る中で、協働することの大切さをさらに指導していく必要性を感じた。またコロナ対策で話し合い活動が厳しい昨今、タブレット端末を使い意見交換するということも考えられるが、使いこなせる技術と学びの深まりという点でさらに研究していく必要があると感じる。

また、「生活の課題と実践」では解決方法として、他の領域で学んだことも生かしながら実践していくこと、また実践をした後、反省点や改善点を考え、次の実践へつなげていくということが大切であるため、その点についてもさらに今後の研究課題として来年度も取り組んでいきたい。

(部長 村田有希子)

教材の本質をふまえた体育指導のあり方

～ゲーム・ボール運動を通して～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

- (1) 昨年度までの研究実践を生かしながら、「ゲーム・ボール運動（ゴール型・ネット型・ベースボール型）」において、わかって・できる楽しさ、喜びを味わうことのできる授業づくりについて研究を深める。
- (2) (学習資料や学習カードなども含めた) 技能を高めるための効果的な言語活動について研究をする。
- (3) ICT 機器を有効に活用した授業実践について研究する。

2 授業研究

5年生「タグラグビー」（ゴール型） 保坂 洋仁 教諭 勝沼小学校 5年生

(1) 授業実践から学んだこと

- ・ゲーム中に撮影したものを作戦タイムで活用することは、作戦タイムの時間を考えると最大限生かすことは難しいと感じたが、自らのプレーを客観的に見ることができると有効的だった。また、作戦ボードのデジタル化についても、子ども達の思考を蓄積することができるため効果的だと感じた。
- ・端末を見ながら、あるいは動きを指さしながら「ラインディフェンス」「攻めるならこれだね」「この人がこう行って…」「この人がこう上がって…」「俺は後ろがいい…」「一人はオフENSEをやって…」など、たくさんの発言、やりとりがあり、実際の動きを見ることで次の作戦や動きについてより具体的なイメージを持つことができた。
- ・本単元を通し、児童のリーダー性も育っており、様々な場面において中心になって声をかける児童の姿が見られた。このように児童のリーダー性を育てていくことも効果的な言語活動には欠かせない要素であることを再確認することができた。
- ・教諭の「他のパスも練習してみよう」というような声掛けがあったが、「いやもう少しこのパスを練習しようよ」という声が子どもたちからあり、主体的に取り組んでいる様子が見えた。飛ばしパスを練習しているチームを見たが、そのチームが実際に試合で飛ばしパスを行っていたため、スキルアップタイムが活きていると感じた。
- ・ゲームの中では外側に意図的に逃げ、そこでポイントをつくり反対側のオープンスペースへパスをつなぎ、トライという場面もいくつか見られた。また相手を引き寄せパスを出すという感覚も、経験を重ねるごとに備わってきているように見えた。タグラグビーの面白さ、魅力が児童にも分かり始めてきていた。

(2) 授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

- ・チームの人数や場の大きさなど児童の運動量確保のための環境づくりの難しさ。
- ・ゲームのルールの重要性。児童によるセルフジャッジの方法。
- ・ICT機器の活用方法。(端末を使う時間の確保など)
- ・体育科におけるICT機器(タブレット端末等)を有効活用した指導方法の研究。
- ・コロナ禍で児童の体力が低下しているなか、運動量を確保するにはどうすればいいか。

II 成果と課題

1 成果

- ・教材の本質を研究し、運動の特性と児童の実態を意識した授業づくりをすることができた。
- ・今まで実践がなく、児童も馴染みのないタグラグビーについて研究を深めることができた。
- ・運動量の確保のためスキルアップタイム等導入の場面の工夫を考え、実践することができた。
- ・感染症対策をしながら、対話を用いた有効な言語活動について研究することができた。
- ・ICT機器を用いて単元を通して有効な手段(振り返りシートや作戦ボードなど)を生み出すことができた。

2 課題

- ・体育は実際に体験することで特性をつかむことができる。感染症拡大のため実技研修をすることができなかった。
- ・実技研究会や授業研修が感染症拡大の影響で直接経験することができなかった。今後の授業研究会の在り方。
- ・感染症が今後もさらに続いていくと考えた場合、ボール運動などチームで協力して行うなどの活動に難しさを感じる。そのため個人でも取り組める領域を視野に入れていく必要がある。(体づくり運動・器械運動・陸上運動など)
- ・体力向上に繋がるように各学校の日常の体育や体力づくりについて研究し、実践報告などをしていく。

3 参考文献

- ・小学校学習指導要領解説体育編(平成29年7月)文部科学省
- ・小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック高学年 文部科学省
- ・みんなの体育5・6年生 学研
- ・「心と体をはぐくむタグラグビー」 高山由一著 東洋館出版社

(部長 堀内 友貴)

生きる力を育てる保健体育学習を目指して
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

I 研究の内容

1 研究のねらい

- (1) 授業実践を通して、基礎・基本の定着を目指した授業の改善・工夫を考える。
- (2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践及び研究を行う。

2 研究概要

- (1) 授業研究を通して、研究のねらいに迫る。

2月 「保健分野：傷害の防止」 笛川中学校 布施 洋 教諭

- (2) 各校における基礎・基本の定着を目指した授業の改善・工夫についての取り組み実践や学習カード等の情報交換、先進校の文献や資料を参考に、指導案・学習カードの研究を深める。

3 理論研究に基づいた授業実践について

授業研究では、Web での開催となった。事前に録画した授業の様子を動画や写真で授業者が説明し、研究会を行った。生徒の動きや、発言を見逃さないために、各グループには定点録画のタブレットを準備した。ICTの効果的な活用により、生徒が主体的に学習に取り組む姿が多く見られた。今年度も感染予防を考慮しなければならず、ICT機器や話し合いの持ち方を特に考慮した授業展開で行った。研究授業前には、講師による事前指導も行われ、その様子をタブレットの中でいつでも見られる状態にしておく工夫もあった。研究会において、さらに指導案や評価規準・学習カード等の情報交換や学習会は、今後も生徒の実態に合わせ実践を深めていきたい。

II 成果と課題

ICTを活用して、制限がある中でも話し合い活動や学び合い活動を工夫することができた。取り扱う教育内容に応じた外部人材を効果的に活用し、「深い学び」につながれたことが成果である。身につけた技能を日常生活と関連付けて考えることで生徒のより主体的な活動につながれた。コロナ禍において、より社会生活に生きる喜びが必要とされる中、研究授業を通して保健授業が深められた。自他の健康に関わる課題に対して、より対話的に知識を活用する方法を見出したり、学習の課題や今後の成果物となりえるカードを研究したりすることができたことは成果であった。

主体的な活動にするためにも、身につけた技能をどう活用するのかを明確に授業を行うこと、また、どのような場面で生きるのか（場面設定）を示していく必要がある。

Ⅲ 成果物

研究授業

- (1) 単元名 「保健分野 傷害の防止 応急処置」中学2年生
- (2) 授業者 笛川中学校 布施 洋 教諭
- (3) テーマ 生きる力を育てる保健体育学習を目指して
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

ア 授業の流れ

- ・TJカードの記入（生活習慣への意識の向上）
- ・タブレットを使用して、前時の確認

本時の目標

- ・応急手当の意義を自分の言葉でまとめることができるとともに、心停止の人を発見したときに自分がどのような行動をすればよいか理解できる。

イ 「主体的・対話的で深い学び」に迫る手立て

- ・技能を使う場面を、身近な事例をあげて考えることが深い学びにつながるため実際に生活していく中で起こりうるであろう9つの場面を設定した。それぞれのグループで適切な対応について考えながら実技を行っていた。
- ・3人一組で、役割分担（実践・撮影・観察）をした。その中で、互いにアドバイスをしたりされたりしながら学習を深められた。
- ・心肺蘇生法を実際に使う場面はないかもしれないが、その場面をいかに想定できるのかが深い学びにつながるため、グループの中だけでなく、場面設定の違うグループとの意見交流を行ったことでさらに学びが深まった。

ウ 教材教具等の工夫

- ・タブレットを全員に持たせたことで、見本との比較や仲間のアドバイス前後の変容、仲間との比較など、自分自身の振り返りができた。
- ・3人に1人のダミー人形を準備した。待ち時間もなく有効であった。
- ・付箋での意見交換を行った。

来年度に向けて

単元において、「いつ、どこで、何をみとるか」「単元を通して何を学ばせたいのか」といった授業観を持つことが重要であり、各校の実態に応じた授業実践と情報交換で共通認識を持ち、研究を深めていきたい。（部長 金森智絵）

自らの健康づくりに意欲的に取り組む子どもをどう育てるか

【甲州支会】 心身ともに健康な生活を送る子どもをどう育てるか

～健康な生活習慣への取り組み～

「健康とは何か」という疑問に対する関心が高い一方で、子どもたちの就寝時刻の遅延や運動不足による体力の低下、食生活の多様化などが懸念され、新型コロナウイルス感染症の流行やメディア機器の普及など社会状況の変化も、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えている。私たちは子どもたちに、現在から将来にわたって健康に過ごしてほしい、自分の体や心とどう付き合ったら自分なりの健康な生活が送れるのかを考え行動してほしい、と願っている。そこで今年度本部会では、昨年までの研究の成果を基に部会を再編成し、「生活習慣」と「心の健康」に焦点を置いた研究を行うこととした。「健康とは何か」また「健康に生きるために必要な要素は何か」を探り、科学的根拠に基づいた内容で、子どもたちが健康の大切さを実感できるような指導の工夫、よりよい健康生活を意識し自分事として行動化・習慣化できるような支援や指導、環境づくりをしていきたいと考え、本テーマに設定した。

I 研究内容と方法

- 1 生活習慣 : メディア機器の使用と目の健康について、実態把握と指導資料作成
- 2 心の健康 : 心の健康を保持するための効果的な健康教育のあり方について、文献研究及び中学校での健康教育の実施

II 成果と課題

生活習慣グループでは、1年目の研究であることから各校における実態把握を行い、その結果を基に指導資料を作成することを予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で計画通りの研究ができず、グループ6校の児童の実態把握と参考資料の収集、各校ごとの目の健康に関する取り組みに留まった。来年度以降、児童の実態把握を深め、その分析を基に指導資料を作成し、それらを活用した保健指導を行っていきたい。

心の健康グループでは、昨年度まで中学生の「心の健康」について研究を進めてきたが、小学校5校が加わり、発達段階に合わせ系統的に行っていけるよう文献研究を行った。また、保健指導時に、ICT端末を利用していくためにどのような方法や活用法があるか模索し、ストレス尺度をGoogle Formsを使用し集計できるよう作成した。中学校では、今年度も、定期的にストレス尺度を測り、各校の実態に沿って集団・個別指導を行うことができた。

III 成果物

- 1 生活習慣グループ 6校の視力検査の集計
- 2 心の健康グループ 心の健康にかかわる指導案 Google Formsで行えるストレス尺度

【山梨支会】 児童生徒が意欲的にとりくめる健康教育をめざして

近年の情報化やグローバル化といった社会的環境の変化が、子どもたちの基本的な生活習慣に大きな影響を与える中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が、児童生徒の心身の健康へ、さらなる影響を与えていることが推測される。

本支会では、子どもたちが生涯にわたって健康に過ごし、これから直面する様々な健康課題に適切に対処し、解決していくため、今年度は、本テーマのもと、「生活リズムと健康」と「食物アレルギーの対応」に焦点を当てて、発達段階に応じた保健教育の実践を目指して、研究を深めることとした。

I 研究内容と方法

1 生活のリズムグループ 「生活のリズムと健康」

- (1) 新しい生活様式に合わせた「はやおき・はやねチャレンジカード」の実施・分析
- (2) 運動と生活リズムについて指導資料作成・保健指導の実施

2 食物アレルギーグループ 「食物アレルギーの対応を通して」

- (1) 教職員緊急時対応研修の計画・実施
- (2) コロナ禍における食物アレルギー対応について事例研究

II 成果と課題

生活のリズムグループでは、小学校で「はやおき・はやねチャレンジカード」の実施が9年目となった。チャレンジカードの取組から学校の実態を把握し、各校の課題に沿った保健教育を行う等、チャレンジカードを有効に活用することができた。また、今年度は新たに運動の項目を加えたことで、生活のリズムは、早起き・早寝・朝ごはんだけでなく、運動も踏まえてリズムを整えることが大切であることを児童に伝えることができた。運動を取り入れた生活習慣を楽しみながら継続していく手立てについて、今後も研究を進めていきたい。

食物アレルギーグループでは、児童生徒に携わる全教職員が食物アレルギーについて研修する機会を作れるよう、多くの教職員が参加できる体制を考え、緊急時対応研修を計画し、実施した。コロナ禍での実施であったため、ICT 端末を活用して研修を行うという新たな方法を見出すこともできた。また、コロナ禍における食物アレルギー対応について、事例研究を行い、各校の実態や課題が明らかになった。コロナ禍であっても、学校給食における食物アレルギー対応を確実に進めていけるよう、今後も研究を進めていきたい。

III 成果物

- 1 運動と生活リズムに関する保健指導教材・資料
- 2 食物アレルギーに関する教職員研修及び保健指導教材・資料

(部長 雨宮二葉)

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～

生活科において、子どもたちが身近な人々、社会及び自然と関わり合う中で、価値ある経験をいき、交流や関わりを深めていくことでより豊かな学びへと繋がっていく。子どもたちが体験を自分のものとし、もっとこうしたいと学習に向かう意欲を高めていくためには、必然性のある活動が不可欠である。時に友達や物と関わり、言葉や活動でやりとりをしたり、指導者との言葉のやりとりをしたりする中で体験による学びがより深まっていく。そして評価の視点や基準を明らかにしていくこと、そして見取ったことを生かして、その子どもなりの前進を見いだしていくことで、適切かつ子どもの気持ちの動く学習へと繋がっていく。

そこで、子どもたちが主体的に学び、物や人や自然との関わりの中でより深い学びをしていくための「具体的な手立て」「学びの深まる交流」「適切な評価のための評価カードや見取りの方法」、「学びを深めるための教師の関わり方」についての研究をすることで、生き生きと学ぶことができるのではないかと考えこのテーマを設定した。

I 研究の内容

1 実践紹介

日々の授業について実践を紹介し合い、授業に生かす。

主体的・対話的で深い学びへと繋がる教材や評価方法について学び合う。

2 研究授業

第1学年 「もうすぐ 2年生」

授業者 井尻小学校 山下 史江 先生

今回の授業は、自分たちが入学してきた時のことを振り返りながら入学してくる園児たちにしてあげたいことを考えることを通して、自分の生活やこれまでの成長を支えてくれた人々への感謝の気持ちを持ち、これからの成長への願いと期待を持って生活をしようとすることを目標に行った。始めに児童が「新しい1年生のためにできること」を自分で考える際はICT端末を用いた。ホワイトボードアプリを用い、グループ毎に同じシートを使用して付箋機能で書き込んでいった。付箋1枚に1つ書くことにより、仲間分けがスムーズにできるようにした。その後、ディスタンスをとりながらグループ活動を行い、短冊に小グループ毎で「新しい1年生のためにできること」を書き込んでいき、学級全体でアイ

デアを共有していった。まとめでは、交流を踏まえて再び個の活動を行い、これからどうしていきたいか、自分は何をがんばるのかをワークシートへまとめた。

デジタルとアナログの良さを取り入れながら、自分の考えを出すことが難しい児童も友達の考えを通してどうしていきたいかを書くことができていた。ICT端末やワークシートでの取り組みにより、手元で机間巡視を行うことができたり、途中やまとめの記録が残っていることでも評価につなげたりすることができるということが確認できた。丁寧な反応や問い返しが児童の思考を深めていた。

II 成果と課題

1 成果

- ・各自の実践紹介では、コロナ禍であっても地域や学校の実態に合わせた工夫した授業が紹介されて、互いの実践に学ぶことが多かった。特にICT端末を活用された実践も多く、必要などころでデジタルとアナログをうまく使い分けることの良さについて共有することができた。
- ・実践以外にも生活科について情報交換を行うことができ、授業に生かすことができた。
- ・児童の活動の様子、実際に使ったワークシート、評価の方法、児童の成果物など紹介し合うことで成果や悩み、課題を共有し、考えることができた。
- ・コロナ禍という状況下ではあったが、オンラインでの会議、YouTubeを活用した事前視聴など、活用できる機能や技術を用いて研究会をもち、学び合うことができた。

2 課題

- ・今年度も昨年度に引き続き、コロナ禍ということもあり校外での活動や地域の方々との触れ合いといった活動を十分に行うことができなかった。各校で工夫をしながら取り組みを行ったが、体験活動・表現活動が重要である生活科であるが故に、難しさもあった。
- ・研究授業に向けた準備や、収録のための準備など授業者に大きな負担をかけた点もあった。またオンライン会議などweb上での活動も多くなり、説明が不足していて資料がうまく開かなかつたり、会議への参加に時間がかかったりしたこともあった。授業案検討に必要な時間が確保できるようにしたい。
- ・ICT端末のアプリなど活用方法を学ぶ研修会を設定していたが、感染症対策で中止となってしまった。学び合う機会を大切にしたい。

(部長 赤荻 美弥)

一人ひとりの自立をめざした学級づくり

I 主題設定の理由

今の子どもたちが成人して社会で活躍するころには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予想が困難な時代となっている。子どもたちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化している。

しかし、学校が抱える課題が複雑化・困難化しても、学校での「学び」の基本は、学級集団にあるといえる。一人ひとりの子どもが集団の一員として互いに認められ、楽しく生活し、学ぶための空間が確保できるような学級集団づくりが求められる。そしてさらに、自分たちの思いによって自治的な活動を創り出し、そこから学びあえる学習集団にまで高めていく必要があると考える。

そこで、本部会では、一人ひとりが認められる学級づくりをめざして、「一人ひとりの子どもが居心地の良い集団づくり」、「人間関係の絆を強め、人とのつきあい方を学んでいく場面づくり」について研究を進めてきた。今年度は、人権教育の推進についての学習を位置づけ、「一人ひとりの児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになる」という人権教育の視点も大切にしながら、「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」を明らかにするための研究を行っていくこととし、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

- (1) 「クラス会議」「グループワークトレーニング」「エンカウンター」などの学級づくりのための手だての学習・演習に取り組み、学んだことを日々の実践に生かしていく。
- (2) 講師を招き「学級づくりの手立て」についての学習会を行う。
- (3) 授業研究を通して「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」についての学習を深める。

2 研究の具体的内容

- (1) 第1回研究会 今年度の研究の方向性の確認
- (2) 第2回研究会 年間計画についての検討・確認
学習会①「クラス会議」
 - ・「クラス会議」の演習を通して、子どもたち全員で話し合い解決策を導き出す方法や、安心して自己開示ができる学級経営の手法について学ぶ。
- (3) 第3回研究会 (新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため中止)
学習会② テーマ「子どもと学級を作る33の手立て」
講師：雨宮 正倫先生(山梨県教育委員会 義務教育課 指導主事)
- (4) 第4回研究会 (新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため個人研修)
学習会③「グループワークトレーニング」
 - ・資料をもとに、「グループワークトレーニング」の意義を学んだり、それぞれ

れの学級での実践に生かす。

(5) 第5回研究会

学習会③「学級ソーシャルスキル」「アサーション・トレーニング」

- ・「学級ソーシャルスキル」「アサーション・トレーニング」の演習を通して、話すスキルと聴くスキルを向上させていく手法を学ぶ。

(6) 第6回研究会 秋季教育研究山梨集会の還流報告

統一授業研究会に向けた指導案検討会

(7) 第7回研究会

研究授業（事前録画）動画視聴

第1学年学級活動

「学級をよりよくしよう～1ねん2くみのえがおいっぱいの木をつくろう～」

<学級活動（1）ア>

指導者 日下部小学校 柳澤 晴子 教諭

研究討議

(7) 第8回研究会

研究のまとめ（本年度の成果と課題について、来年度の研究の方向性について）

III 成果と課題

1 成果

- ・実際に体験をしながら研究を進めることができたので、どのように学級づくりを行っていけばよいかイメージがわきやすかった。学級づくりには、様々なことが重なり合っている。仲を深める取組、話し合いをする取組など幅広い学級づくりのための取組を自分たちが実際に経験しながら学ぶことができ、良い経験となった。
- ・本部会のよさとして、中学校の先生方との交流ができることがあげられる。本年度も中学校の先生方の部会所属により、異校種の指導や学習の実態を知ることができた。小・中の連携についての視点も得られ、幅広い学習が可能だった。
- ・研究授業では、学校の教育活動全体を通じて、一人ひとりの自立をめざした学級づくりが行われること。教師の言葉の大切さ、ねらいのはっきりした授業の成果の大きさなど、日々の教育活動の中で、私たちが大切にしなければならないことを再確認することができた。
- ・自治的な子どもたちを育むためには継続的な指導が必要であると感じた授業実践であった。今後も、日頃の研究を生かして授業実践に取り組んでいきたいと思う。

2 課題

- ・新しいサイクルの1年目となった今年度は、学習会を中心に研究を進めてきた。しかし、コロナ禍で研究会が開催されないことが数回あった。今後も、変更を余儀なくされ可能性がある。そのときの状況で柔軟に対応できるようにしていくことが望ましい。
- ・来年度の研究は演習だけでなく、日々の実践の持ち寄り、どのような手立てが子どもたちに有効なのか協議・研究する機会を設けていく。また、ICT機器の活用が叫ばれていることも視野に入れ、自治的諸活動・生徒指導の分野での有効的な活用方法について学んでいく機会を設けていくことが必要である。

（部長 小林千恵美）

自立をふまえて（どの子ども共に生き，共に育つ）

～ 一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方 ～

I 主題設定の理由

特別支援学級数は年々増えている。一学級の在籍状況は学校規模に関わらず一人学級から多学年大人数と様々であり，障害種別も多様である。通級指導教室も昨年度から山梨市の中学校に設置がされ，東山全体で4教室となった。通常学級においても支援や配慮を必要とする子どもが多くおり，一人一人の子どもの実態は様々である。このため，支援学級・通級指導教室・通常学級の担任・担当が抱える課題は多様化しており，子どもたち一人一人の障害の状況や発達段階，その特性に合わせた支援・指導は，共通した研究課題である。

昨年度の春季教育研究集会において研究テーマは「どの子ども共に生き，共に育つ」でサブテーマは「ありのままを認め，『共に生き，共に育つ』ことをめざして」に決定した。

具体的な研究内容としては，

◎各地区で一人一実践など，全員が主体的に研究に参加し，組織研究にあたる。

◎レポート内に子どもたちの変容を記載し，成果と課題を明らかにする。

◎具体的な内容 [インクルーシブ教育を意識した実践]

などの内容を研究していくことが確認されている。

本年度はコロナ禍で開催日数が少なくなったが，授業実践・学習会・情報交換などを通して，児童生徒の理解と支援方法などを模索し，児童生徒一人ひとりの実態に合わせ，自立をめざした支援内容，指導の方法に迫るべく本主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究テーマに基づいて，実践発表と研究授業を行った。

9月 29日 指導案検討 笛川小学校 阿部 かおり先生

2月 3日 研究授業 算数「計算のやくそくを調べよう」

授業者 阿部 かおり教諭 (笛川小)

指導・助言者 岡 正人 校長先生 (玉宮小)

岡 輝彦 校長先生 (菱山小)

2 成果と課題について話し合い，次年度に向けて見通しをもった。

2月 16日 今年度の成果と課題 来年度へ向けて

III 成果と課題

1 成果

【授業について】

・統一授業研において，今年度のテーマである「一人一人の実態を踏まえた支援と指導

のあり方」を学ぶことができ、有意義な研究討議ができた。

・数少ない研究会の中だったが、指導案検討については全体でじっくり討議でき、事前収録での会で、自分たちも学びの場となり、有意義な研究討議ができた。

・ビデオ授業は児童の様子が分かり、児童の負担もなくてよかった。

・特別支援教育に初めて関わる教員にとって、自立活動の内容や意義を学ぶよい機会となった。

・少ない研究会の中で、特別支援が必要な児童にとって将来を見据えて（社会的に自立するために）どんな力が必要であるかを考えて自立活動や教育課程を組んでいくことが大切であることを確認できたことがよかった。

・今年はコロナ禍で少ない回数であったが、よい研究授業をつくることができた。

・ビデオという新しい試みで、通級の授業を観察できたことはとても成果があった。

・1月の部会で、授業を見せていただいて、先生方と知的・情緒に課題のある児童の授業について共通理解できたことがありがたかった。

・研究授業では、複式の支援学級の授業を初めて見ることができ、大変勉強になった。

・昨年度に引き続きビデオ視聴による授業観察となったが、児童への負担も少なくよかったと思う。

【その他】

・感染症への対策を考えながら研究会を継続できたことが良かった。

・初めて特別支援学級の担任となったので、専門的な話や、先生方の様々な指導法を聞くことができ、ありがたい機会だった。指導案検討もじっくり行え、先生方の意見を聞いてよかった。授業の様子や児童との関わり方を詳しく聞いたことにより、自分自身が言葉掛けに注意し、指導や支援に取り入れていくことができた。

2 課題

コロナ禍での制限がかかる中での研究会開催だったが、状況が改善すれば他校の児童生徒の様子や実践例等の事例検討の場を再開していただければありがたい。

・コロナ禍なので、回数の制限も考えられるが、小グループでの検討や情報交換の場もよいのではないかな。

・もし可能であるなら研究会の中で15分程度の「ミニ学習会」を開催し、学びの機会を設けてはどうか。

・コロナ感染症対策のために、計画通りに研修を進めることができなかったことが残念である。

・新型コロナによって3密の回避が叫ばれる中、特別支援学級の実態は、なかなか厳しいのではないだろうか。特に1mの距離などはなかなか保てないし、換気しようとしても、情緒級などでは、児童がすぐに窓を閉めてしまうことがある。特別支援学級の児童がPCR検査で陽性反応が出た時のまわりへの影響は教師も含めてかなり大きいのではないかなと思う。こうしたことをきちんと対策が取れるように話し合っておくことが必要だと感じている。

（部長 門田寛子）

学校教育における福祉教育のあり方を探る

I 研究の内容

- 1 各校の福祉教育の実践や様々な実践例から学び合う。
- 2 福祉教育のあり方を探りながら、研究授業に向けて部会員全員で授業づくりを行う。
- 3 理論研究、施設見学を通して、福祉について理解を深める。

II 実践・研究授業

1 実践事例学習会

部員各自で、統一授業研の授業作りのため、参考となる実践事例（各教科・道徳・総合的な時間等）を持ち寄った。学習会では、資料の参考となる部分について学び合い、統一授業研の授業づくりに向けて方向性を話し合った。

2 研究授業

第4学年 学級活動 後屋敷小学校 天野 友理

(1) 題材名 「自分と友だちの違うところを考えよう」

(2) ねらい

○自分と友だちの違うところに気づき、友だちのことを受け止めることができる。

(3) 本時の学習内容

- ① 自分のことや友だちの好きなことについて考える。
- ② 自分と友だちの違いを探すことを説明し、めあてを確認する。
- ③ 「わたしと友だちのちがうところ」のワークシートに書いたものをもとにインタビューする。
- ④ インタビューの結果をまとめる。
- ⑤ 互いの違いを考える。
- ⑥ 考えを発表し合い、感じたこと、考えた事を交流する。
- ⑦ 違いを認め合うために、どんなことができるか出し合う。
- ⑧ ワークシートに記入し、本時を振り返る。

(4) 研究会より（話し合いの内容と助言）

- ・部会のねらいが達成されている授業だった。導入の「みんな違う」の発言からねらいにスムーズにいった。
- ・1学期から段階を追って授業をしていて素晴らしかった。子どもたちがさらに実践していくことで深まる。
- ・高学年になると、違うことを意識しすぎるので、中学年のうちからこのように授業をしていくのはいいと思う。
- ・「明日からやってみよう。」という子どもの振り返りが良かった。
- ・日頃の素地づくりから本時があったと思う。

3 各校の実践報告会

各校の福祉教育の実践から、互いに学び合い、自己の実践に生かした。

- | | |
|------|--|
| 塩山南小 | 「自分のよさに気づく」(2学年) |
| | 「SDGsを知ろう」(3学年) |
| | 「児童会の実践から」 |
| 大藤小 | 「自己肯定感を高めるために」(6学年) |
| 菱山小 | 「たてわり活動や地域との関わりにおける実践」 |
| 奥野田小 | 「だれもがくらしやすいためのくふう」(2学年) 他 |
| 松里小 | 「みんながえがおに」(1学年) |
| | 「特別支援学級の自立活動としての取り組み」(特別支援学級) |
| 塩山中 | 「Robts-MakeDreamsComeTrue」の教材を通して(3学年) |

III 成果と課題

1 成果

- ・資料の持ち寄り、実践発表は幅広く「福祉」の引き出しを増やすことができた。
- ・各学校の規模や地域性など、それぞれの特性に合わせた実践を行い、「学校における福祉教育のあり方」について研究を深めることができた。
- ・実践報告会と研究授業の両面から、テーマに迫ることができた。
- ・研究授業においては、コロナ感染予防対策のため、急遽ビデオ録画にし、後日研究会を行ったが、多くの意見がだされ、充実した話し合いができた。
- ・各学校の実践を聞くことができて良かった。コロナ禍で様々な事が例年通りに行えない中でも、工夫した実践が行われていて参考になった。
- ・各校より、子どもたちの心を育てる実践が報告され、自分の学級経営のヒントや見直しの機会となった。

2 課題

- ・開催や内容がかなり制限されてしまったが、今年度、授業を事前に録画しておくという参観の仕方でも問題なかったのので、今後、参集できない場合は、今年度のようなやり方を踏まえていくと良い。
- ・教育課程の中に(教科のように)詳細に示された内容ではないので、指導者の裁量でいろいろなことに挑戦できる反面、内容の吟味や時間の確保が大切になる。
- ・コロナ禍で、計画通りに行かないことが多かったが、研究は止めないという考え方で、少しでも成果があるように研究を続けていきたい。

3 成果物

- ・統一授業研の授業づくりのために持ち寄った実践資料
- ・統一授業研の授業案
- ・実践報告学習会で報告された実践

(部長 高石 圭子)

食生活を考える

～子どもたちのより良い食習慣づくり～

I 主題設定の理由

本研究会では、学校教育の様々な場面で食に関する指導の実践を広げ、子どもたちがより良い食習慣を身につけ、健やかに成長していくことを目指している。そのために、学級担任と栄養教職員によるティームティーチングでの授業の進め方や教材教具の活用方法、給の食時間における食に関する指導案や指導資料を用いた実践の工夫など、研究を進めている。

授業実践や給食の時間における食に関する指導を学校教育の一環として計画的に進めていくことは、子どもたちのよりよい食習慣づくりにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 授業実践

小学校第6学年学級活動

授業者：玉宮小学校 青木宏美 教諭 小林智子 学校栄養職員

題 材：食品ロスについて考える

内 容：食品ロス削減国民運動ロゴマークである「ろすのん」のキャラクターを登場させ、食品ロスとはどういうことかを確認した後、給食センターの残食から「身の回りから、食品ロスについて考えを深めよう」というめあてのもと、授業が展開された。給食センターの動画を見たり、残すと〇〇に入る言葉を考えたり、農林水産省のHPから企業の取り組みを知ったりして、幅広い視野で考えを深める中で、自分たちができることを振り返った。児童の実態に合わせた今日的な課題に目を向けて授業実践が行われた。

2 食育学習会

(1) 「山梨市の学校給食における地産地消の取り組み」 →紙面で

講師：小林由紀子 栄養教諭

(2) 「山梨市にある RosettaGreens」さんへの生産者訪問 →中止

レタス・バジル・ケール・ルッコラなどの葉物野菜やエディブルフラワー（食べられるお花）を水耕栽培している、植物工場

3 実践発表

内容：昨年度までに作成した「給食に時間における食に関する指導案、指導資料」を実際に活用した実践や今までの取り組みなどを交流し合った。

○実践発表 I

・後屋敷小（新谷），神金小（保坂），東雲小（丸山）

○実践発表 II

・八幡小（森），岩手小（望月），山梨南中（福嶋），日下部小（島田）

○実践発表Ⅲ

- ・日下部小（水上），奥野田小（筒井），神金小（小石澤），塩山中（小林）

Ⅲ 成果と課題

1 成果

(1) 授業実践

- ・児童の実態に合わせた今日的な課題に目を向けた授業実践となった。食品ロスを身近な問題としてとらえることができた。
- ・キャラクターの登場，給食センターの残食の写真・洗浄の動画，ジャムボードの利用など，多様な活動を仕組んでいた。
- ・もったいないだけではない，食品ロスの課題を知り，自分たちにできることをしようという気持ちにつながっていた。
- ・ろすのんのキャラクターを登場させたことで児童の興味をひき，また親しみやすく，これからも食品ロスについて考え続けていくことができる。
- ・今まで低学年の授業研究が多かったが，高学年の取り組みができたことがよかった。

(2) 実践発表

- ・給食時間における食に関する指導案と指導資料を実際に活用した一実践を交流し合うことができ，活用の方法や成果を確かめることができた。また，他の学校における活用や実践にもつながり，研究テーマに迫る実践となった。食教育の推進が一層図られた。
- ・今まではあまりなかったSDGsの観点を取り入れた食育の実践ができ，部会としての幅が広がった。

2 課題

- ・授業研究の取り組みをして見えてきた，今日的な課題を取り入れ，研究を深めていくことができるとうい。
- ・教科との関連，現状にあった新たな課題等に合わせた指導案教材作りをしていくと授業内容の幅が広がっていく。
- ・授業実践に向けての理論理論研究や資料収集などの時間も必要だった。
- ・食育は私たちの生き方にもつながる大事な視点なので，保護者に理解してもらうためにも，学校の実践を何らかの形で家庭に知らせ連携できるとよい。

(部長 島田直美)

研究テーマ「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

I 研究の内容

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね
- 2 実践の共有
- 3 授業づくり及び検証

II 研究の方法

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね
日々の授業において、平和・人権を意識した実践を行う。行った実践を実践例として記録する。
- 2 実践の共有
各自が行った実践例を持ち寄り、実践報告会を行う。報告された実践について意見交換を行い、情報の共有を図る。
- 3 授業づくり及び検証
統一授業研究会に向けて、指導案検討を部員全員で行いながら、より良い授業に向けての手立てを考えるとともに、授業を参観する視点を共有する。授業後に研究会を行い、検証を行う。

III 研究の経過

5月 7日	研究組織，研究テーマ，研究内容・方向性について
6月 9日	研究計画決定，授業者・一実践決定
8月10日	夏季学習会（感染拡大のため中止）
9月 1日	実践報告（リモート開催・紙面提案）
9月29日	授業案検討・実践報告
1月12日	授業案検討・実践報告・県教研還流報告
2月 2日	統一授業研（感染拡大のため授業提案中止）1年間の総括（リモート開催）
2月16日	研究のまとめ（リモート開催）

IV 成果と課題

1 成果

- ・SDGsなどの新しい社会的な課題や人権について幅広い実践が報告され、実践に広がりが見られた。それぞれの実践から学ぶことが多く、追実践したい実践であり、とても参考になった。
- ・同じテーマの実践でも切り口や実践する教科が違うことで視点や内容が広がり有意義であった。
- ・異校種で研究が進められたことで、より研究が深まった。
- ・コロナ禍で研究会の運営が難しい中、臨機応変に円滑に研究が進められた。

2 課題

- ・教育課程の中で指導内容が多く、なかなか平和や人権について学習する機会を入れていくことが難しくなっている。関連する内容にピンポイントで取り入れていくということも必要になってくるので、年間の指導を見通しながら各々が進めていかなければならない。絵本の活用も含め、年間を見通して計画することもよいのではないか。
- ・今年度も、コロナ対策を十分に行いながらの開催であったので、例年通りいかなかった。これからは、オンラインを前提とした開催方法や取り組みについても考えて言ってよいのではないか。
- ・実践したことについて、部会内での広がりを感じられたが、ほかの部会の先生方へ情報提供が難しく、何らかの方法で伝えられると良い。
- ・コロナの影響で研究授業の開催が難しいが、参観できるようになったら、ぜひ実施したい。
- ・研究の方向性をより絞るかどうか、4月に改めて確認したい。

V 成果物

1 指導案

第4学年「持続可能な未来をめざして」～世界がもし100人の村だったら～

岩下 城（山梨小学校）

◇ねらい：世界の現状について、ワークショップの活動を通して実感することを通して、今自分にできることは何か、これからどのように生きるかという自分なりの考えをもつ。

◇資料：「ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら（第6版）」開発教育協会

2 実践報告資料

第6学年「女らしさ男らしさについて考える「女だから？男だから？」

関口 哲也（日下部小学校）

第1学年「低学年から取り組む平和・人権教育」

保坂 千恵子（八幡小学校）

第2学年「当たり前ってなんだろう～SDG‘Sを知ろう」

佐野 理恵（日下部小学校）

第4学年「インターネットの使い方 ～ネットいじめの事例を通して～」

高野 浩介（山梨小学校）

第1学年「SDG‘Sってなあに」

飯室 林（日下部小学校）

第2学年「江戸時代の身分制度」

永関 幸玄（山梨北中学校）

第1学年「わたしたちがつくる持続可能な世界」

広瀬 竜太（勝沼中学校）

3 関連資料

① ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら（第6版）（開発教育協会）

② アイデアシート（ベネッセ）

https://www.benesse.co.jp/brand/about/about_sustainability/pdf/

③ 動画 Benesse 動画で伝わる、子どもが分かる！「SDG’ Sってなんだろう」

https://www.benesse.co.jp/brand/about/about_sustainability/movie/

④ 動画 worlds language lesson 世界に広めよう 持続可能な開発目標／日本ユニセフ協会

<https://www.unicef.or.jp/sdgs/movie.html>



②



③



④

（部長 佐野 理恵）

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方

～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I 研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが、人間はこれまで自然を破壊し、あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え、再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果、地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。また、福島第一原発による放射能汚染は、終わりの見えない最大の環境問題である。

これら問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人一人が、問題解決のために何をしなくてはならないかを考え、実行していくことが必要とされている。

本部会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境に対する豊かな感受性を育んでいきたい。

II 研究内容

1 授業研究

第1学年生活科 「きせつとあそぼうーはるからなつー」

授業者 梶原 美奈子 教諭（塩山南小）

- ・生活科において、春から夏にかけて身近な自然にふれながら、身体全体を使って遊んだり、自然を使って工夫して遊んだり、また活動を通して自然の不思議さ、季節の変化に気付き、遊びや生活を楽しもうとする学習。

2 一人一実践

- ・部会員一人一人が日々実践していることなどを報告し、意見交換をする。

3 学習会

- ・中村校長先生を講師に環境教育学習会を行い、環境教育のより深い理解と知識を養う。

Ⅲ 成果と課題

1 授業研究

9月の統一授業研（塩山南小学校・梶原美奈子教諭）の生活科の実践は、コロナウイルス感染症対策のため、予定していた臨地研修や授業案検討、授業参観もできず、授業者の梶原先生お一人に負担をお掛けしてしまった。しかし制限の多い中ではあったが春と夏に近くの於曽公園に出掛け、子どもたちが自然に親しみながら生き生きと活動している様子が感じられた。ICT端末（一人一台端末）を持参し、子どもたちが「お気に入りのもの」の写真を撮ってスライドに残し、季節による違いに気付いたり、友だちと共有し合ったり、クイズ形式で発表し合ったり、とICTの有効な活用の仕方も学ぶことができた。

授業参観ができず残念であったが、Zoom会議を通し、子どもたちが生き生きと活動している様子や教室環境・学習のふり返りの掲示物、資料等を映像で拝見することができ、有意義であった。実践は県教研、全国教研でも高く評価された。

2 一人一実践

本年度は、生活科や総合的な学習、自立活動の実践が報告された。コロナ禍で制限の多い中であつたが、身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成を目指したことは意義が大きかった。学年の発達段階や各校独自の自然環境、着目する環境教育の視点が様々であり、それに加えて個々の先生方のオリジナリティあふれる実践が重なり、大変豊かな研究になっていた。実践してみたくなるような内容が多かった。家庭・学校・地域での実践を通し、生き生きと主体的にかかわる子どもたちの様子もうかがえた。主体的に自然にかかわっていくための手立てや方法なども部員同士で共有し、活用することができた。またお互いの実践内容が刺激になり、実践のつながりや広がりも見られた。

コロナ禍の中、自然とのかかわりが大切になってきているが、環境教育へのより深い理解や知識を学ぶ場として、今後も研究を進めていきたい。

3 学習会

昨年度に引き続き、本部会の指導・助言者の日川小・中村雅彦校長先生を講師として、校長先生ご自身が行ってこられた実践をいろいろご紹介いただいた。校内の掲示物の工夫や簡単なビオトープづくり、生きものマップ、河川の絵画と環境教育とを合わせた実践、ペットボトルでメダカを飼う実践、地球カレンダー、地球温暖化対策等々、すぐにでも取り組みそうで興味深い実践をたくさん教えていただいた。子どもたちと共に是非実践してみたい。

中村校長先生には、様々な経験と知識に裏付けられた的確かつ温かなご指導をいただいた。多くのことを学ばせていただき、貴重な学習会となった。

（部長 岡村 理恵）

情報活用能力の育成

I 研究の内容

社会の情報化は急速に進展しており、今後も、社会の情報化はさらに進展し続けると考えられる。このような状況のもと、子供達が「情報活用能力」を身に付け、情報社会に対応できる力を得ていく必要性は、今後ますます高まってくると考えられる。

学習指導においては、情報コミュニケーション技術（ICT：Information and Communication Technology）を効果的に活用することにより、子供達の学びに向かう力や思考力・判断力・表現力を高め、「わかる授業」を実現することが求められている。また、情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられ、学校の ICT 環境整備と ICT を活用した学習活動の充実に配慮することとされている。

そこで本部会では、児童の情報活用能力を高めるための研究及び ICT 端末の活用に関する教師の指導力の向上を図るための研究、また、プログラミング教育やプログラミング的思考、情報モラル教育等についての研究も含め、これまでの研究の成果と課題をふまえながら研究を進め、深めていきたい。

効果的な ICT の活用例

- ・ ICT 端末の録画機能を活用して、スピーチの様子などを撮影し、その様子を見直し改善をすることができる。
- ・ 写真や動画機能を用いて記録することで効果的に情報収集を行うことができ、見えにくい情報を可視化できる。
- ・ 表計算ソフトを活用するとすぐに表やグラフ（棒グラフや帯グラフなど）を作ることができる。
- ・ 観察、実験を動画等で記録することで、現象を科学的に分析できる。
- ・ ゲームの様子を撮影した動画を見返し、次のゲームに向けての作戦を考えることができる。
- ・ 自分の考えを ICT 端末に入力し、共有して他者の考えを知りながら、それぞれの考えの根拠に基づき議論することで、多面的・多角的に考えることができる。
- ・ 対象の拡大提示や記録した情報の伝えあいから興味関心や意欲を高めることができる。

2 研究の具体的内容

(1) 授業研究（2月15日）

小学校 第6学年 社会科「日本とつながりの深い国々」

(2) ICT機器を活用した指導の工夫

本実践では、小単元の学習の発展として、上海日本人学校の児童と web 会議システム（Zoom）を使い、興味をもったカテゴリーで交流する。「教

育の情報化に関する手引き」(文部科学省)の情報活用能力の育成に係る「3観点8要素」の中の情報活用の実践力「課題や目的に応じた情報手段の適切な活用」「受け手の状況などをふまえた発信・伝達」に力を入れて指導を行った。

(3) 検証方法

ア ノート、児童の振り返り、感想

イ 教師の見取り(児童の活動や話し合いの様子、視点、発言)

ウ 成果物の検証・分析

○日本の文化や生活について紹介する児童が作成したスライド

○児童がオンラインで会議をしている様子の録画動画の分析

II 成果と課題

1 成果

- ・ICT端末の活用について、各校での実践や取組を紹介することにより、様々な情報を得たり活用方法を見出したりすることができた。自校での実態に応じて活用を考えることにつながった。
- ・コロナ禍ではあったが、リモートの研究会、各自の研究成果の交流など精力的に研究が行われ、学びあったことを各校の児童に還元できたと思うので、大きな成果があった。GoogleClassroomで部会のクラスを作ったり、共有ドライブを作ったりし、効果的に活用できたことも大きな成果だった。
- ・研究授業では、接続のトラブルがあったが、海外の学校とインターネットを介して、たくさんの児童が一対一で交流できたことは大きな一歩となった。教科書に載っていない、現地のことを知ることができて真に「国際交流」ができた。

2 課題

- ・ICT端末を活用したことで、自分の考えを文や画像などで、友達に共有することは以前に比べできていると考える。ICT端末上で文章に書いた考えを、より詳しく自分の言葉で説明したり、友達の考えに対して質問や感想を言ったりと、コミュニケーション能力の育成が今後の課題である。
- ・甲州市と山梨市でのICT端末の活用の仕方の差が大きい。また、アカウントがそろわないため、データを共有する方法など工夫が必要である。

III 研究の成果物

- ・第6学年 社会科 学習指導案「日本とつながりの深い国々」
- ・ICT端末の教科における効果的な活用方法の実践例

(部長 中根 淳)

一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導・キャリア教育はどうあるべきか
～小・中における授業実践を通して～

I 研究の方法

- ・各教科の授業をキャリア教育の視点で実践し、資料を持ち寄り、情報交換および相互的に学習する。
- ・地域との連携、また職場体験について各校独自の実践を学び合う。
- ・キャリア教育について小中連携をしながら研究する。

II 研究の具体的内容

1 授業実践

大和中学校 第3学年 国語科 (小林 史奈 教諭)

単元名「自己PRを考えよう ～他者の表現を評価し、自己の表現に生かす力～」

- 目標
- ・自己分析と他己分析を通して、自己の強みや良さを理解する。
 - ・自分の考えが相手にわかりやすく伝わるように表現の工夫をする。

2 実践・資料発表

奥野田小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
後屋敷小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
松里小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
笛川中	進路指導の取組についての実践紹介
山梨南中	進学指導の取組についての実践紹介
山梨北中	職業体験学習・キャリア教育についての実践紹介
塩山北中	音楽科におけるキャリア教育の実践例について
松里中	社会科におけるキャリア教育の実践例について
大和中	国語科におけるキャリア教育の実践例について
塩山中	キャリアパスポート、職業体験学習を通じた実践紹介
勝沼中	英語科におけるキャリア教育の実践例について

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・「一人ひとりにあった生きる力をつけるためのキャリア教育」という視点で、各校の持ち寄った実践をもとに研究を深めることができた。特に、小学校と中学校の先生方が所属していることで、小中互いの取組を知ることができ、実践を通じて小学校段階と中学校段階とで培いたいキャリア発達について考えていくことができた。
- ・職場体験の大切さや、経験することの大切さを中学校の実践から学ぶことができた。それが直接自分の将来の職業につながらなくても「働く」ということの意味を深める大切な取組であることを確認することができた。
- ・「キャリアパスポート」について、各校の取組について情報交換し、共有することができた。
- ・授業研究では、国語科の授業をキャリア教育の視点で実践し、情報交換をする中で相互的に学習をすることができた。
- ・キャリア教育はすべての教育活動に深くかかわっている。教科や道徳・学活などにキャリア教育の視点を取り入れていくことが重要であることを認識することができた。

2 課題

- ・昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の流行により、近隣の高等学校教諭の招聘ができなかった。来年度以降、必要に応じて学習会として、高校入試や高校生活、その後の進路指導、さらにはキャリアパスポートをどのように活用しているかなどについて学べる機会をもてるとよい。
- ・キャリア教育の視点を取り入れた教科等の授業とともに、団体や企業等の出張授業などを有効に活用した実践についても大切にしたい。
- ・ICTも普及し、環境が整いつつあることで、今後参集での会ではなくても、リモート研修会での開催も模索していく必要がある。

Ⅳ 成果物

- ・中学校3年生国語科レポート
- ・各校実践レポート

(部長 水上 陽介)

地域とともにある学校づくりをめざして

I 研究の内容

1 研究の方法

(1) 研究の柱

- ・学校と保護者，地域との関わり方・提携の方策について
- ・学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践
- ・研究成果の共有（情報発信も視野に入れる。）

(2) 部員は各校の実践を通して，子どもたちの変容，問題点，悩みなどを提案しそれについて討議し研究を深める。

常任講師の先生方に，常時ご指導・ご助言をいただく。

(3) 保護者・地域との提携について，授業実践を通し研究を深める。

2 実践発表と授業実践の紹介

[実践発表…各校での保護者・地域住民と提携した教育活動や行事の実践]

(1) 日下部小学校

- ・家庭との連携を意識した取り組み（学校行事・家庭学習）
- ・家庭との連携した学習 6年家庭科：クリーン大作戦
2年生活科：町たんけん

(2) 東雲小学校

- ・6年総合的な学習：菊づくりは人づくり
- ・3年総合的な学習：ぶどうづくり探検隊
- ・地域に根ざした活動の実際

(3) 菱山小学校

- ・5・6年総合的な学習：菱山の地域について調べよう

(4) 山梨小学校

- ・地域住民との連携 3年社会科：地域の農業について
- ・保護者との連携 図書ボランティア
1年生活科：昔遊び

(5) 塩山南小学校

- ・甲州市ことばと発達のサポートルームでの取り組み

(6) 塩山北小学校

- ・地域との連携（地域学習）
- ・家庭との連携（教科学習・PTA実践テーマの取り組み）
- ・児童の登下校の見守り（北辰スクールガード隊）

(7) 井尻小学校

- ・保護者地域住民と関わる主な行事，外部との関わりのある行事

- ・ 4年総合的な学習：地域素材を扱った学習について
- (8) 松里小学校
- ・ 地域との連携「学習のフィールドとしての松里地区」

〔授業研究〕

(1) 小6 道徳 (大和小学校 廣瀬 尚子先生)

主題名：国や郷土を愛す【伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度】

教材名：「祖国にオリンピックを」

ねらい：我が国や郷土の発展に尽くした先人の思いや努力を，自分との関わりで理解することを通し，国や郷土の発展に貢献していこうとする心情を育てる。

授業の概要：教材を通して，献身的に祖国のために尽力する人物について学ぶ。合併した中学校へ進学する児童たちに，どのような思いを持ち続けることが地域の存続・発展や伝統の継承につながるのか，ゲストティチャーや児童同士の交流によって多面的・多角的に考えさせていく。

II 成果と課題

1 成果として

- 各学校の実践発表を行い，情報交換ができた。各校の特色を生かした実践が，自校の教育活動の参考となった。地域や保護者を巻き込んだ活動の良さをこれからも大切にしていきたい。
- コロナ禍で学校行事や教育課程の見直しがあり，継続する価値のあるものや改善する必要があるものが見えてきた。

2 課題として

- 新型コロナウイルス感染拡大に伴い，今後想定される様々な危機的状況を視野に入れながら，学校と保護者・地域は何ができるのか，どのように連携できるのか，多面的・多角的な視点を持って研究を進めていきたい。
- 持続可能な学校や働き方改革といった視点を持って研究を進めていきたい。
- コミュニティースクールの取り組み，各機関との連携について情報共有していきたい。

III 成果物

- 各校の実践レポート
- 小6道徳科学習指導案

(部長 倉田 和美)

「豊かな教育を子どもたちに」

I 研究内容

1 研究内容の具体的内容与方法

(1) 甲州支会と山梨支会に分かれ、それぞれの課題について研究をすすめた。

ア 甲州支会…「豊かな教育を子どもたちに～私たちができる働き方改革とSDGs～」

○予算分析・教育環境実態調査

○働き方改革へのとりくみ

○SDGsへのとりくみ

○学校統合についての学習会

イ 山梨支会…「豊かな教育を子どもたちに」

○ICT, その活用と環境整備

○子どもの就学・修学保障と保護者負担の軽減, 予算要求教育条件整備のとりくみ

○学校の働き方改革

○学校運営と学校事務

○教職員の労働条件等の確立のとりくみ

(2) 『東山梨教育研究60号』内の「教育行財政及び教育環境の実態」を担当し、調査を実施。

調査前には留意事項を全体で確認し継続調査を実施した。教育環境の実態把握と改善点を探り、調査の活用を考える。

II 成果と課題

1 成果

(1) 甲州支会

年度当初にグランドデザインを作成して3年間の研究計画をすべての部会員で確認することができた。今年度から市文書管理要綱が施行され文書処理に関わる事務処理が大きく変更になったことや学校での世代交代により文書に関わる管理職や教務主任が毎年度変わることによる事務の停滞, 業務の効率化・正確性の解決策として文書收受簿や校務支援システム内の統一した文書フォルダ構成, 文書マニュアルを作成することができた。また, 様々な面で管理職による具体的な指導をいただくことができ, 経験年数に関係なく全体で学びを深めることもできた。

(2) 山梨支会

春季教研で決定した5つの研究の柱に沿って研究をおこなった。「働き方改革」について各校のとりくみを共有し合い, 相互学習をおこなった。私費負担削減・教育予算要求のとりくみとして, 前年度決算・当初予算推移の結果分析をおこない, 効果的な予算執行について検討を重ねた。私費の調査・分析としては, 各校の私費負担の現状と課題を出し合い, 私費の取扱について学びを深めることができた。

(3) 全体として

分散会形式で支会ごと研究をおこない, 各市における課題を明確にし, それぞれ継続している研究を更に深めることができた。甲州市は, 市文書管理要綱が施行されたことによる事務処理についてや学校で働くすべての職員への働き方改革, みんなが生き活か

される社会を作るための SDGs, 学校統合などの研究をすすめてきた。それぞれの学校での実践や課題を意見交換しながら研究をすすめることができた。山梨市は、学校における働き方改革も意識しながら、労働条件に関する研究や私費会計の取り扱いに関する学習にとりくんだ。あわせて、予算に関わる継続的な研究をとおり、採用年数や年齢に関わらず、全部員の共通理解のもと、学校事務職員の専門性を高めあうことができた。

2 課題

(1) 甲州支会

今年度は回数が限られている上に年度当初に予定していた「働き方改革」や「SDGs」等学習会やグループ討議をおこなうことができなかった。また、継続して研究をすすめている「予算分析表・差引簿」を利用した研究も書面での検討となってしまったため、新採用者や経験の浅い事務職員、今年度より甲州市勤務となった職員のサポート、予算分析や共通予算差引簿の活用を通して、先を見越した財務管理の定着化を図ることができなかった。

(2) 山梨支会

前年度決算・当初予算推移の結果分析は継続してとりくみ、効果的な予算執行へ繋げていきたい。また、市当局にも教育条件整備の重要性をより認識していただく必要があるので、粘り強くとりくみをすすめたい。今年度の反省を踏まえて、実態に応じた課題解決に向けてもとりくみをすすめていきたい。

(3) 全体として

継続して予算分析をする中で、両市とも厳しい財政が続いているのが明らかである。調査等を活用し、予算要求や私費負担軽減へ繋げていきたい。甲州市は、経験の浅い事務職員が多い中で、共通予算分析表・差引簿の活用を通して財務管理能力の向上を図り、共同学校事務室との連携を推進できた。山梨市は、継続研究している前年度決算・当初予算の分析や、相互学習会を通して、事務職員や市内小中学校全体に関わる共通理解・課題の共有化に繋げることができた。各市が抱える課題に対して研究を支会ごとにすすめているが、学校事務職員として学校運営に関わっていかなければならないことに変わりはなく、両支会の研究発表や情報交換を通じて共通理解を持ち、教育条件の整備をめざしていきたい。

III 成果物

1 甲州支会

- 文書マニュアル
- 文書收受簿
- 文書発送簿
- 市内統一文書フォルダ

2 山梨支会

- 学校配当予算分析表, 学校配当予算一覧表, 学校配当予算・決算一覧表
- 「働き方改革」について
- 「私費調査」からの課題について

(部長 雨宮 美沙)

豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

I 研究の内容

1 研究の方向性

新学習指導要領が全面実施され、子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは、「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」を改めて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねることによって、これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々、目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本部会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。部会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが、時間数が削減された総合的な学習の時間においては、各教科で学んだ知識や能力を生かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本部会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらず、他の教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては、多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、「教科書“で”教える。」という意識を大切にしながら、自主創造的な学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

- (1) 授業（単元）における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。
- (2) 授業（単元）において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作り直した点はどこか。」を明らかにする。
- (3) 授業（単元）のふり返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、子どものノート・作品・感想記述などを、時間をかけて多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり、成果と課題を明らかにしたい。本部会としては、すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と、すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもたちの学力の向上にもつながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

2 研究授業と各教科などにおける個人実践発表

○社会科 公民的分野「私たちの暮らしと民主政治」	山梨北中：	前島 香織	教諭
○道徳「豊かな人間関係をつくる」	加納岩小：	深澤 一葉	教諭
○理科「生物の種類と多様性の進化」			
道徳「国際理解、国際貢献」	山梨北中：	坂本 伸也	教諭
○漢字の指導方法の工夫	日川小：	深味 朝日	教諭
○総合的な学習の時間「SDGs 環境について考えよう！」	祝小：	小宮山公仁	教諭
○ライフスキル	山梨北中：	大芝 笑美	教諭
○数学科「第5章 三角形と四角形 2節 平行四辺形」	塩山中：	前田 大輔	教諭

※ 指導助言

奥野田小： 古屋 宏記 校長
塩山南小： 山縣 重人 教頭

II 成果と課題

1 成果

- 小中学校の先生方が所属している部会なので、先生方が小中それぞれの実践を持ち寄り、交流することができたので、良い学びの機会となった。
- 教科の授業においても、部会の3つの視点「子どもにつけさせたい力」「授業者が自主編成した部分や工夫したところ」「振り返りや分析を丁寧に行う」をもとに授業実践を発表したり、意見を交流できたりしたことは勉強になった。
- 授業自体を工夫すること、主体的に学ぶために考える授業を展開することの大切さを考える部会研究となった。
- 自分のクラスや学年の現状、現在位置をはっきりとつかんでおくことや、日常における児童生徒との関係づくりの重要性を学んだ。
- 授業研究では、ICTを活用した中学校数学の授業を視聴した。新型コロナウイルス感染症の影響で録画したものをYou tubeにて視聴したが、指導者が生徒の実態に合わせてスモールステップで授業を展開していること。生徒のつぶやきやワークシートの様子を観察して授業を進めていることが分かり、大変勉強になった。また、Power Pointは図形の指導に有効であると感じた。

2 課題

- ・GIGAスクール構想に関してタブレット端末を利用した授業の工夫。
- ・それぞれの教材研究や実践内容を、子ども達に本当につけさせたい力とは何か、どうやって結び付けていくのか。
- ・統一授業研が録画となり、分散でしか行えなかったことがとても残念である。教師の様子だけでなく、話し合っている生徒の様子、全体の前では出ない小さな発言を先生方と共有できると良かったと思う。早くコロナが収まり、授業をみんなで見合うことができることを願っている。

(部長 小宮山 公仁)

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

I 主題設定の理由

本部会ではこれまで、子どもたちに『生きる力』をはぐくむため、子どもの学ぶ意欲や学びの過程、学びあう人間関係づくりを大切にし、社会に出て生きる力につながる『ゆたかな学び』を保障していくことに焦点を当て教育研究活動を進めてきた。子ども一人ひとりの『ゆたかな学び』を保障するためには、各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施や、それに伴う指導法の工夫、指導の振り返り改善、適切な評価と支援など、様々な重要な要素が考えられるが、本年度も日常行っている評価を見直し、児童の学び・変容を丁寧に見取り、具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め、確かな学力の定着をいっそう図りながら『ゆたかな学び』を保障していきたいという考えにたち研究を進めてきている。

II 研究の内容

1 研究の方向性

令和3年度も、引き続きコロナ禍で直接的な対話に制限がある中において、書くことを通しての交流や学び、視覚化しての学びなど、学びのスタイルも工夫しなければならない現状であったが、評価については多教科に関わった OPP やノートの利活用など負担にならず継続して取り組める評価方法を検証し確認することができた。

2 研究授業

- ◇ 本年度も、部会員の先生方の授業実践の報告・検討を中心にして研修を深めた。
- ◇ 令和4年2月2日（水）に実践していただいた高野 恵美子先生（日川小）の生活科「こんなにおおきくなったよ」の授業を次年度の県教研レポートとすることを部会で確認している。

III 成果と課題

1 成果

- ・「生きる力」をはぐくむ評価のあり方を研究テーマにし、これまで1枚ポートフォリオ評価やワークシートによる学習とその評価、ノートを活用した学びとその評価に加え子ども同士による評価等もあり、児童の実態に応じた工夫された評価の実践が見られとてもよかった。また、ほめることや認めることを基本にした教師の対応や言葉がけについても有効だった。
- ・これまで積み重ねてきた研究の成果を確認するとともに、部員が日頃の授業にその成果を生かし、実践することができた。
- ・学習者の評価である1枚ポートフォリオを活用することで授業者の評価も行うことができ

ることを確認できた。

- ・児童の意欲や自己肯定感を高めるような評価のあり方を学ぶことができた。
- ・授業の様子をビデオで振り返ることでさらに細かく見ることができ学ぶところも多かった。コロナ対策にもなった。
- ・実践の交流で先生方の工夫や技術や理論を学ぶことができた。
- ・お互いの実践を持ち寄ることで、いろいろなポートフォリオについて学べたり、評価言について自分の実践を振り返ったりすることができた。
- ・コロナ禍の中であったが、それぞれの実践の中に工夫が見られ、実践の参考になった。(ポートフォリオ、教師の声かけ、支援の仕方など)
- ・新学指導要領の本格実施に伴う児童のよい点や進歩の状況を見取り、過程を重視した評価のあり方をポートフォリオ、評価言を中心に継続的な研究がなされ、確かな学力、豊かな人間性を向上させる実践がなされている。
- ・様々な実践を持ち寄り、その子にあった声のかけ方や評価方法を学ぶことができた。
- ・児童の成長を効果的に見取るための評価について研究を進めることができた。

2 課題

- ・今年も部会長が研究会の運営を様々なことに配慮していただきながらまわしてくださり、充実した楽しい会になったことに感謝したい。来年度、教育評価の研究を継続していくにあたり、今年度実施した評価に加え1人1台端末を活用した評価もできるのかできないのか考えていくのもよいのではないかと思う。
- ・「評価」という枠組みの中で引き続きいろいろな形態を研究・実践していけたらよい。
- ・自分の実践報告でもお話したかもしれませんが、「評価したことを子どもたちのために、授業改善のために生かしていくには、どのようにしたらよいのか」ということを、具体的な実践として積み重ねていくことが私自身の課題だと思っている。
- ・ポートフォリオを活用した実践もだいぶ蓄積されてきた。今年度のように過去の実践から学ぶ機会を作ることはとても有意義だと思った。
- ・新しい視点で「いつでも、だれでも」適格な評価を負担なくできる方法をさらに模索していく必要がある。 ・ ICTの活用 (ICTを使用しての授業実践や評価方法など)
- ・困り感がある児童、特別支援学級の児童への評価言
- ・通常のノートの利活用による「学び」についての研究を行えるとよい。

3 今年度も研究で確認できた評価の実績

- ・端末による評価のあり方など新しい視点での実践交流や適切な評価についての授業改善の方向性を学ぶことができた。

(部長 小林 光三)

教育協議会研究

【ブロック交流研究会研究】

山梨南ブロック	・・・・・・・・	121
山梨北ブロック	・・・・・・・・	122
笛川ブロック	・・・・・・・・	123
塩山ブロック	・・・・・・・・	124
塩山北ブロック	・・・・・・・・	125
松里ブロック	・・・・・・・・	126
勝沼ブロック	・・・・・・・・	127
大和ブロック	・・・・・・・・	128

【特別部会研究】

児童会・生徒会活動の活性化にむけた研究会	・・・	129
----------------------	-----	-----

ICT の活用と小中連携

I 主題設定の理由

同じ地域に学ぶ子どもの教育に携わるという立場で、共通課題を確認し、講演会・授業参観を通して系統的によりよい指導が行えるよう、本主題を設定した。特に、GIGA スクール構想による ICT 端末の導入を受けて、ICT の活用に重点を置いた。

II 研究の内容

1 第 1 回交流研究会（講演会 於：加納岩小学校）

(1) 日時 令和 3 年 5 月 1 9 日（水）1 5 : 3 0 ~

(2) 目的 教員が ICT 端末の操作や指導ができるようになること。

(3) 内容 講演会

演題 「ICT の活用と小中連携～道具としてのスキルや学びとしてのスキル～」

講師 山梨県立大学国際政策学部 教授 八代一浩先生

2 第 2 回交流研究会（山梨南中学校授業参観及び情報交換会）

(1) 日時 令和 3 年 1 1 月 1 0 日（水）1 4 : 0 0 ~

(2) 目的 小学校の教職員が、中学校の授業を参観し、小中の連携の視点から意見を交換し合い、今後の教育活動に生かしていく。

(3) 内容 ア 授業参観 全学級

イ 情報交換会

II 成果と課題

1 成果

- ・ ICT 端末を使用したはじめての学習会では、機器の使用に戸惑う部分があったが、使用してみたことが第一歩であり、授業の様子もイメージすることができた。また、今後の研修や準備などの必要性が明らかとなった。
- ・ 第 2 回目の交流研究会では、山梨南中学校全体の生徒の様子を参観することができ小学校の教職員にとっては貴重な機会となった。情報交換会では、喫緊の課題である ICT の活用状況についても交流し、有意義な小中連携の場となった。

2 課題

- ・ ICT の活用に関わって、子どもたちが中学校で同じスタートを切ることができるように、小学校各学年で身に付けるべき内容と取組を示した指標の作成が必要である。中学校における指標の作成と小中の連携のための共有も必須である。
- ・ 教職員の技量の向上のためにも、研修は今後も継続していきたい。

（ブロック長 鶴田 望）

山梨北中ブロック交流研究

研究主題 「小中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす」

I 主題設定の理由

山梨北中ブロックの児童・生徒を健全に育てるためには、普段交流の機会の少ない小・中の教職員が共有の活動や話し合いを持ち、教育上の課題を見つけ、より良い解決の方法を探り、連携を深めることが必要だと考える。

本ブロックでは、これまでも同じ地域で学ぶ子どもたちを共に教育するという立場から、共通の教育課題に対して講師を招き、学び合いを行ってきた。その取組を通して、目の前の児童・生徒の指導に生かせる有意義な内容であったと成果を確認し合うことができた。また、小・中の授業参観や研究会についても継続して行ってきたが、児童・生徒の実態の理解が深まると共に、発達段階による特性や各校の特色、学力向上の取組などを交流し合うことができ、その意義を実感できたところである。

今年度も、学習会と授業参観・研究会という交流研究により、本ブロックの児童・生徒理解と小・中連携を深め、各校の指導に活かしていきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1. 第1回交

(1)日時 令和3年5月19日(水) 15:30～

(2)演題 「ICT活用に関する学習会」

(3)講師 山梨県総合教育センター 情報教育部 主幹・指導主事 中島 浩三 先生

2. 第2回交流研究会

(後屋敷小・八幡小授業参観の予定であったが、コロナ感染症防止のため内容を変更して実施)

(1)目的 情報交換を通して、小中の連携を強化し今後の教育活動に生かしていく。

(2)日時 令和3年11月10日(水) 15:30～

(3)場所 後屋敷小学校、八幡小学校、岩手小学校

(4)内容 低学年、中学年、高学年ブロックに分散し、各校での一人一台端末の活用状況や実践例や家庭学習の様子、児童・生徒の様子について情報交換を行う。

III 成果と課題

1. 成果

- ・ICT機器の活用を中心に進めたことは、多くの教師が感心をもっている内容であったため、よかった。
- ・ICT端末の活用状況を中学校の先生方にも知っていただく機会となってよかった。
- ・児童・生徒の様子や家庭学習の様子を情報交換できてよかった。特に、高学年ブロックでは、中学校入学までに身に付けてほしいことが聞けたことが大変参考になった。

2. 課題

- ・今年度はコロナ禍対応で運営方法が変更になったが、例年通り学習会・授業参観・情報交換でいいと思う。しかし、当面はコロナ対策のため、参加体制を考えておく必要もある。
- ・ICT機器の活用状況に差が出てくる状況にもなりうるので、中学校までにはここまでという基準を全体で確認できるとよい。情報交換の後、ブロック内の取り組みの方向性をできる限りそろえていくことは出来れば、より意義の深いものになると思う。

(ブロック長 山宮 彩子)

笛川ブロック交流研究会

研究主題

ICT を活用した主体的で対話的な学びの工夫についての小中連携

I 主題設定の理由

同じ地区で学ぶ児童・生徒をともに教育していくという立場から、小学校・中学校の共通課題や今日的な課題に迫る学習会や授業参観、交流会を計画し、実施していく。また、研究会を通して教師間の連携を深め、地域の児童・生徒をより理解しながら効果的な教育活動を目指したい。

II 研究の内容

1 第1回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和3年6月23日(水) 15:30～

(2) 場所 笛川中学校 図書室

(3) 内容

・学習会「GIGA スクール構想と ICT の活用」

講師(総合教育センター 外川主幹・指導主事)

(ICT教育の目的とモデル例 各教科の活用例 教育のICT化の課題)

・情報交換「コミュニティスクールとしての地域活用について」

2 第2回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和3年11月10日(水) 15:30～

(2) 場所 笛川小学校 図書室

(3) 内容

・1人1台タブレット活用状況についての情報共有

・児童・生徒の情報共有

III 成果と課題

1 成果

・学習会では、小中でICT活用について共通理解を図ることができた。

・第2回目の研究会では、ICT使用状況について具体的に情報交換をすることができたことにより小中の取り組みの様子がわかり良かった。

・中学校への進学について小学校6年生へアンケートをとり、進学に対しての気持ちを把握することができた。

2 課題

・今年度はできなかったが、小中の授業参観が実施できるようにしていきたい。

・小中の先生方が自由に意見交換できるような雰囲気をつくっていきたい。

(ブロック長 永関 亜美)

「新学習指導要領の完全実施を受け、小中の系統性をつかみ授業に生かす。」

I 主題設定の理由

新学習指導要領が昨年度から小学校、今年度からは中学校でも完全実施となり、指導の系統性の検証が必要である。小中連携は「地域とともにある学校」づくり、小学生の中学校進学に対する不安感を軽減し生徒指導上の諸問題に対応していく目的も担っている。塩山ブロック交流研究会においても小・中学校の教職員が共通理解を深め、同一の課題意識のもと子どもたちの育成にあたる必要がある。そこで地域が抱える教育課題を共有し、教育課程の系統性も確認しつつ、今後の指導に生かしていくよう、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会「GIGA スクール構想 ICTの効果的な活用」

(1) 日時 令和3年5月19日(水) 15:10～16:20

(2) 目的 児童がICTを効果的に活用できるよう、3グループに分かれて学習する。

(3) 内容 ①Win Bird, Forms, Meet②ドキュメント, スライド, Meet③Jamboard, Meet

2 第2回ブロック交流研究会「塩山中学校授業公開及び多田孝志先生・講演会」

(1) 日時 令和3年11月6日(水) 14:05～16:45

(2) 目的 「家庭学習につながる教師のアドバイス」を意識した授業参観、「読解力の向上」についての講演を通し、今後の小中連携・指導に生かしていく。

(3) 内容 ア 塩山中学校の授業の様子を参観する。

イ 「読解力育成に向けて、今すべきこと」をテーマに金沢学院大学教授・多田孝志先生の演習を交えた講演を伺う。

III 成果と課題

1 成果

- ・情報担当の先生方を講師に、児童がICT(一人一台端末)を効果的に活用できるよう、実際に操作しながら学ぶことができ、すぐに実践に生かせる内容であった。
- ・中学の授業を参観し、系統性や卒業生の成長、変容を見取ることができた。学習規律等の「小中連携」のために大きな意義があった。
- ・多田孝志先生を講師に招聘し、今日課題である「読解力の向上」について演習を通して具体的な指導法の一端を知ることができ、大変参考になった。小中の系統性も踏まえ、全ての先生方が今後の指導に生かせる内容であった。

2 課題

- ・第2回ブロック交流会では中学校の授業の後、学習スタンバイの参観や小中での情報交換・連携について話し合う時間がとれなかった。来年度は発達段階に応じたICTの活用等も含め、情報交換が出来たら、と考える。

(ブロック長 岡村 理恵)

「新学習指導要領の完全実施を受け、小中の系統性をつかみ授業に生かす。」

I 主題設定の理由

新学習指導要領が昨年度から小学校、今年度からは中学校でも完全実施となり、指導の系統性の検証が必要である。小中連携は「地域とともにある学校」づくり、小学生の中学校進学に対する不安感を軽減し生徒指導上の諸問題に対応していく目的も担っている。塩山ブロック交流研究会においても小・中学校の教職員が共通理解を深め、同一の課題意識のもと子どもたちの育成にあたる必要がある。そこで地域が抱える教育課題を共有し、教育課程の系統性も確認しつつ、今後の指導に生かしていくよう、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会「GIGA スクール構想 ICTの効果的な活用」

- (1) 日時 令和3年5月19日(水) 15:10～16:20
- (2) 目的 児童がICTを効果的に活用できるよう、3グループに分かれて学習する。
- (3) 内容 ①Win Bird, Forms, Meet②ドキュメント, スライド, Meet③Jamboard, Meet

2 第2回ブロック交流研究会「塩山中学校授業公開及び多田孝志先生・講演会」

- (1) 日時 令和3年11月6日(水) 14:05～16:45
- (2) 目的 「家庭学習につながる教師のアドバイス」を意識した授業参観、「読解力の向上」についての講演を通し、今後の小中連携・指導に生かしていく。
- (3) 内容 ア 塩山中学校の授業の様子を参観する。
イ 「読解力育成に向けて、今すべきこと」をテーマに金沢学院大学教授・多田孝志先生の演習を交えた講演を伺う。

III 成果と課題

1 成果

- ・情報担当の先生方を講師に、児童がICT(一人一台端末)を効果的に活用できるよう、実際に操作しながら学ぶことができ、すぐに実践に生かせる内容であった。
- ・中学の授業を参観し、系統性や卒業生の成長、変容を見取ることができた。学習規律等の「小中連携」のために大きな意義があった。
- ・多田孝志先生を講師に招聘し、今日課題である「読解力の向上」について演習を通して具体的な指導法的一端を知ることができ、大変参考になった。小中の系統性も踏まえ、全ての先生方が今後の指導に生かせる内容であった。

2 課題

- ・第2回ブロック交流会では中学校の授業の後、学習スタンバイの参観や小中での情報交換・連携について話し合う時間がとれなかった。来年度は発達段階に応じたICTの活用等も含め、情報交換が出来たら、と考える。

(ブロック長 岡村 理恵)

塩山北中ブロック交流研究会

「小中の連携をはかり，塩山北中学校区の子どもたちを育てていこう」

I 主題設定の理由

塩山北中ブロックでは，これまで「地域で子どもを育てよう」という考えの実現に向け，教職員同士の連携を図ってきた。多くの児童が同じ中学に入学し，同級生となっていく。このようなことから地域の様子や子どもの実態を知る上で小・中の連携は，不可欠である。児童から生徒への成長や，既習の学習内容・授業規律などを知り，児童・生徒同士，教師同士，児童・生徒と教師の交流を図ることで，一人一人により教育効果の高い教育活動を行うことができる。学校・地域・保護者の連携の必要性が求められている中で，中学校区全体で塩山北中ブロックの児童・生徒を育てていこうと考え，本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会（授業参観は新型コロナウイルス感染症対策のため中止）

(1) 日時 令和3年5月19日（水）15：30～16：30

(2) 目的 児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。

(3) 場所 塩山北中学校

(4) 内容

ア 情報交換

（中学生の様子・甲州市「確かな学力」育成Pに関わる各校の取り組み）

2 第2回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和3年11月10日（水）14：00～16：30

(2) 目的 児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。

(3) 場所 大藤小学校

(4) 内容

ア 授業参観（全学年）

イ 情報交換（小学生の様子・地域学習の様子）

III 成果と課題

1 成果

情報交換会では，各校の甲州市「確かな学力」育成プロジェクトに関する取組や地域学習の様子を交流することにより，小小・小中連携を深めることができた。また，各校の児童生徒の様子を共有することで，小規模校の実態が明らかになり，指導に活かすことができた。

2 課題

新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら，ICTを活用した研究方法等を視野に入れて研究を進めていく。また，中学校再編に向けて，小中での指導の在り方や保護者や地域への対応策などについても考えていく。

IV 研究方法の工夫

議論を活発化させるため，テーマやブロックに分け少人数での情報交換を行った。

（ブロック長 青木 恵）

「同じ地域で学ぶ子供たちのために、 小・中・地域の交流と連携を深めよう」

I 主題設定の理由

- 同じ地域に学ぶ子供たちを教育する立場で、地域が抱える教育課題を共有し、その解決に向けた指導に結びつける。
- 地域との連携を強化し、「地域の子供は地域で教育する」という視点で、地域の教育力向上を図る。
- 小学校・中学校の連携を強化し、小・中の系統的な教育のあり方を研究する。

II 研究の内容

1. 第1回 ブロック交流研究会

- 【日時】 令和3年5月19日（水） 15:30～16:40 於：松里中学校 体育館
- 【内容】・3月にそれぞれの小学校を卒業した中学1年生の授業・生活での様子の動画による報告
- ・小中連携のために必要な事についての意見交換
 - ・今年度のブロック交流研究会がめざす方向性についての確認

2. 第2回 ブロック交流研究会

- 【日時】 令和3年11月10日（水） 15:30～16:40 於：井尻小学校 体育館
- 【内容】・3校のICT端末の活用状況についての報告
- ・低学年・中学年・高学年・中学校の4つの部会による「松里中学区の児童・生徒がめざす情報活用能力」の作成

III 成果と課題

〈成果について〉

- ICTの活用というテーマのもと、視点をはっきりさせた研究ができた。また、小中連携のために、「松里中学区の児童・生徒がめざす情報活用能力」について話し合い、共通理解が図れたのは良かった。中学校は小学校の様子を理解した中でのスタートができ、小学校は中学校に向けどこを目標にすればよいか明確となった。
- 直接の授業参観はできなかったが、動画を通してそれぞれの学校の様子を知ることができた。

〈課題について〉

- △感染症対策の為、ブロック研の2回とも授業参観ができなかった。今後はサテライト方式や録画、リモート等の方法も検討していく必要がある。
 - △今年度はICTの活用が中心となったが、各校の課題についても情報共有ができると良い。
- （ブロック長 岩下 和子）

勝沼ブロック交流研究会

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。

I 主題設定の理由

「地域の子どもは、地域で教育する」という基本理念のもと、同地域の子どもの育成に携わる教職員が、甲州市の「確かな学力」育成プロジェクトとの連携のもと、小中の系統的な教育の在り方を研究するために本主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック研究会（会場：菱山小学校）

(1) 日時 5月19日 15:30～16:40

(2) 内容

ア 菱山小学校の授業の様子や学校行事などをVTRで参観

イ 3つの分科会に分かれ、校内研究、学習・生活習慣、ICTの活用等について交流学習会

2 第2回ブロック研究会（会場：各校においてリモート）

(1) 日時 11月19日 15:30～16:40

(2) 内容

ア 勝沼中学校の授業の様子をリモートで参観

イ 3つの分科会に分かれ、主にICTの活用等について情報交換を中心とした交流学習会

III 成果と課題

- ・GIGAスクールについて、各校の実践や具体的な活用方法なども知ることができて参考になった。これからも情報交換を行うことで、どの児童生徒もどの教員も同じように活用していけるとよい。
- ・中学校では、リモートで授業参観を行ったことで、生徒たちの普段の様子を見ることができたとともに、2つの学級の様子を自由に参観できたことはたいへんよかった。
- ・2回目の研究会後の反省や感想の集約を、Google FormやGoogle Documentを活用して行ったことは新しい試みとして画期的だった。
- ・リモートでの授業参観では、カメラが固定ではなく移動しながらの撮影だったので、音声と画質がやや鮮明さに欠ける部分があった。
- ・今後、アウトメディアについての情報交換を行い、各校と歩調を合わせた取り組みを進めていく必要がある。

（ブロック長 金井京子）

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。

I 主題設定の理由

「地域の子どもは、地域で教育する」という基本理念のもと、同地域の子どもの育成に携わる教職員が、甲州市の「確かな学力」育成プロジェクトとの連携のもと、小中の系統的な教育の在り方を研究するために本主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック研究会（会場：菱山小学校）

(1) 日時 5月19日 15:30～16:40

(2) 内容

- ア 菱山小学校の授業の様子や学校行事などをVTRで参観
- イ 3つの分科会に分かれ、校内研究、学習・生活習慣、ICTの活用等について交流学習会

2 第2回ブロック研究会（会場：各校においてリモート）

(1) 日時 11月19日 15:30～16:40

(2) 内容

- ア 勝沼中学校の授業の様子をリモートで参観
- イ 3つの分科会に分かれ、主にICTの活用等について情報交換を中心とした交流学習会

III 成果と課題

- ・GIGAスクールについて、各校の実践や具体的な活用方法なども知ることができて参考になった。これからも情報交換を行うことで、どの児童生徒もどの教員も同じように活用していけるとよい。
- ・中学校では、リモートで授業参観を行ったことで、生徒たちの普段の様子を見ることができたとともに、2つの学級の様子を自由に参観できたことはたいへんよかった。
- ・2回目の研究会後の反省や感想の集約を、Google FormやGoogle Documentを活用して行ったことは新しい試みとして画期的だった。
- ・リモートでの授業参観では、カメラが固定ではなく移動しながらの撮影だったので、音声と画質がやや鮮明さに欠ける部分があった。
- ・今後、アウトメディアについての情報交換を行い、各校と歩調を合わせた取り組みを進めていく必要がある。

(ブロック長 金井京子)

「小中の連携を深め児童生徒の教育課題についてともに考えよう」

I 主題設定の理由

本ブロックでは授業参観等を通して、具体的な児童生徒の様子を話題としながら、学習課題・生活課題について話し合い、小・中学校の連携のあり方について探ってきた。

今年度も小・中学校連携の意義と児童生徒が抱える様々な教育課題について、ともに考えることで児童生徒のよりよい成長を目指すことを目的とし、このテーマを設定した。また、甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携も図りながら、授業参観や地域人材の活用などを行い、系統的な教育のあり方について考えていきたいということでこの主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和3年 5月19日(水) 午後3時30分～

(2) 会場 大和小学校 体育館

(3) 内容

①地域人材による「大和町の歴史について」の学習会

②情報交換会

2 第2回ブロック交流研究会

(1) 日時 令和3年11月10日(水) 午後2時10分～

(2) 会場 大和中学校 各教室

(3) 内容

①大和中学校授業参観(1～3学年)

②情報交換会



III 成果と課題

1 成果

- ・中学校の授業を参観することで、小学校での学習がどのように中学校へつながっていくのかを知る機会となった。
- ・情報交換会では、児童・生徒の様子や学習方法などの情報交換を行うことができた。特に、小中それぞれの自主学習の取組やその実態について詳しく情報交換ができた。

2 課題

- ・令和4年度に大和中と勝沼中が統合され、大和・勝沼と大きなブロックとなる。今まで行ってきた研究を大事にしながら、どのように研究を進めていくのかを検討していく必要がある。
- ・勝沼、大和地区の隣地研究や大和小を卒業した子どもの授業参観ができればよい。

(ブロック長 石田 周子)

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会の活動

I 研究の内容

1 活動目標

ア 助け合い・ボランティア活動・環境問題・平和を守ることなどに対する活動を活発にします。

- ・社会奉仕活動を推進します。
- ・身体の不自由な人への関心を高め、積極的に協力します。
- ・平和と環境を守る活動に関心を高めていきます。

イ 教育祭「子ども・保護者・教職員の会」を成功させます。

ウ 私たちの声を、県や市町村に強く要望していきます。

以上の目標を立て、本年度取り組んでいきたいと思ひます。そして、代表者会、子ども・保護者・教職員の会の開催、古切手やベルマーク集めなど県の児生連活動にも参加協力していきたいと思ひます。

2 経過報告

- | | |
|-----------|--|
| 6月15日(火) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第1回顧問の会(塩山北中学校→紙面提案)) |
| 7月 1日(木) | 第1回県代表委員会(Web開催) |
| 7月 6日(火) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区代表者会(甲州市民文化会館)) |
| 11月 9日(火) | 東山梨地区「子ども・保護者・教職員の会」(塩山北中学校) |
| 11月18日(木) | アフリカ飢餓救援活動(お米・募金)しめ切り |
| 1月21日(金) | 古切手・ベルマーク等の最終しめ切り |
| 2月15日(火) | 第2回県代表委員会(Web開催)
知事(教育長・県議会議長)と語る会 要望書提出(Web開催) |
| 3月 1日(火) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第2回顧問の会(教育会館)) |

II 成果と課題

1 地区児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会〔地区代表者会〕（甲州市民文化会館）

感染症対策を徹底した上で、甲州市民文化会館大会議室にて研究会を行った。2021年度東山梨地区児童生徒連絡協議会としての活動目標や活動計画について話し合い、今年度も「助け合い・ボランティア活動・環境問題・平和を守ること」を中心に活動を進めること、支部「子ども・保護者・教職員の会」を成功させること、私たちの声を県や市に要望していくことを全体で確認した。

学習会では、SDGs ネットワーク山梨代表理事の内田智之様をお招きし、講演をお聞きすることができた。「SDGs への挑戦」と題して、長年にわたる活動の様子をお話ししていただき、児童生徒はもちろん教職員も、自分たちにできることを考える貴重な機会となった。

2 東山梨「子ども・保護者・教職員の会」（塩山北中学校）

分科会では児童会3分科会、生徒会2分科会の5分科会に分かれ、研究討議が行われた。参加した児童生徒自身が、各自に任された係分担をしっかりとこなしながら、学び合う場となった。それぞれの提案校からは、児童会・生徒会活動の実践報告が文書資料やパワーポイントを利用してなされた。各校とも素晴らしい実践発表であった。また、実践発表をもとに各校の取り組みの様子などの意見交換が活発に行われた。全体会は短時間で行い、今後の主な活動である古切手・ベルマーク回収などのボランティア活動についての提案がされた。感染症対策として、児童生徒の参加人数を絞り、保護者の参加もご遠慮いただいたが、参加した子どもたちにとっては学び多き会となった。

3 第2回県代表委員会 知事（教育長・県議会議長）と語る会（Web開催）

感染症拡大防止のため、第2回県代表者会がオンラインで開催された。知事と語る会の内容検討と今年度の児生連活動の反省を、各支部を代表して出席した児童・生徒が話し合った。引き続き、知事と語る会が行われ、東山梨支部の代表として、塩山北中と玉宮小の会長が、支部とそれぞれの学校での取り組みを伝え、知事から励ましの言葉をいただいた。

4 ボランティア活動について

本年度も様々なボランティア活動に各校協力していただき、以下のような成果であった。

- | | |
|--------------------|------------------|
| ・アフリカ救援米 772.95 kg | ・輸送費募金 300,000 円 |
| ・古切手 25.098kg | ・ベルマーク 2,610 kg |

各校の取り組み及びご協力に感謝したい。
(児童生徒連絡協議会担当 武井松里子)

学校経営研究

小学校経営研究会（健康・体力部会）	・・・・・・・・・・ 131
小学校経営研究会（情報教育部会）	・・・・・・・・・・ 133
小学校経営研究会（連携・接続部会）	・・・・・・・・・・ 135
中学校経営研究会（生徒指導部会）	・・・・・・・・・・ 137

人の生命と尊厳を守り、健やかな心身を育む教育

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進

I はじめに

科学技術の発達や情報化の進展等の社会環境の急激な変化及び新型コロナウイルスによる新しい生活様式は、私たちの生活環境にも大きな影響を及ぼし、子供たちの心身両面にわたる健康上の問題を生み出している。体を動かす機会の減少は、体力・運動能力の低下にとどまることなく、肥満や生活習慣病、また人間関係の希薄化やストレスの増大等、子供たちの健全な成長に様々な支障をもたらしている。

こうした課題を乗り越え、生涯にわたって健康で安全な生活を送ることができるよう、必要な情報を自ら収集し、適切な意志決定や行動選択を行うことができる力を子供たち一人一人に育むことが強く求められている。

II 研究の概要

1 研究のねらい

子供たちが生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために、学校教育の果たすべき役割について協議し、学校経営に生かす。

2 研究内容

生涯にわたって心身の健康に重要な役割を果たすスポーツに親しませるため、子供たちにどのようにしてその資質や能力を育てていけばよいのか、コロナ禍における学校教育全体を通じて考えていく。

3 研究計画と研究の方法

(1) 1年次（令和2年度）

研究テーマに迫る研究の方向性について情報交換をしながら、次年度に向けての具体的な計画や取り組み内容について考える。

(2) 2年次（令和3年度）※本年度

1年次の研究を踏まえ、より具体的・実践的に研究課題を深化・拡充する。

(3) 3年次（令和4年度）

2年次の研究の成果や課題を踏まえ、さらに具体的・実践的な取り組みを進めるとともに、校長の役割や関わり方を共有する。

(4) 研究報告

今年度の研究の方向性（本テーマについての柱立てとして）

ア 日常的な活動のあり方

・陸上記録会・水泳の授業・新体力テスト・運動会・持久走大会

イ コロナ禍におけるスポーツのあり方

- ・外部機関との連携（市民プール、B&G など）・地域との連携（地域行事・スポーツ少年団など）・CS等の活用

ウ スポーツライフにむけて

- ・スポーツを楽しみ、親しむ体育的活動・地域スポーツとの連携・中学校の部活動との関連・安心安全なスポーツの紹介

※ 以上のような柱立てに基づいて、各校の教育実践を通して本テーマに関わって研究を推進してきた。その中で、現状の子ども達の心身の育成や、各校の実践している体育の授業や体育的行事の進め方などについて、現状の課題や私たちが取り組まなければならない事柄について意見交換や討議を重ねながら、今年度のサブテーマである「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進」に迫ってきた。今年度の研究の中から話題に上がったいくつかの視点を挙げると・新体力テストや運動会競技など、コロナウイルス感染対策徹底の上しっかりとできている。・水泳教室は、B & Gで行ったが問題なく実施できている。・投げる力の低下を改善するために、県の体力アップ事業「もっと楽しい体育授業で体力アップ」を活用し成果を上げることができた。・体力づくりの取組を行っているが、体力向上だけではなく異年齢集団による活動は様々な面で児童の育成につながり重要である。・スクールバスの利用を考えると、温水プールで暖房施設は整っているの、水泳授業を冬に行うのも一つのアイデアではないか。・スポーツ好きな児童の育成のために、陸上記録会や水泳記録会、体力テストなどの取組の工夫を行うべきである。・地域の老人クラブが行っているゲートボールやグランドゴルフなどを子ども達に紹介して参加させる学校主催で大会を実施するのも効果的である。・オリンピックを招へいし、講演を聞き、実際に実技指導してもらおう中で、スポーツマンシップやあきらめない気持ち、科学的なトレーニング方法などを児童が学ぶことができた。など多くの実践に基づいた討議を重ねることができた。

III まとめと課題

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進」に向けて、学校では児童に体を動かすことの楽しさや運動経験を積み重ねていく取組が大切だと感じている。また、スポーツを「する」「みる」「支える」「知る」という多様なかわり方にふれさせることも大事な視点であるように思う。今後も学校での体育の授業や体育的行事、朝や業間活動の取組等を通じて、運動することへの関心を高め、仲間とともに進んで活動できる力を育てていきたい。

今後は、子ども達の運動やスポーツを保障するためには、安心安全であることを前提としながら、関係者や（保護者・CS・スポーツ少年団・公共運動施設など）と協力していく必要がある。さらに、感染症や熱中症などの対応を行うなかで、子ども達の命の安全や安心して運動できる環境について配慮していく必要がある。今後も研究を推進しながらも、各校の情報交換をしながら教育実践に生かすことが大切である。（文責 部長 金井 毅）

社会の変化に主体的・創造的に対応する教育

～未来社会を見据えながら、情報社会を

主体的に生きる子供を育む情報教育の推進～

I はじめに

近年の情報化の進展や科学技術の発展はめざましく、単に生活の利便性が高まるばかりではなく、Society5.0に向けて社会の在り方自体が大きく変わっていかうとしている。学習指導要領において、小学校でのプログラミング教育の実施が必修化された背景にも、こうした未来社会に向けた流れがあることを考えると、子供たちが身に付けるべき資質としての情報活用能力は、より広義に捉えていく必要がある。そんな中、校長には、「21世紀に求められる資質・能力」として、ICTを効果的に活用しながら、プログラミング的思考などの論理的思考力の育成につながる情報活用能力を子供に身に付けさせ、現在の情報社会からさらにその先の社会への展開を見据えて、主体的創造的に生きる子供を育む情報教育を推進していくことが求められる。

そこで、本研究部会では、「主体的に生きる子供を育む情報教育の推進」を図るための組織的・体系的な情報教育の方策等について、各校の実践発表を通して情報交換を行い、校長の学校経営の立場から研究協議を深めてきた。

II 研究の概要

1 研究のねらい（2年目）

- (1) 研究テーマに沿った各校の実情と実践事例を基に、研究協議を深め、自校の情報教育の推進と児童の情報活用能力の育成に生かせるようにする。
- (2) 情報教育に関する県内外の動向・状況と市内小学校の情報教育における取組に関する共通理解を図る。

2 研究方法

- (1) 各校の実践事例の報告・発表を基にした研究協議を行う。
 - ・各校の実情・実践事例の提示
 - ・成果と課題等における研究協議
- (2) 市教育委員会指導主事を招聘して学習会を開催し、市行政との連携と方向性を確認する。
 - ・情報教育における国・県・市等の動向、GIGAスクール構想のねらいと内容
 - ・諸施策や事業についての情報共有

3 研究の具体的内容

(1) 「ICT 端末の持ち帰りについて」をテーマに、ICT 端末を持ち帰る際の具体的な方法、必要な準備等について市指導主事を講師に学習会を行った。

- ・非常事態における家庭での学習保障のためだけでなく、基本的には毎日持ち帰りOKとする。
- ・甲州市「ICT 端末の持ち帰り活用のルール」を保護者に周知する。
- ・学校での整備状況を確認し、ICT 端末の持ち帰りを実施する。
- ・共有ドライブのあり方、教員と児童生徒のスキルとフォローについて。

(2) 各校の事例報告と主な協議内容

① ICT 端末の活用状況と実践事例の情報交換

- ・授業における ICT 端末の活用例（Google クラスルーム、Google フォーム、Google スライド、ジャムボード、スプレッドシート等）
- ・特別活動における ICT 端末の活用例（Googlemeetによる全校集会、児童総会、他校との打ち合わせ等）
- ・家庭学習における ICT 端末の活用例（動画機能を利用した音読の宿題等）

② プログラミング教育の推進

- ・外部講師による学習会及びクラブや授業での学習支援

③ 情報活用能力育成に向けて

- ・教育課程への情報教育の見直しと位置づけ
- ・コンピュータリテラシーと情報モラルの習得に向けた取組

III まとめと課題

各校から提案された ICT 端末の効果的な活用事例、プログラミング教育を含む情報教育推進に関わっての課題等について共有することができ、自校の状況を振り返る上で参考になった。各校とも校長のリーダーシップのもと情報教育主任を中心に児童の情報活用能力育成に向け、ICT 端末の効果的な活用方法の充実が図られていることが分かった。また、市の小椋指導主事を招聘しての学習会により、ICT 端末を持ち帰る際の具体的な方法、必要な準備等について情報共有することができ、甲州市全体で ICT 端末の持ち帰りをスムーズに行うことができた。

今後の課題としては、GIGA スクール構想による市内全小中学校に配備された ICT 端末の効果的な活用、教員の ICT を活用した指導力の向上、プログラミング教育の系統的な指導計画の立案や実践、スマホやインターネット普及による児童の情報モラルの習得、情報機器の過度にならない適切な使用等、現代的な課題も考えていかなければならない。

ICT 機器を活用しての授業改善は喫緊の課題である。来年度以降も、学校管理職として本研究主題に向け、系統的・組織的に取組を推進していきたい。

(部長 古屋 宏記)

「地域の特性を踏まえ、

教育力を高め合う学校・家庭・地域等との連携の在り方」

～地域の特性を踏まえ、家庭・地域等と連携した“地域とともにある学校”づくりや

異校種間の学びの連続性を重視した教育の推進～

I はじめに

平成29年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正が行われ、同年4月1日より施行された。これに先立ち、甲州市教育委員会はコミュニティ・スクール導入を考え、平成28年度より菱山小学校を、平成29年度より大和小学校をコミュニティ・スクール研究の先進校として指定し、学校・家庭・地域の連携を柱に実践及び研究を重ねてきた。その研究を基盤に、令和元年度より本研究対象校である甲州市勝沼・大和地区小中学校（小学校5校・中学校2校）が、令和2年度より塩山地区小中学校（小学校8校、中学校3校）が学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして出発した。

II 研究の概要

1 研究のねらい

本研究はコミュニティ・スクールとなるための具体的な取組について協議し、教育力を高め合う学校・家庭・地域の連携の核となるコミュニティ・スクールの設置に向けた準備や方法について整理し、今後学校運営協議会の設置に向けた取組を推進する際の一助として提示する。

2 研究内容

- コミュニティ・スクールについて、しっかりとした捉えを共有する。
- コミュニティ・スクール設置に至るまでの取組や様子をまとめる。
- コミュニティ・スクール設置に向けた準備や方法における留意点を話し合う。
- コミュニティ・スクール設置に向けた校長としてのマネジメントの在り方について探る。

3 研究計画

(1) 1年次

- ・ コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）についての整理
- ・ コミュニティ・スクール設置に至るまでの取組
- ・ コミュニティ・スクール設置の様子

(2) 2年次

- ・ コミュニティ・スクール設置から現在に至るまでの様子
- ・ コミュニティ・スクール設置から現在に至るまでの成果と課題
- ・ コミュニティ・スクール設置準備時点での方向性を探る

4 研究実践

【地域の強い想いを活かす】

学校運営協議会の委員については、各校とも7名～11名となっている。その中で、特に地域の方については、強い郷土愛を持っている方もいらっしゃる。とても素晴らしいことでもあるが、学校運営協議会においては、『両刃の剣』となってしまう面もあるとの報告があった。学校教育に非常に協力的なのでありがたいが、その反面、要望も強くなってしまいう面もある。時には、その要望が学校側としてなかなか受け入れ難い側面を持っている内容も含んでいる場合がある。学校長として、協力をいただく部分もあるので、なかなか言いにくいこともある。設置時や第1回の協議会において、その部分をしっかりと協議会委員の方に具体的に説明し、理解していただくとともに、校長として常にその部分がぶれないような運営をしっかりとしていくことが大切になると思われる。

【地域との双方向性への取組】

本市のコミュニティ・スクールは、学習支援型を核としている。学校と地域がより良い形で進んでいくためには、積極的な学校側から地域への情報発信が大切となる。さらに、学校側からの地域への想いを伝える取組も必要となると思われる。各校とも、学校便りの地域への配布、学校での学習でのお礼の手紙、成果の発表会、感謝の花の贈呈など、形や取組、また、その頻度は様々であるが、これまでの中で取り組んできている。こうしたことの大切さも改めて確認できた。

III 成果と課題

1 成果

「設置準備期」「設置期」「設置初期」と3つの時期における課題を明確にすることにより、より良い方向や考えていかなければならないこと等をしっかりと準備できるようになることがあると思われる。そうした意味において、今年度の研究についても、一定の成果があったと思われる。

2 課題

課題としてあげられることは、研究の深まりやまとまりを作れなかったことである。内容的に、本来、様々な状況に応じた形が大切となる面もあるので「こうあるべき」といった形でのまとめは本研究にはそぐわない。しかし、大枠での方向性は示すことができたのかもしれない。その意味において、課題が残ると思われる。そうした点を、来年度の研究に期待したい。

IV おわりに

地域の特色を生かした「地域とともにある学校」として進めてきた本地区のコミュニティ・スクールであるが、校長は、自校の教育活動の一層の充実のため、コミュニティ・スクール設置に向け、より良い方向を探りその方向性を明確に打ち出していく必要がある。従って、校長は、学校の教育活動全体を再度見直し、しっかりとマネジメントしていくことが重要となってくることが改めて明らかになった。（部長 三森 公仁）

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための 自己指導能力を育成する生徒指導の充実

I はじめに

東山梨地区の中学校は現在8校あり、山梨市3校、甲州市5校である。少子化にともない生徒数は減少の一途をたどり、4校は中規模校(山梨2・甲州2)、残り4校(山梨1・甲州3)は各学年1クラスのみの小規模校である。甲州市の中学校は令和4年度には4校へ、令和7年度には2校へと統合が予定されている。地域のまともは強く教育力もあり、非行などの問題行動は少ないが、不登校などの生徒は年々増えてきている。そんな中、特別活動や部活動は、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築き、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養う重要な役割を持つと考える。

II 研究の概要

1 研究のねらい

本研究部会のテーマ「好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する特別活動、部活動の在り方」について各校の実態を基に研究を進める。

2 研究の経過

(1) 1年次(2020年度)

部活動と生徒指導のかかわりについて洗い出し、そこから課題を見出した。

(2) 2年次(2021年度)

生徒会活動を通して自己指導能力を育成する視点にもとづき各校の事例発表を基に研究を進めた。

3 研究の概要

(1) 1年次(2020年度)

各校ともに部活動の目標として「望ましい集団を通して、心身の調和のとれた発達を図り個性を伸長するとともに集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる」を多くの学校で掲げている。

すなわち、技術指導よりも「部活動を通して何を生徒に学ばせるか」といった視点を重視する必要性が再確認された。

(2) 2年次(2021)年度

各校の生徒会活動の目的・目標等を自己指導力の育成の視点で分析を行った。

「自己実現を図るための自己指導能力育成」の視点は盛り込まれているものの明記されている学校は少ない。

しかし、具体的な実践を通して「自己指導能力」を高める生徒会活動は「意識化の有無」にかかわらず各校で実施されているのが現状である。

また、新学習指導要領第5章の第1「目標」で示されている、資質・能力に基づいた生徒会活動の目標設定となるよう検討が必要である。

III まとめと課題

自己指導能力についての定義として「生徒指導の機能と方法(坂本昇一 文教書院)」の中の記述を引用すると『自己指導能力とは、その時、その場で、どのような行動が適切であるか、自分で判断し、決定して実行する能力』とある。

自己指導能力を育成する方法について、木原孝博氏は「新生徒指導基本用語辞典」(明治図書)の中で自己指導能力を育成する方法として「何よりも児童生徒の自発的学習活動が尊重されていなければならない。そのためには、まず受容的な教師－児童・生徒関係を作り、それを支点として受容的な学級風土を作り上げ、児童・生徒の自発的学習意欲が自然発生する条件をつくる。また自発的学習活動が集団活動として成功するようにしむけ、援助し、努力させる。自発的集団活動の成功経験を通して自己指導能力が育成される」と述べている。(平成15年度 山梨県総合教育センター 長期研修員研究報告書「自己指導能力を高める生徒指導に関する研究」執筆 長期研修員 渡邊 尚英)より引用

また、「生徒指導リーフ Leaf.6 特別活動と生徒指導」(国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター編集 <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf06.pdf>)には「自己存在感」「共感的な人間関係」の重要性とともに「自己決定の場や機会をもうけ、全ての児童生徒に自己実現の喜びを味わわせる取り組み」が強調されている。

特別活動、部活動を通して好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成するには「自発的な活動の尊重」「受容的・共感的な人間関係」「集団活動として成功するようしむけ、援助し、努力させる」「自発的集団活動の成功経験を積ませる」ことが重要である。

生徒会活動の目標等を新学習指導要領に記されている資質・能力の育成の視点から見直すとともに、上記視点を明確にして具体的な活動場面において育てたい資質や能力、指導方法等について全職員の共通理解のもと意識化して取り組むことが大きな成果を生むと考える。

*参考資料「生徒指導リーフ Leaf.6 特別活動と生徒指導」



(中学校研究課題別4部長 三枝 敏明)

学 校 運 營 研 究

山梨市学校運営研究会	・・・・・・・・・・ 139
甲州市学校運営研究会	・・・・・・・・・・ 141

学校運営協議会制度の導入・運営に向けて

－CS導入・運営・推進への教頭の関わり－

I はじめに

山梨市では、平成28年度より笛川小中学校に、学校運営協議会が設置され、本年度より市内小学校に学校運営協議会が設置された。また来年度は、市内2つの中学校でも、設置が計画されている。そこで、CSの円滑な導入・運営に向けて、本支部では、昨年度、課題別研究のテーマを「学校運営協議会制度の導入・運営に向けて」－CS導入・運営・推進への教頭の関わり－と設定し、3年間の研究をスタートした。研究の2年目である今年度は、市内全小学校で導入されたCSの運営・推進について、また、来年度の中学校へのCS導入に向けて、教頭のかかわりについて研究を深めていくこととした。

II 研究のねらい

学校運営協議会制度は、地域と学校が課題を共有し、目指す子ども像、地域像に向かって「連携・協働」していくためのものである。そのためには、それぞれの学校や地域が持つ特色や教育力を指導に生かしていく方を熟議する必要がある。そこで、

- ・既にCSが設置されている学校の情報を共有し、導入へのプロセスを把握する
- ・導入へ向けた各校の進捗状況を共有し、運営・推進方法にかかる内容を洗い出す
- ・導入後、情報交換等で、成果や課題を共有しながら、教頭の役割について検討していくを主な内容として、CSの導入・運営・推進をより円滑にしていくよう、教頭の役割を検討し整理することをねらいとする。

III 研究内容（三年計画の二年目）

1 第1回学校運営協議会の実施状況

- ・第1回学校運営協議会は、各学校において4～6月に、地域住民・保護者・学識経験者・学校職員等が参加し、開催された。多くの学校で、教頭が協議会の日程や場の設定・連絡調整・資料の作成・会の運営等を行った。
- ・各校での熟議の主な内容としては『児童の様子（学力・家庭学習・不登校・いじめ・あいさつ等）について』『学校の職員体制・指導体制について』『児童の安心・安全について』『地域と連携した取り組みについて』『コロナ対策とそれにかかわる教育活動・偏見や差別の防止について』『一人一台端末・ICT活用について』『教職員の働き方改革とメンタルヘルスについて』『学校の施設・設備について』『地域での子どもの様子について』等があった。

2 CS導入、運営にかかわる課題

- ・CSを活用して、地域・保護者と連携した活動を仕組んでいくためには、活動を教育課程へ適切に配置していかなければならない。今年度は、この点が不十分な

学校が見られた。学校がしっかりした見通しを持つことが重要である。委員の方々に目標や学校の現状を理解してもらい、連携を協議する中で、次年度の教育課程への位置づけを行っていききたい。また、これまで行われていた活動をどのようにCSにリンクさせるかも引き続き検討していききたい。

- ・協議会での話し合いを深めるために、また、委員の方々からCSの趣旨に合ったご意見をいただくためには、日ごろからCSのことや学校の現状について理解していただく必要がある。学校の情報を伝えたり、学校に来ていただき実際に学校や子ども達の様子を見てもらったりする機会を増やしていききたい。
- ・地域や保護者のCSについての理解は十分とは言えず、CSへの関心も高くない。保護者や地域に対しての情報発信等を積極的に行い、更に周知していききたい。
- ・また学校の職員も転出入があり、CSについて理解できていない職員も見られる。教育課程への位置づけも含め、職員への学習会・研修等を行っていききたい。
- ・CSが設置されたことにより、地域と連携した活動の増加が考えられる。職員からは、今後、連絡や調整といった業務が更に増えるのではないかと心配する声も上がっている。現段階では、CS導入により、学校が受け持つ事務局が増え、企画・運営・連絡・調整等、教頭の負担が増えている現状がある。今後は、それらの業務をいかに委員へ分担していくのが課題である。また、学校と地域をつなぐコーディネーターを配置していく仕組みについて検討していききたい。CS導入が、学校の負担している業務（本来なら家庭や地域で行うべき業務等）を地域に任せるきっかけとしたい。
- ・CSを運営していく上で、地域の方々と子ども達が交流することや、地域の方々に学校の様子を見ていただくことは、とても重要であるが、防犯上の問題も存在する。ガイドラインを作り、子ども達の安全安心を第一に交流や学校開放等を行っていききたい。

V 研究のまとめと今後の課題

各学校のCSの取り組みの現状を共有する中で、課題（教育課程への位置づけ、人材の確保、教職員・保護者・地域への周知等）が見えてきた。今後は課題解決に向けた各校の取り組みを検討し、効果的なCSの運営につなげていききたい。特に、CSの導入に伴う学校の業務の増加については大きな課題である。持続可能で無理のないCSの運営・取り組みを行うために、焦らず、小さく立ち上げ大きく育てるイメージでやっていくことが大切ではないか。まずは、地域や保護者の方に学校を知ってもらうところから始め、既存の取り組みを生かしながら運営を行っていききたい。いずれは、運営を地域に返していくことも必要である。各校の特色を生かし、保護者・地域との連携を密にするとともに、市内学校間で情報・資料等の共有を積極的に進められるよう研究を深めていききたい。

（課題別研究部長 竹川俊之）

教職員の年代に応じた専門性を高めるために ～OJTの実践と教頭の関わり方を通して～

I はじめに

新学習指導要領が全面実施となり、そのねらいを具現化するためには、チームとしての組織的な学校体制づくりが急務である。しかし、学校現場においては、教職員の大量退職期を迎え、年齢構成の偏りや経験の違いなど様々な課題を抱えている。

そのような中、甲州市学校運営研究会では、この現実を受けとめ、教職員の年代に応じた専門性を高めるために、OJTの実践と教頭としての関わり方について継続研究に取り組んでいる。教職員の資質・能力をいかに伸ばしていくのか、教頭として、一人一人の持ち味を生かし、どう全体に対してリーダーシップを発揮していくのか、調整していくのか、教職員同士が、学び合い、支え合いながら、教職員の育成の要であるOJTの組織的な取組に視点を当て、組織の活性化、人材育成につながる研究を目指している。

3か年研究の1年次である昨年度は、2019年度の研究成果として作成された「OJT実践計画試案」を基に、まずは各校の実態に応じた実践を行った。2年次である本年度は、昨年度の研究を土台として、OJTの取組について意図的・計画的・継続的に進めていけるよう研究に取り組んでいく。

II 研究のねらい

- 1 「やまなし教員育成指標一覧表」に基づいた「OJT実践計画試案」を基に、各校でOJTに取り組み、それを改善することにより、教職員の専門性と、学校の組織力を高める。
- 2 教頭としてどのように関わりを持てば効果的なのか、その在り方を探る。

III 研究内容

1 「OJT実践シート」の作成と実践事例の共有

- (1) 「OJT実践計画試案」を基に、今年度「OJT実践シート」を作成し、教職員のステージに応じた具体的な方策の作成にあたった。各校でOJTの実践にあたる際、本シートを基に、意図的・計画的・継続的な見通しの3点を意識しながら取り組んだ。また研究会にて、各校の取組、教頭としての働きかけ等、校種や規模を配慮しながら実践事例を提示し、各学校の具体的な方策について共有した。

【OJT実践シート内容項目について】

- ①対象者のステージ
- ②現状（R2またはR3・4月からの様子）
- ③教頭としての関わり【教】
- ④コーディネーター【C】
- ⑤R3の目指す姿
- ⑥R3の具体策・取組予定
- ⑦教頭としての配慮点
- ⑧達成度

2 アンケートの実施

(1) 教頭としてのOJTへの取組について

教頭としてOJTへの取組に関して、1学期にアンケートを実施し、日頃から心掛けていた点と具体策やOJTを行う上での課題等、教頭同士の情報共有を図った。アンケートの実施にあたっては、本支会「甲州市教頭会 Class Room」を活用し、回収及び集計を試みた。

(2) 「OJT実践計画試案」の活用について

2019年度の研究で作成された「OJT実践計画試案」を手引きとしながら、「OJT実践シート」へ必要事項を教頭が記入し各校の実態に応じた取組を行った。その実践計画試案の活用について、アンケートを実施した。その結果、校内での人材育成を行う上で、実践計画試案が大変有効に活用されていることが示された。

3 ICTを活用した研究方法の工夫

「GIGAスクール構想」によって甲州市、山梨市で導入した「Google Workspace」を教頭職である私たち自身が積極的に活用することが、学校の情報化そして働き方改革の一端につながると捉え、本研究に関わる課題提出、アンケートの実施・集計の際に活用した。

IV 研究の成果と課題

1 成果

- ・各校の実態に応じて「OJT実践シート」を作成したことで、教頭としての関わり方がより明確になるとともに、意図的・計画的・継続的な取組につながった。
- ・各校の実践を共有したことで、他校のステージに応じた教職員への具体的な方策を得ることができた。
- ・アンケート結果から見える成果と課題について教頭同士が共有することで、それぞれの働きかけを学ぶきっかけとなるとともに、教職員組織の強化が図られた。
- ・「甲州市教頭会 Class Room」を窓口にも、スプレッドシート等活用した試みにより、集計作業の短縮につながり働き方改革の一助となった。

2 課題

- ・毎年変化する職員構成において、教職員の専門性を高める取組及び多忙化解消・働き方改革をどう進めていくのか。今後とも取り組むことが必要である。

3 まとめ

- ・昨年に引き続き本研究は、研究のために行うという意識ではなく、すべて学校の組織力向上のために取り組んでいくことを確認している。今後もさらに、先輩方が残してくださった財産をつなげていき、教頭同士の連携を図りながら、学びを深めていきたい。

(課題別研究部長 内田 浩恵)

報 告 書

全国教頭研究大会	・ ・ ・ ・ ・ 1 4 3
関東甲信越地区教頭研究大会	・ ・ ・ ・ ・ 1 4 4
内地留学研修報告	・ ・ ・ ・ ・ 1 4 5

第63回全国公立学校教頭会研究大会 佐賀大会参加報告

令和3年度『第63回 全国公立学校教頭会研究大会 佐賀大会』が8月3日(火)～4日(水)の2日間、佐賀市「グランデはがくれ」を会場に『未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり』を大会主題としてオンライン開催された。今回の大会は、新型コロナウイルス感染症対策のため、内容を縮小しての実施となった。

1日目は、開会行事に引き続き記念講演が、講師に野球評論家であり、元広島東洋カープの監督である緒方孝市氏を招き、「組織を生かすマネジメント」と題して開催された。2日目は、10の分科会に分かれて各都道府県からの提言と協議が行われた。

2日目に参加した特I分科会では、「新たな生活様式に基づく学校の取組とGIGAスクール構想」と題して、GIGAスクール構想によって変わる教育現場での副校長・教頭の関わり方や、ICTを活用した協働的な学びの実現に向け副校長や教頭が担う役割について、放送大学の中川一史教授にご講演いただきながら研究協議をすすめ、テーマに迫る議論が展開された。

まず、協議の柱I「GIGAスクール構想によって変わる教育現場と、副校長や教頭の関わり」についてである。私が参加したブレイクアウトルームは、北は秋田から、南は沖縄までの6名での参加であった。それぞれの学校のICT環境の整備や活用等の現状、問題点等を出し合い、意見交換を行った。やはり、自治体によって対応が異なり、整備の時期や研修機会の保障、ICT支援員の配置など大きな差があることがわかった。また、1人1台端末等のICT環境が整備されても、それを学校として使いこなすことができなければ、すべては絵に描いた餅になってしまう。自校の教育カリキュラムにどのようにICTを組み込んでいくか、また教職員のICT活用能力をいかに高めていくかなど、学校経営上の課題として取り組んでいく必要があることが確認された。

次に、協議の柱II「ICTを活用した協働的な学びの実現に向けた副校長や教頭の役割」についてである。ICTを活用した協働的な学びの実現に向けては、ハード面やソフト面の充実、さらには日常的にICTを活用できる体制を整えることが欠かせない要素となることが出された。特に、児童生徒に授業を通して直接指導することが少ない管理職が、いかにその活用に関わっていくのかが大きな課題となる。全教職員が端末をツールとして使いこなせるようにしていくためには、まず、「使用のハードル」を下げることが大切である。OJTをうまく機能させ、誰でも気楽に使えるよう教職員をつないでいき、モチベーションを高めていくことが必要なのではないだろうか。さらに、市教委レベルでも有効な実践例等を共有し合い、アプリ等の紹介も積極的に行っていくようにしたい。

現在、山積している様々な教育課題の中で、本分科会では「新たな生活様式に基づく学校の取組とGIGAスクール構想」という大きな課題が取り上げられた。それらの課題の解決に向けて、副校長・教頭としてどのように関わっていけばよいのかについて、全国の仲間との交流や学び合いの機会ができたことは大きな収穫であった。この貴重な経験を今後の学校運営に生かしていけるよう、各校および教職員に環流していきたい。また、コロナ禍の中、今大会の企画・運営に携わられた方々に改めて感謝を申し上げたい。

(山梨小学校 古屋雅章)

第 62 回甲信越地区公立学校教頭会研究大会千葉大会（オンライン） 参加報告

I 研究主題

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり（第 12 期全国統一研究主題）
～夢と思いやりの心を持ち、新しい時代をたくましく生きる子供の育成を目指して～

II 研究主題の設定について

急速に変わりゆく現代社会において、将来に向けての夢や希望を持ち続けること、人間としての優しさと人との絆、他人を思いやる心は、普遍的に身に付けさせたい資質である。超スマート社会（Society5.0）をたくましく生き抜く力を身に付けさせることは、学校教育の大切なであり、持続可能な社会の創造につながると考え、本大会サブテーマが設定された。

III 研究大会の概要

令和 3 年 1 月 12 日、千葉大会が開催された。新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインでの分科会のみで開催であったが、1 都 8 県から 900 名が参加し、12 の分科会に分かれ、それぞれ、提言、グループ別研究討議が熱心に行われた。

IV 第 1 分科会「教育目標・教育理念に関する課題」（小中合同）の概要

第 1 分科会では、参加者が 13 グループに分かれて、2 つの提言（神奈川県・千葉県）について協議・情報交換を行った。オンラインでの開催となった、参加各校のを知り、学ぶ良い機会となった。

1 神奈川県 カリキュラム・マネジメントを生かした学校運営の改善

川崎市立中学校のカリキュラム・マネジメントへの取組状況をアンケート調査で把握し、調査結果から浮かび上がってきた課題の把握と教頭として心がけるべき視点の検討を行った実践の報告がされた。グループ討議では、「教育活動について、教育的価値があるかないか判断しマネジメントする。」「学校は手段が目的化しやすい。何のための活動なのか、確認を行う。」「まずは地域を知ることが大切。積極的にの方と接する機会を持ちたい。」「社会が大きく変わっている時代である。地域が今、に何を求めているのか把握する。」等の意見が出された。

2 千葉県 教育目標達成に向けた「組織マネジメント」における教頭の役割

学校教育指導重点目標の達成につながる ESD を推進し、教育目標や教育理念に関する課題の解消に向けた研究について報告がされた。グループ討議では、「教頭が、地域資源を開発し、先生方に提供することをしたい。それにより子ども達は、平面的な学習ではなく、様々なものと結びつき立体的な学習をすることができる。」「関係をつないでいくこと（人と人、学校と地域、子どもと教材など）が教頭の役割である。」「ミドルリーダーと若手が相談やアドバイスのできる場を設定する。」「様々な教育活動の中で、職員の役割分担を適材適所でマネジメントし、OJT で育成を図る」等の意見が出された。

（課題別研究部長 竹川俊之）

小学校外国語科における思考に焦点化した授業改善
—相手意識と学習プロセスの言語化を中心に据えて—

I 研究内容

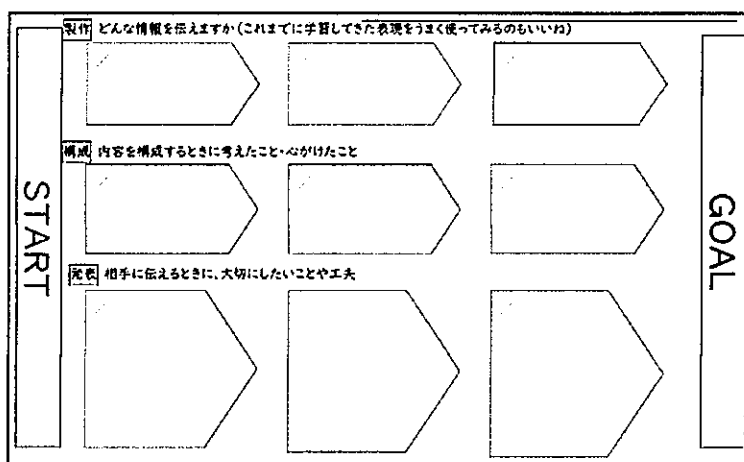
小学校外国語科では、子どもが思考を働かせ、考えを伝え合う言語活動の設定が求められている。「知識及び技能」に関しては、基礎的な技能を子どもに身につけさせることが求められるが、「思考力、判断力、表現力」をいかにして育てていったらよいのだろうかという課題を感じていた。そこで、思考に焦点化して授業改善を目指すことにした。思考を促すために、相手意識をもたせる場面の設定と、学習プロセスを記入する思考記録ツールの開発・導入をした。なお、思考記録ツールについては、学習状況の見取りができるかもあわせて検討した。

II 成果と課題

思考させる意義について研究・実践を通して考え続けた。実践単元である発表領域の場合、様々な思考させても、英語学習者としての一步を踏み出したばかりの小学生にとっては英語で伝えられることは限られてしまう。そのため、思考させる意義について疑問に思われるかもしれない。しかし、いわゆる「型」にあてはめて発表内容を考える学習活動の繰り返しだけでは、意図を伝え合うことも求められる中学校以降の英語学習を見据えたときに不安が残る。その点において、思考を働かせる経験やプロセスが、その後の英語学習の下支えとなるのではないだろうか。

思考記録ツールについては、授業改善の役割としては効果があることが示唆された。一方、子どもの思考を促すツールとしては、さらなる改善と、検証をしていく必要性を感じている。子どもが相互に見合うことで、さらに学びが促される可能性もある。ICTによって記入させることで活用の幅が広がりそうだ。教師と子どものやり取りを中心に据えて授業が展開されることが望ましいとされる小学校英語科において、学習プロセスを言語化し、記録に残す時間の確保については、考えていかねばならない課題である。単元すべての時間で記録させずとも、的を絞って扱うこともひとつの方法として考えられる。

III 成果物 思考記録ツール ※話すこと（発表）領域



<各項目の表記>

製作 どんな情報を伝えますか（これまでに学習してきた表現をうまく使ってみるのもいいね）

構成 内容を構成するときに考えたこと・心がけたこと

発表 ALTの先生に伝えるときに、大切にしたいことや工夫

（日下部小学校 藤木真里佳）

技術科「C エネルギー変換の技術」で「ワイヤレス充電」を取り扱った授業構想

I. 研究内容

スマートフォンなどの機器で、ワイヤレス充電が広がりつつある。このような最新機器は日常的に使用しているが、その仕組みを知らずに利用していることがある。山梨県内公立中学校2年生の生徒26名を対象に、「ワイヤレス充電という言葉を知っていますか」という質問をした。その結果、ワイヤレス充電を知る生徒は6割いた。ワイヤレス充電を知っていた生徒に仕組みを説明させると、「スマートフォンを置くだけで充電できる」、「コードで電気を機械に流すのではなく、蓄電池などを使って、電気をそのものにためておく仕組み」という回答であった。このことから、機器の機能は知っているが原理は理解できていないことがわかった。

以上から、ワイヤレス充電の仕組みの一つである電磁誘導の原理を技術科の授業に取り入れ、電磁誘導の現象を取り扱った教材を製作し、機器の仕組みを理解するための授業を考案して実践した。この授業で電磁誘導の原理について、どのように理解しているか調査し検討した。

II. 成果と課題

今年度、山梨大学教職大学院へ内地留学生として1年間、佐藤教授の指導・助言のもとで研究をすることができた。技術科では、電磁誘導の原理については授業で取り上げられることは少ない。しかし現在社会では、電磁誘導方式を利用したワイヤレス充電などの仕組みを取り入れている機器は広がりつつある。

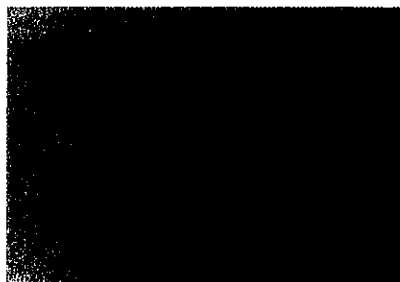
このことから、電磁誘導を活用したワイヤレス充電の仕組みを理解することは、機器の構造を理解し、これからさらに発展することが予想できるワイヤレス充電などの仕組みに関心を高めることにつながると考えている。

授業実践は、私が開発した電磁誘導を可視化する教材を用いて行った。電磁誘導でLEDを点滅させ、現象を可視化し原理を指導した。生徒は電磁誘導が身近なところで用いられていることを知り、現象を認識することができたと感じを記入していた。

III. 成果物

電磁誘導を利用したワイヤレス充電の授業を実践するために、電磁誘導の現象を可視化するための教材を開発した。

◎電磁誘導を可視化するための教材



左の写真は開発した教材である。LEDが電磁誘導で点灯する。50分の授業で製作と、原理を説明することができる。電磁誘導を学習することにより、発電やモータについて知識を深めることができると考えている。
(勝沼中 内田 瑛一郎)

あ と が き

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大が、いまだ社会生活や教育現場に大きな影響を及ぼすなか、2030年の社会の未来を見据え、子供たちに必要な資質・能力を育成することを踏まえ改訂された学習指導要領が、小学校では昨年度から、中学校では今年度から全面実施されました。今回新たに設けられた前文には、今後の予測困難な時代に対し「一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とあります。各校では、日々の学びを「知識伝達型」から「主体的・対話的で深い学び」へと転換し、授業を構想するとき、授業について語るときに、主語を学習の主体である「子供」に変え、その理念の実現のための研究、実践を重ねてきました。

また、社会の情報化・デジタル化が進展するなか、「GIGA スクール構想」により一人一台端末及び高速大容量の通信ネットワーク環境が実現し、学校においても ICT を最大限に活用して、子供たちの学びを多様に保障することが求められました。今年度、東山梨地区の 29 校中 14 校の研究主題・副主題に「ICT」に関する言葉が使われ、各校で活用が推進されました。(因みに、20 年前の本誌第 40 号では、当時の 35 校中 21 校で「総合的な学習の時間」という言葉が使われていました)。授業での効果的な ICT 活用の輪は、研修や研究会だけでなく、時間や場所を工夫した日々の OJT により広がったと伺っています。

「東山梨教育研究」は昭和 38 年の初刊以来、60 号を数えます。これまでも各学校・研究部会では、多くの先輩方が築き上げてこられた実践とその成果の上に立ち、社会背景や地域の現状を踏まえ、目の前の子供たちに必要な力を見据えた教育研究を進めてきました。教育の「不易と流行」について心に留めながら、日々の実践、持続可能な研究を積み重ね、教育活動の更なる充実を図るためにも、年度の研究成果が収録される「東山梨教育研究」の果たす役割は、ますます重要なものとなることでしょう。

末筆ながら、本誌の発刊にあたり、ご多用の折に玉稿を賜りました甲州市教育委員会教育長様並びに東山梨教育協議会会長様をはじめ、貴重な原稿を寄せられた皆様、発行にご協力いただきました皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、山梨・甲州両市教育委員会には財政の面で大きなご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。なお、今号の表紙は山梨北中学校秋山恵莉圭さんの作品「未来の希望」です。ありがとうございました。

【編集実行委員会】

甲州市教育委員会教育長	小林	俊彦
東山梨教育協議会会長	青柳	俊雄
山梨市教育委員会教育長	澤田	隆雄
峡東教育事務所副所長	廣瀬	学
峡東教育事務所指導主事	中村	弘和
山梨市教育委員会指導主事	岩下	秀人
甲州市教育委員会指導主事	小椋	規雄
東山梨教育協議会事務局次長	日野原	和貴
東山梨教育協議会研究推進委員長	広瀬	竜太
山梨支会研究推進委員長	村田	裕紀
甲州支会研究推進委員長	中村	大介

発行日	令和4年4月1日
発行責任者	東山梨教育研究編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究編集実行委員会 事務局
印刷所	昭和堂印刷

東山梨教育環境研究

2021年度

東山梨教育協議会

東山梨教育環境研究特別委員会

も く じ

I. 児童・生徒数と教職員の定数	
1. 児童・生徒数及び教職員等の配置状況	1
2. 教職員年齢別・男女別分布状況（県費職員）	2
3. 東山梨地区 市別・学校別在籍数及び学級予定数	3
II. 教育行財政及び教育環境の実態	
1. 教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）	4
2. 教育環境の実態調査	6
III. 子どもの生活実態に関する調査	12
IV. 教職員の健康と労働	
1. 多忙感に関する調査結果	21
研究を終えて	24

I 児童・生徒数と教職員の定数

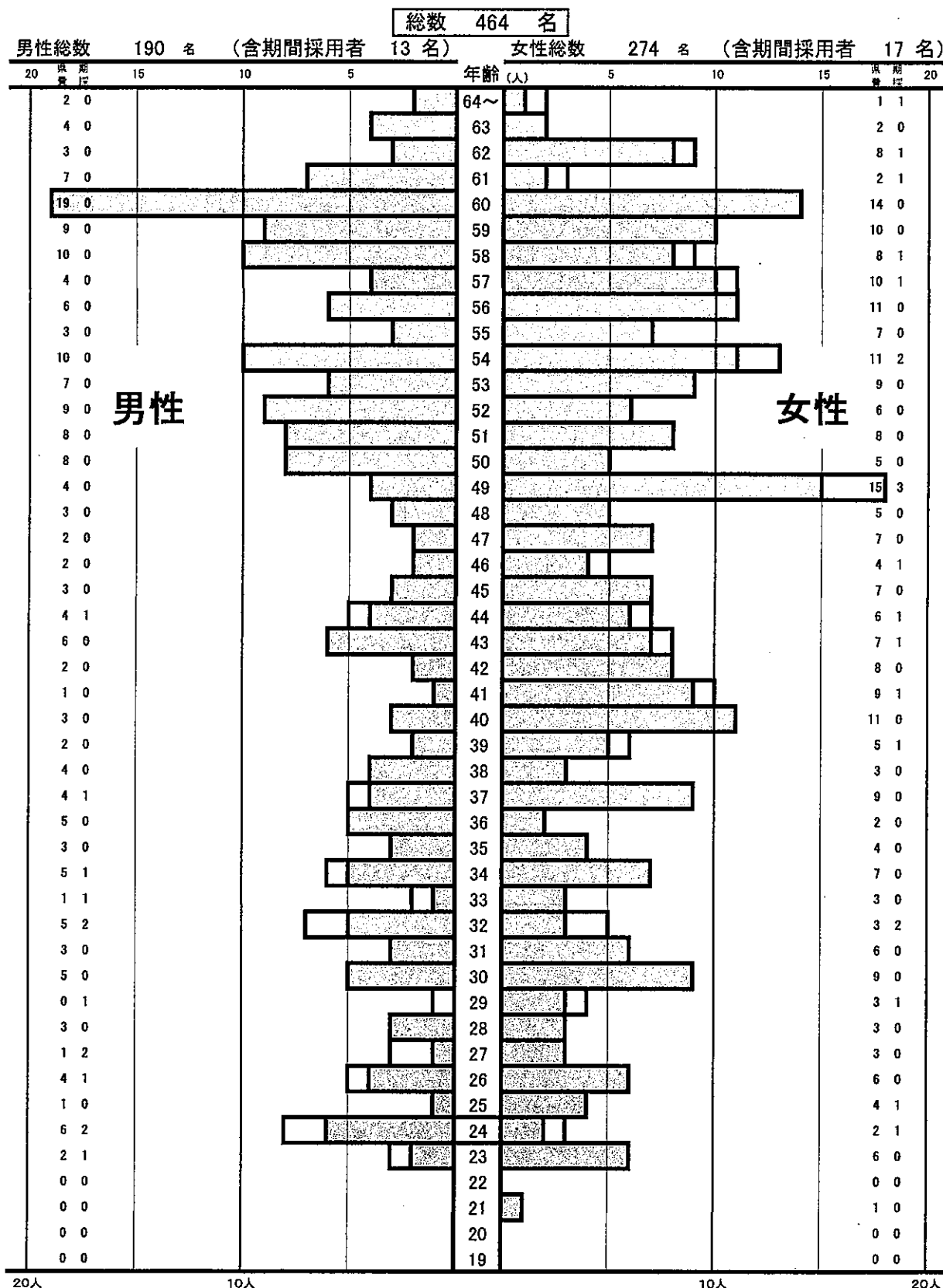
1 児童・生徒数及び教職員等の配置状況【2021年5月1日現在】

項目 校名	児童 生徒 数	学級数				教職員等配置状況										備考	
		通常	特支	分校	合計	校長	教頭	主幹 教諭	教諭	養教	栄養	事務	市 単 教諭	司 書	調 理		用 務
加納岩小	300	12	3	0	15	1	1	0	23	1	1	1	0	①	0	①	◆学指1 ◆スサ1
日下部小	351	13	5	0	18	1	1	0	28	1	ケ	1	④	①	0	①	※栄士(ケ) 英語専科(本務校:ケ→八幡小、岩手小、山梨小)1 初任者加配1(本務校:ケ→八幡小、日川小) 遠送加配4 県非常勤(きめ細、不応)2 特別支援員(市)4 ◆きめ細1 ◆学指3 ◆スサ1
後屋敷小	223	9	3	0	12	1	1	0	13	1	ケ	1	0	①	0	①	非常勤講師(アクティブ)1 ○特別支援員3 ◆学習指導員2 ◆スサ1
日川小	142	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	※英語専科ケ(●加納岩小 後屋敷小) ※栄教ケ(●加納岩小 日川小) 初任研後補充1 特支支援員② ◆学指1 ◆スサ1
山梨小	221	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	再任用5(0.5) 県非常勤講師1(0.5) 市特別支援員2 ◆学指1 ◆スサ1 ※栄教(山梨南中・後屋敷小) ※英語専科(日下部小・八幡小・岩手小) ※初任者指導(加納岩小・日川小)
八幡小	133	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	②	①	0	①	※英語専科ケ(●山梨小 日川小 岩手小) ※栄士②(山梨北中) 特支支援員②(内1名ケ日下部小) 初任研後補充1 ◆学指② ◆スサ④
岩手小	34	4	2	0	6	1	1	0	6	1	④	1	②	⑦	0	①	※英語専科ケ(日下部小) ※栄士②(山梨北中) ※司書②(八幡小) 特支支援員①
笛川小	150	6	3	0	9	1	1	0	10	1	④	1	0	①	0	①	※英語専科小中連携(●笛川中) ※栄士② アクティブ/初任研後補充1 特支支援員② ◆学支①
山梨南中	363	12	4	0	16	1	1	0	25	1	1	1	0	①	0	①	※栄教(山梨小 後屋敷小) 常勤加配(はくくみ1 不登校1 生徒指導1) 県非常勤(はくくみ0.5 きめ細0.5) 特別支援員② ◆スサ1
山梨北中	381	12	3	0	15	1	1	1	27	1	④	1	0	①	0	①	※栄士:給食センター 特支支援員2 ◆学支1
笛川中	85	3	2	0	5	1	1	0	8	1	④	1	0	①	0	①	※栄士②(笛川小) 特支支援員② ◆学指② ◆スサ④
山梨市合計	2383	89	34	0	123	11	11	1	170	11	2	11	8	10	0	11	
塩山南小	347	13	3	0	16	1	1	0	23	1	1	2	①	①	0	②	※栄教1(塩山北小 玉宮小 井尻小) 初任研後補充2 学習支援員④ ◆スサ④
塩山北小	110	6	2	0	8	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	※栄教(塩山南小 玉宮小 井尻小) 英語専科ケ(松里小 井尻小 東雲小) 司書②(玉宮小) ○学習支援員② ◆スサ1
奥野田小	111	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	②	学習支援員② 栄士(本務校塩山中)
大藤小	38	5	1	0	6	1	1	0	7	1	④	1	②	⑦	0	②	※栄士②(勝沼中 神金小 松里小) ※司書②(井尻小) 複式解消支援教員① 学習支援員① 【育休教諭1名退職(8月末)】
神金小	36	4	1	0	5	1	1	0	5	1	④	1	0	⑦	0	①	初任研後補充1 英語専科ケ(●玉宮小 大藤小) 栄士②(大藤小 松里小 勝沼中) 司書②(松里小) 複式解消支援教員②
玉宮小	27	4	3	0	7	1	1	0	7	1	④	1	0	⑦	0	②	※英語専科ケ(大藤小 神金小) 複式学級解消支援教員② ※司書②(塩山北小) ※栄教ケ(塩山南小 塩山北小 井尻小)
松里小	87	6	3	0	9	1	1	0	11	1	④	1	①	①	0	②	市負担職員…学習支援員1名、司書1名、栄養士1名、用務員2名 県費非常勤講師等…産休代替1名
井尻小	101	6	1	0	7	1	1	0	8	1	ケ	1	0	①	0	②	※英語専科ケ(●松里小 東雲小 北小) ※栄教ケ(●塩山南小 塩山北小 玉宮小 センター) ※司書②(大藤小) 県費初任研後補充1 ○学習支援員① ○用務員…シルバー人材2名(交替で)
勝沼小	139	6	2	0	8	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	②	①	なし
祝小	97	6	1	0	7	1	1	0	8	1	1	1	0	⑦	②	①	① ◆スサ1 ※上記の栄養士は「栄士」
東雲小	140	6	2	0	8	1	1	0	9	1	1	1	0	①	②	①	※英語専科ケ(松里小 井尻小 塩山北小) ※栄教1ケ(勝沼小) ※司書②②(大和小) 学習支援員② ◆スサ1
麓山小	44	5	2	0	7	1	1	0	7	1	ケ	1	0	⑦	②	①	※英語専科ケ(勝沼小、祝小、大和小) ※栄士②(祝小) ※複式学級解消支援教員① ※司書②(奥野田小)
大和小	36	4	2	0	6	1	1	0	6	1	1	0	0	⑦	②	①	※英語専科ケ(勝沼小・祝小・麓山小) ※栄教ケ(大和中) ※事務ケ(大和中) ※司書②(東雲小) ○特支支援員① 学習支援講師②
塩山中	330	11	4	0	15	1	1	1	27	1	1	1	0	①	0	②	県費非常勤講師1 栄養1(奥野田小 塩山北中 松里中) 学習支援員②
塩山北中	56	3	2	0	5	1	1	0	8	1	ケ	1	0	ケ	0	②	※栄教ケ(●塩山中 奥野田小 松里中) ※司書②(松里中) 小規模中学3 学習支援員②
松里中	105	3	2	0	5	1	1	0	9	1	④	1	0	①	0	①	※栄教ケ(●塩山中・奥野田小・塩山北中) ※司書②(塩山北中) 学習支援員① 小規模中学3 ◆スサ④
勝沼中	227	8	1	0	9	1	1	0	19	1	④	1	0	①	0	①	◆スサ1
大和中	17	3	2	0	5	1	1	0	8	1	④	1	0	⑦	0	①	※栄士②(大和小) ※司書②(勝沼中) 県費小規模中学2 学指①(非常勤・塩山北中との兼務)
甲州市合計	2048	105	36	0	141	18	18	1	191	18	5	18	0	0	0	0	

2 教職員年齢別・男女別分布状況 <2021年度>

(県費教職員：校長・教頭・主幹教諭・教諭・養護教諭・栄養教諭・学校栄養職員・事務職員)

- ・ 期間採用者数は外数, 64歳以上の教職員は「64～」の欄に合わせて示す
- ・ 充て, 専従, 傷病, 在外等研修, 育児休業者等を含む
- ・ 年齢は2022年3月31日時点【2021年12月調べ】



3 東山梨地区 市別・学校別在籍数及び学級予定数 (40人学級として, 特別支援学級は除く)

【2021年5月1日現在】

種別	年度	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度		
	項目 校名	入学 予定者数	在籍 予定者数	学級 数	入学 予定者数	在籍 予定者数	学級 数	入学 予定者数	在籍 予定者数	学級 数	入学 予定者数	在籍 予定者数	学級 数
小 学 校	加納岩小	61	313	11	52	304	11	44	305	11	53	317	12
	日下部小	70	357	12	56	346	12	48	344	12	48	341	12
	後屋敷小	29	214	9	25	194	8	26	175	7	21	171	7
	日川小	36	148	6	27	152	6	27	156	6	28	157	6
	山梨小	29	210	9	32	204	9	33	199	9	26	190	9
	八幡小	22	134	6	10	119	6	14	109	6	18	104	6
	岩手小	5	33	4	5	33	4	1	29	4	7	30	4
	笛川小	21	144	6	24	145	6	14	131	6	15	127	6
	塩山南小	60	348	12	49	344	12	49	334	12	45	318	12
	塩山北小	17	107	6	16	99	6	16	100	6	12	93	6
	奥野田小	16	117	8	18	116	8	22	117	8	18	118	8
	大藤小	5	39	6	4	38	6	5	37	6	6	36	6
	神金小	6	34	4	4	33	4	3	30	4	4	29	4
	玉宮小	5	26	4	3	24	4	4	23	4	1	19	4
	松里小	23	88	6	16	99	6	25	105	6	13	105	6
	井尻小	11	90	6	8	81	6	8	73	6	7	68	6
	勝沼小	19	132	6	18	124	6	14	116	6	19	115	6
	祝小	11	89	7	9	87	7	12	82	7	8	70	7
	東雲小	15	130	6	15	121	6	16	105	6	5	90	6
	菱山小	8	42	5	8	44	5	4	40	5	7	42	5
大和小	5	33	4	5	34	5	7	36	4	9	41	5	
小学校合計		474	2828	143	404	2741	143	392	2646	141	370	2581	143
中 学 校	山梨南中	111	352	10	119	350	9	101	331	9	93	313	9
	山梨北中	124	385	11	144	396	11	124	393	12	103	371	11
	笛川中	27	82	3	23	79	3	28	78	3	19	70	3
	塩山中	91	327	9	96	302	9	94	281	9	139	419	12
	塩山北中	17	54	3	16	47	3	17	50	3			
	松里中	42	112	4	22	95	3	35	99	3			
	勝沼中	88	238	10	71	240	11	84	243	11	70	225	10
	大和中												
中学校合計		500	1550	50	491	1509	49	483	1475	50	424	1398	45
市 別	山梨市小学校	273	1553	63	231	1497	62	207	1448	61	216	1437	62
	甲州市小学校	201	1275	80	173	1244	81	185	1198	80	154	1144	81
	合計	474	2828	143	404	2741	143	392	2646	141	370	2581	143
	山梨市中学校	262	819	24	286	825	23	253	802	24	215	754	23
	甲州市中学校	238	731	26	205	684	26	230	673	26	209	644	22
合計	500	1550	50	491	1509	49	483	1475	50	424	1398	45	

II 教育行財政及び教育環境の実態

教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）

○ ICT環境

第3期教育振興基本計画(2018～2022年度)において、以下の通りICT環境整備目標値が示されている。

*校務用コンピュータ 教員1人1台
*教育用コンピュータ1台あたりの児童生徒数 3.6人
*超高速インターネット接続率/無線LAN整備率 100%
*教材整備指針に基づく整備 電子黒板/実物投影機 1学級あたり1台

☆ICT支援員とは…

授業や研修、校務において、教員と相談したり依頼を受けたりしながら業務を行う専門職員。教育のICT化に向けた環境整備5か年計画(2018～2022年度)において、4校に1人配置が目標水準と示されている。

ICT支援員の具体的な業務例

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・機器・ソフトウェアの設定や操作、説明・機器・ソフトウェアや教材等の紹介と活用の助言・機器等の簡単なメンテナンス・情報モラルに関する教材や事例等の紹介と活用の助言・デジタル教材作成等の支援 |
|--|

- ・貸出用のWi-Fiルーターがある場合は「○」、ない場合は「×」。
- ・図書館システムが導入されている場合は「○」、導入されていない場合は「×」。
※学校独立型は学校単独で市内と連携していないもの。市内連携型は市内学校や図書館と連携しているもの。
- ・指導者用デジタル教科書は教科ごと全学年分あれば「○」、全学年はないが一部ある場合は「△」、どの学年分もない場合は「×」。その他の場合は他の欄に「有」。
- ・電子機器の整備状況の前年比較欄について、前年度より増加は「○」、減少は「▼」、維持(増減なし)は「ー」。
- ・本調査において、大型テレビとは50インチ以上の大きさのものとする。

【施設設備面】

○ 防災対応 ガラスの状況

ガラスの事故は、重大事故につながる可能性が高い。学校施設は、児童生徒が学校生活を送る場であると同時に、非常災害時には住民の避難場所としても使用されるため、ガラス破損事故への対策が必要である。

ガラスの防災対策には、下表のような方法がある。

ガラス品種	安全性能
飛散防止フィルム	・破片が飛散しにくい
強化ガラス	・破損しにくい ・破片が鋭利でなく、しかも小粒である
網入り板ガラス	・火災や火の粉の侵入を防ぐ

○ 空調設備

児童・生徒の良好な学習環境を維持し、適切な教育活動を実施するため、普通教室及び特別教室等に空調設備を整備し、健康管理に配慮する必要がある。

○ 屋外施設

・ プールからの緊急連絡手段

万が一の事故発生時に、円滑・迅速に児童生徒の救助・救命を行なえる体制を整えておくことが必要である。そのためにも、プールからの緊急連絡手段を整備することは重要である。種別は、固定電話(電話番号有)・子機(学校電話と共有)・内線(インターフォン機能のみ)。学校携帯電話(公用)・職員携帯電話(私用)。

○ 新JIS規格児童生徒用机イス

教科書や教材の大型化(A判化など)に対応できるよう、机面寸法を拡大し、多様な大きさを確保できるよう、新JIS規格の机イスを整備することが望ましい。

【 危機管理対策 】

○ 校内緊急通報システム

不審者の侵入防止だけでなく、万が一侵入された場合に校内各教室等への連絡を迅速に行うための通報システムを導入することが望ましい。

○ 電子メールによる情報通報システム

緊急事態等が発生した際は、保護者等に迅速に伝達することが求められる。そのためには、緊急時の連絡先リストや情報伝達網を日頃から整備しておくことが大切である。

○ 敷地周辺フェンス等設置・侵入者用監視カメラ

学校施設の防犯性を確保するため、門・団障の設置や防犯監視システムの導入等により、物理的かつ視覚的にも守るべき範囲を明確化し、不審者の侵入を防ぐ必要がある。

○ 災害時備蓄食料

地震等大規模な災害が発生した場合、保護者の引き取りが困難な児童生徒が生じることが想定される。こうした事態に備えるために食料品の備蓄が必要である。

災害時の備蓄に望ましい飲料水・食料品等

	飲料水	食料品
発災～3日後	1日3リットル(ペットボトルは賞味期限が2年近くあるので保存しやすい)	包装を開けすぐ食べられるもの(ビスケット・カン・缶・あめなど)
～約1週間後(電気が回復)	給水を受けるための容器(ポリタンクなど清潔でふたのできるもの)	レトルト食品、缶詰等(使い切りで、ゴミの出ないもの)

【 図書 】

○ 文部科学省基準蔵書数

小学校

学級数	蔵書冊数
1	2,400
2	3,000
3～6	3,000+520×(学級数-2)
7～12	5,080+480×(学級数-6)
13～18	7,960+400×(学級数-12)
19～30	10,360+200×(学級数-18)
31～	12,760+120×(学級数-30)

中学校

学級数	蔵書冊数
1～2	4,800
3～6	4,800+640×(学級数-2)
7～12	7,360+560×(学級数-6)
13～18	10,720+480×(学級数-12)
19～30	13,600+320×(学級数-18)
31～	17,440+160×(学級数-30)

※特別支援学級含む学級数

・ 学校蔵書数・充足率は、12月1日現在の数を記入。

【 理振 】

○ 理振基準金額

小学校	11,630,000円
-----	-------------

中学校	21,525,000円
-----	-------------

小学校：1組10,000円以上のものが対象

中学校：1組20,000円以上のものが対象

教育環境の実態調査

調査項目 学校名		ICT 環境												
		ICT 支援員	貸出用 Wi-Fi ルーター	図書館 システム	指導者用デジタル教科書									
					国語	算数 数学	理科	社会	英語	音楽	保健 体育	図工 美術	技術 家庭	他
山梨市	加納岩小	×	×	○ (学校独立型)	○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	日下部小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	後屋敷小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	日川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	山梨小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	八幡小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	岩手小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	笛川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	山梨南中				○	○	○	○	○	×	○	×	×	
	山梨北中				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	笛川中				○	○	○	○	○	×	○	×	○	
甲州市	塩山南小	○ (市教委配置)	○ (市教委貸出)	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	塩山北小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	奥野田小				○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	大藤小				○	○	○	○	○	○	×	×	×	有
	神金小				○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	玉宮小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	松里小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	井尻小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	勝沼小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	祝小				○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	東雲小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	菱山小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	大和小				○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	塩山中				○	○	○	○	○	○	×	○	○	
	塩山北中				○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
	松里中				○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
勝沼中	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有				
大和中	○	○	○	○	○	×	△	×	○					

※GIGAスクールにより一人一台端末及び無線LAN全校完備。

調査項目 学校名	ICT環境									
	電子機器の整備状況(台)									
	大型 テレビ	前 年 比 較	大型 モニター	前 年 比 較	実物 投影機	前 年 比 較	プロジェ クター	前 年 比 較	その他の機器(台)	
山梨市	加納岩小	0	—	19	○	8	○	3	—	
	日下部小	0	—	11	—	6	○	4	—	
	後屋敷小	0	—	7	—	3	○	2	—	
	日川小	0	—	7	○	6	○	2	—	
	山梨小	0	—	7	—	3	○	2	—	
	八幡小	0	—	8	—	3	○	3	—	
	岩手小	0	—	6	○	3	○	5	—	
	笛川小	0	—	4	—	2	○	3	—	
	山梨南中	0	—	12	—	4	○	6	—	
	山梨北中	0	—	15	○	6	○	4	—	
	笛川中	0	—	3	—	1	○	3	—	
塩山南小	塩山南小	17	○	4	○	8	—	1	—	アップルTV(1)/EZキャスト(7)
	塩山北小	5	○	6	○	1	—	1	○	
	奥野田小	8	—	0	—	1	—	2	—	
	大藤小	8	○	0	—	9	○	2	—	アップルTV(6)
	神金小	7	—	0	—	3	—	1	—	アップルTV(5)
	玉宮小	9	—	0	—	2	—	2	—	アップルTV(6)
	松里小	7	○	0	—	1	—	3	—	アップルTV(4)
甲州市	井尻小	7	—	0	—	7	—	1	—	アップルTV(6)
	勝沼小	6	—	4	○	3	—	2	▼	
	祝小	4	▼	3	○	5	○	2	—	ipod(1)
	東雲小	7	—	0	—	1	—	2	—	
	菱山小	3	—	1	○	2	—	2	—	クロームキャスト(4)
	大和小	7	○	0	—	6	—	2	—	
	塩山中	9	—	4	—	2	—	8	—	Ipod(1)アップルTV(1)
	塩山北中	5	—	0	—	1	—	2	—	アップルTV(1)
	松里中	6	—	0	—	2	—	2	—	アップルTV(2)
	勝沼中	6	▼	4	○	1	—	3	—	アップルTV(4)
	大和中	8	—	2	○	1	—	2	—	アップルTV(2)

調査項目 学校名		施設設備面			
		防災対応 ガラスの状況			
		教室・廊下	体育館	プール	その他
山梨市	加納岩小	○(強化・フィルム)	○(強化・フィルム)	○(フィルム)	全校舎飛散防止対応済
	日下部小	○(強化・フィルム)	○(強化・フィルム)	○(フィルム・網入)	
	後屋敷小	○(強化・フィルム)	○(フィルム)	○(フィルム)	
	日川小	○(強化・フィルム)	部分(強化・網入)	○(フィルム)	
	山梨小	○(強化・フィルム)	○(強化)	○(フィルム)	
	八幡小	○(強化・フィルム)	○(強化・フィルム)	○(フィルム)	
	岩手小	○(強化・フィルム・網入)	○(強化・フィルム・網入)	部分(強化)	プレハブ倉庫以外飛散防止対応済
	笛川小	○(強化・フィルム)	○(強化・フィルム)	○(フィルム・網入)	全校舎飛散防止対応済
	山梨南中	○(強化・フィルム)	○(強化・フィルム)	×	プール以外飛散防止対応済
	山梨北中	○(強化・フィルム・網入)	○(強化)	×	プール・プラトホーム以外 飛散防止対応済
笛川中	○(フィルム)	○(強化・フィルム・網入)	施設なし	全校舎飛散防止対応済	
甲州市	塩山南小	部分(強化・網入)	○(強化)	×	給食配膳室・トイレ(網入・一部) 渡廊下(網入)
	塩山北小	×	○(強化)	×	校舎玄関(網入)給食配膳室(強化)
	奥野田小	×	×	×	児童用玄関・エレベーター脇窓(強化)
	大藤小	×	部分(強化・網入)	×	保健室一部(強化) 児童玄関横(網入)
	神金小	×	○(強化)	×	
	玉宮小	×	○(強化)	×	校舎内一部(網入)
	松里小	×	○(強化)	×	本館玄関(網入)・新館
	井尻小	×	○(強化)	×	
	勝沼小	○(強化)	×	×	玄関・トイレ(網入)
	祝小	×	部分(フィルム)	×	職員室フィルム
	東雲小	○(強化)	×	×	
	菱山小	×	×	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部 網入
	大和小	部分(強化)	×	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部 網入
	塩山中	部分(強化・フィルム・網入)	○(強化)	部分(網入)	玄関・昇降口・東階段・教室ベランダ出入口・図書室・南館 出入口・パソコン室南側・保健室
	塩山北中	部分(強化・網入)	○(強化)	×	校舎玄関(網入)
	松里中	部分(強化・網入)	×	×	校舎玄関(網入)
	勝沼中	○(強化)	部分(強化)	施設なし	校舎玄関(強化)
大和中	部分(強化・網入)	部分(網入)	施設なし	生徒玄関・ランテルーム・職員用玄関(部分 網入)	

調査項目 学校名		施設設備面												
		空調設備												
		職員室	校長室	保健室	図書室	会議室	音楽室	理科室	図工室	家庭科室	普通教室	学級特別支援教室	P.C室	その他
山梨市	加納岩小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	日下部小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	後屋敷小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	日川小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	八幡小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	岩手小		○		○	△	○	×	×	×		○	○	配膳室・多目的室
	笛川小		○		○	○	○	○	○	○		○	○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨南中		○		○	○	○	○	○	○		○	○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	山梨北中		○		○	○	○	○	○	○		○	○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	笛川中		○		○	○	○	○	○	○		○	○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
甲州市	塩山南小		○		○	×	×	×	×	×		○	会議室	オープン教室
	塩山北小		×		×	○	×	×	×	×		○	その他	多目的室
	奥野田小		×		×	△	×	×	×	×		○	○	
	大藤小	○	○	○	×	△	×	×	×	×	○	○	○	
	神金小		○		×	△	×	×	×	×		○	○	
	玉宮小		×		×	×	×	×	×	×		○	○	
	松里小		×		×	×	×	×	×	×		○	○	
	井尻小		×		×	○	×	×	×	×		○	○	
	勝沼小		○		○	△	×	×	×	×		○	会議室	
	祝小		×		×	○	×	×	×	×		○	会議室	
	東雲小		×		○	×	×	×	×	×		○	○	
	菱山小		×		×	△	×	×	△	×		○	その他	給食室・調理員控室
	大和小		×		×	△	×	×	×	×		○	その他	
	塩山中		○		×	×	○	○	×	×		○	その他	多目的室・相談室(1・2)
	塩山北中		○		×	×	×	×	×	×		○	その他	相談室(A・B)・多目的室
	松里中		○		×	×	×	×	×	×		○	その他	相談室
	勝沼中		○		×	×	×	×	×	×		○	その他	多目的室
大和中		×		×	△	×	×	×	×		○	その他		

調査項目 学校名	施設設備面				危機管理対策					
	屋外設備		新JIS規格児童生徒用机 イス(設置学年を記入)		校内 緊急 通報 システム	電子メールによる 情報通報システム		敷地 周囲 フェンス 等設置	侵入者 用監視カ メラ	
	校庭 散水 施設	プールから 緊急連絡手段	新JIS 規格	天板のみ 交換・テンパネ		市教委 システム	その他システム (学校単位)			
山梨市	加納岩小	○	内線	×	1~4年	○	×	学校安心・安全メール	○	×
	日下部小	○	固定電話		1・2年	○			○	×
	後屋敷小	○	子機		1・2年	×			○	×
	日川小	○	子機		1~3年	×			○	×
	山梨小	○	固定電話		1・2年	×			部分	○
	八幡小	○	子機		1・2年	×			○	×
	岩手小	○	固定電話		全学年	×			○	×
	笛川小	○	子機		全学年	○			○	×
	山梨南中	○	職員携帯電話		全学年	×			○	×
	山梨北中	○	職員携帯電話		全学年	×			○	×
	笛川中	○	職員携帯電話		全学年	×			○	×
甲州市	塩山南小	○	学校携帯電話	全校新JIS規格設置		×	甲州市安心安全ネット	学校安心・安全メール	部分	×
	塩山北小	○	固定電話			×			部分	×
	奥野田小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	大藤小	○	子機			×			部分	×
	神金小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	玉宮小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	松里小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	井尻小	○	子機			×			部分	×
	勝沼小	○	内線			×			部分	×
	祝小	○	子機			×			部分	×
	東雲小	○	内線			×			部分	×
	菱山小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	大和小	×	学校携帯電話			×			部分	×
	塩山中	○	学校携帯電話			×			部分	○
	塩山北中	○	学校携帯電話			×			部分	×
	松里中	○	学校携帯電話			×			部分	×
	勝沼中	○	職員携帯電話			×			部分	×
大和中	×	学校携帯電話		×	部分	×				

調査項目 学校名	危機管理対策				図書				理振			
	災害時備蓄食料				図書費当初 予算額 (公費のみ) (千円)	文部科学 省基準蔵 書数 (冊)	学校蔵書 数(12月1 日現在) (冊)	学校蔵 書充足 率(12月 1日現在)	基準金額 (千円)	前年度末の 現有額 (千円)	前年度 末の現 有率 (%)	
	公費		保護者 負担	主な物品名								
	学校 配当 予算	他										
山梨市	加納岩小	×	×		988	8,760	10,882	124%	11,630	5,245	45%	
	日下部小	×	×	水・クラッカー	1,034	9,160	12,601	138%	11,630	5,059	43%	
	後屋敷小	○	×	クラッカー	807	7,960	9,498	119%	11,630	4,420	38%	
	日川小	×	×		583	6,520	8,369	128%	11,630	3,161	27%	
	山梨小	○	×	ライスクッキー	738	6,520	8,645	133%	11,630	5,270	45%	
	八幡小	×	×		574	6,520	8,565	131%	11,630	2,513	22%	
	岩手小	×	×		485	5,080	6,845	135%	11,630	4,180	36%	
	笛川小	×	×		592	6,520	8,353	128%	11,630	2,297	20%	
	山梨南中	×	×		1,434	12,640	15,685	124%	21,525	4,432	21%	
	山梨北中	×	×		1,169	12,640	14,792	117%	21,525	13,418	62%	
	笛川中	×	×		533	6,720	10,233	152%	21,525	12,314	57%	
甲州市	塩山南小	×	×	×	822	9,560	18,379	192%	11,630	3,500	30%	
	塩山北小	×	×	×	448	6,040	9,114	151%	11,630	4,150	36%	
	奥野田小	×	×	○	飲料水	360	6,040	10,476	173%	11,630	3,969	34%
	大藤小	×	×	○	飲料水・カンパン	354	5,080	7,797	153%	11,630	4,822	41%
	神金小	×	×	○	飲料水	287	4,560	8,219	180%	11,630	2,799	24%
	玉宮小	×	×	×		300	6,040	7,210	119%	11,630	3,158	27%
	松里小	×	×	×		373	6,520	9,702	149%	11,630	2,140	18%
	井尻小	×	×	○	飲料水・焼菓子	393	6,040	9,665	160%	11,630	3,186	27%
	勝沼小	×	×	×		524	6,040	9,681	160%	11,630	3,194	27%
	祝小	×	○	×	飲料水・焼菓子	415	5,560	7,453	134%	11,630	3,050	26%
	東雲小	×	×	×		576	6,040	9,096	151%	11,630	3,228	28%
	菱山小	×	×	×		250	5,560	7,542	136%	11,630	2,363	20%
	大和小	×	○	×	飲料水・カンパン	265	5,080	7,776	153%	11,630	3,504	30%
	塩山中	×	×	×		830	12,160	17,294	142%	21,525	14,852	69%
	塩山北中	×	○	×	飲料水・カンパン	347	6,080	9,456	156%	21,525	7,499	35%
	松里中	×	○	×	飲料水・フナバケツ	432	6,720	9,391	140%	21,525	12,114	54%
	勝沼中	×	×	×		550	9,040	12,180	135%	21,525	10,737	50%
大和中	×	×	×		289	6,270	6,902	110%	21,525	9,010	42%	

Ⅲ 子どもの生活実態に関する調査

1 調査のねらい

社会の変化が激しい時代における様々な教育問題を背景として、ここ数年、教育の根幹をなす家庭教育のあり方に視点を置いて調査を行ってきた。今年度は、子どもを対象に、

- ① 家庭での基本的な生活習慣の様子
- ② 子どもの心配や相談等
- ③ パソコンの有無や活用の様子
- ④ 自分の携帯電話やスマートフォン所持の様子
- ⑤ 休日の過ごし方

などについて調査した。

昨年度とほぼ同様の調査を行うことで、子どもの意識や行動・生活環境の実態や変化を知り、それらを地域・家庭・学校の連携や子どもの成長に役立てることができればと思う。

2 調査期間

令和3年11月29日(月) から 12月10日(金)まで

3 調査対象

東山梨地区内抽出校(小学校5校, 中学校4校)

- ・児童(小学3年生・小学6年生)
- ・生徒(中学2年生)

4 調査方法

質問紙調査

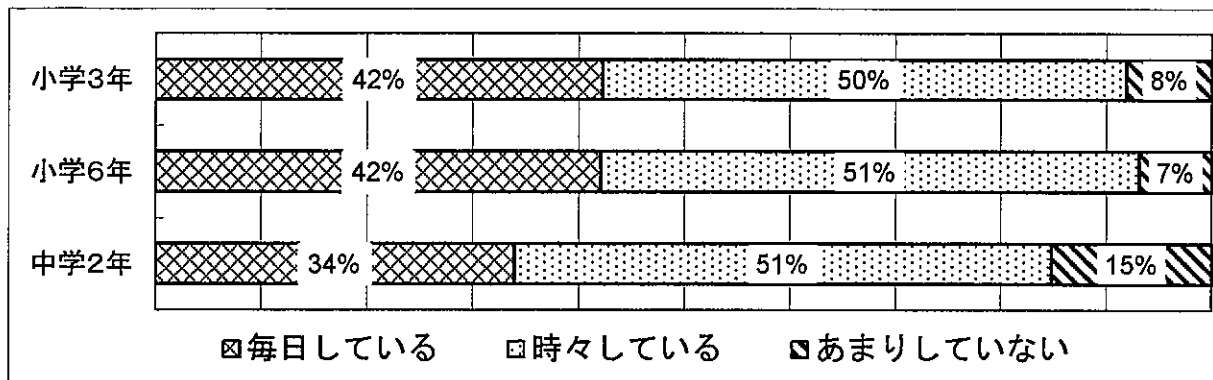
5 回答数

小学校3年の児童 123名
小学校6年の児童 145名
中学校2年の生徒 111名

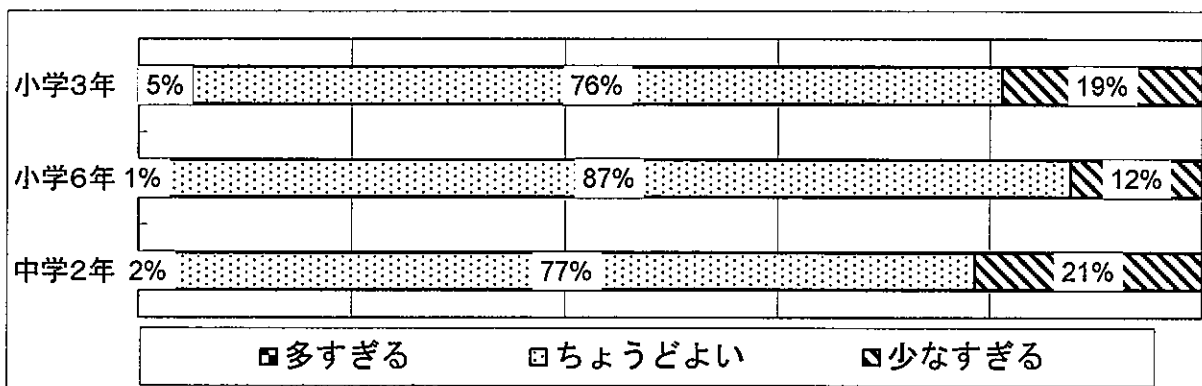
6 その他

- ・グラフ上の数値は割合を表す。
- ・理由等の記述内容をまとめて示す。

1 あなたは、家族の一員として、家のお手伝いをしていますか。



2 あなたは、今しているお手伝いについて、どう思いますか。



3 お手伝いについて、あなたの考えを書いてください。

小学3年

肯定的意見

- ・家でやっているけどまだ2個ぐらいできそう。
- ・とても楽しい。
- ・頼まれた時しかやってないからもっとやりたい。
- ・お手伝いが好き。家族が喜んでくれる。もっとしたい。
- ・お母さんが大変そうだから手伝う。
- ・畑仕事が好き。
- ・たくさんお手伝いしたい。
- ・ちょうどよいお手伝いの数だからこれからも続けたい。
- ・家族全員が楽になれるから。
- ・いつも母がお皿洗いをしているので手伝いたい。
- ・家族の時間が短くならないのでお手伝いはいっぱいしようと考えています。
- ・もうちょっと増やしていきたい。
- ・家族の一員だからお手伝いを時々でもいいからした方がいい。
- ・お母さん、お父さんはいつも忙しいから少しでも疲れが取れるようにお手伝いしたい。

中間的意見

- ・今のままでいいと思っている。
- ・毎日やると多すぎるから、ときどきちょうどいいくらいの手伝いをする。
- ・お手伝いをしていないので気をつける。
- ・お小遣いを貯めるために疲れたときでも頑張っている。
- ・ほんとうは、少しやりたくない。
- ・いっぱいしたいけど疲れて時々しかしてない。
- ・時間がなくてお手伝いがあまりできない。

否定的意見

- ・あまりできていない。
- ・好きじゃない。
- ・手伝いの時間が長い。

小学6年

肯定的意見

- ・食べているからしっかりお手伝いする。
- ・毎日やろうと思っている。
- ・僕にとってお手伝いは勉強。
- ・家族の助けになる。
- ・良い気持ちになる。
- ・自分仕事だからしっかりやる。
- ・大人になったときためになる。
- ・家族で協力するもの。親に楽させることができる。
- ・普段頑張っている親を手伝うのはあたりまえのこと。
- ・親の役にたててうれしい。
- ・家の人が喜んでくれるなら続けたい。
- ・自分の仕事があつていいと思う。
- ・もっとやりたい。

中間的意見

- ・面倒くさいけど将来役立つもの。
- ・任されている感じ。
- ・やらないといけないから。
- ・ちょうどよく続けられる。

否定的意見

- ・面倒くさい。
- ・つまらない。

中学2年

肯定的意見

- ・料理を手伝うと家族と交流する機会になる。
- ・いつもお世話になっているので少しでも負担を減らせたらと思う。
- ・家族の手伝いをするのが楽しい。
- ・自分も一緒に生活しているから手伝った方がいいと思います。
- ・家族の一員なので手伝えば親の負担が減る。親孝行になっている。
- ・親の手助けができて嬉しいし、家族のためにもなるし、自分のためにもなる。
- ・全てを親頼みにしないで、手伝ったほうが親も楽になる家族の負担を減らせるいいこと。
- ・手伝いをすることによって、手伝いをしてもらった人も喜ぶのでいいと思う。
- ・親の負担を減らすこともできるからしたほうがいい。
- ・家族として当たり前。歳とか関係なく手伝ってくれると優しいと思う。
- ・家族のためにもするべきだと思う。
- ・自分の将来のためにもやったほうが良い。

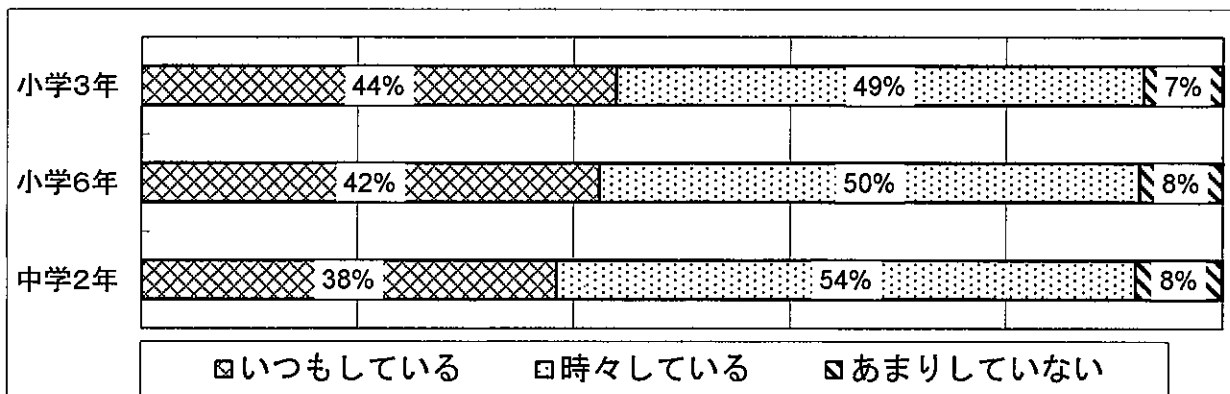
中間的意見

- ・毎日たくさんするのはなく、少しずつ継続していけると良いと思う。
- ・少しは手伝いたいと思う。
- ・できる時間にやったほうが良い。

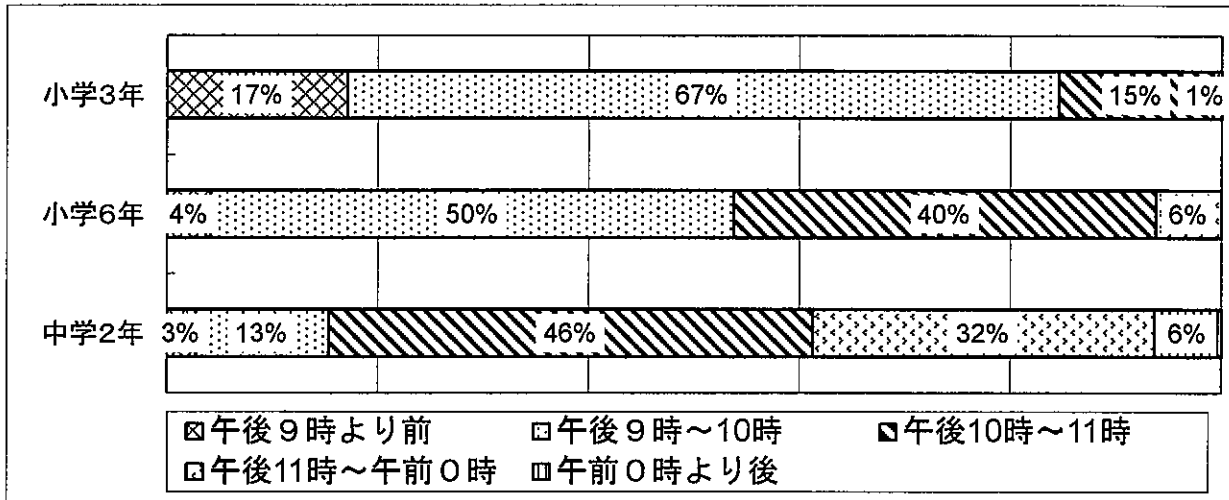
否定的意見

- ・少し面倒くさい。
- ・しなくてもいい。

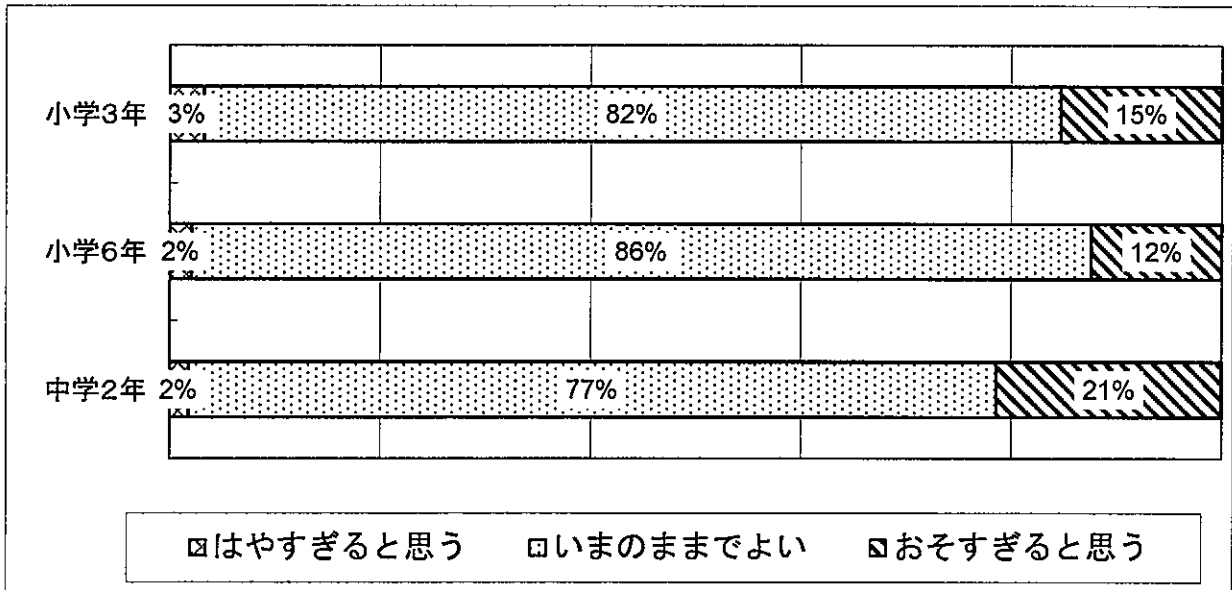
4 身の周りのこと(お手伝いではなく)で、自分でできそうなことは自分でしていますか。



5 ふつうの日は、何時ごろ寝ますか。



6 あなたの寝る時刻について、どう思いますか。



小学3年

「はやすぎると思う」の理由

- ・本が読めない。
- ・早寝早起きをしたい。
- ・朝起きる時間が早いから。

「おそすぎると思う」の理由

- ・朝ぼんやりしてあまり元気がないから。
- ・テレビを見ていたりして9時に寝るはずが11時になっているから。
- ・読書をしているから。
- ・習いごとがあるから。
- ・スマホの見過ぎ。

小学6年

「はやすぎると思う」の理由

- ・みんなは10時ごろまで起きているのに、きめられた寝る時間がはやいから。
- ・授業中眠くなることあるから。

「おそすぎると思う」の理由

- ・メディアを使うようになった。
- ・塾や習い事、宿題をやって遅くなってしまう。
- ・早く寝たいと思ってもなかなか眠れない。
- ・朝の時間が少ないから。（朝、起きるのが遅いから）

中学2年

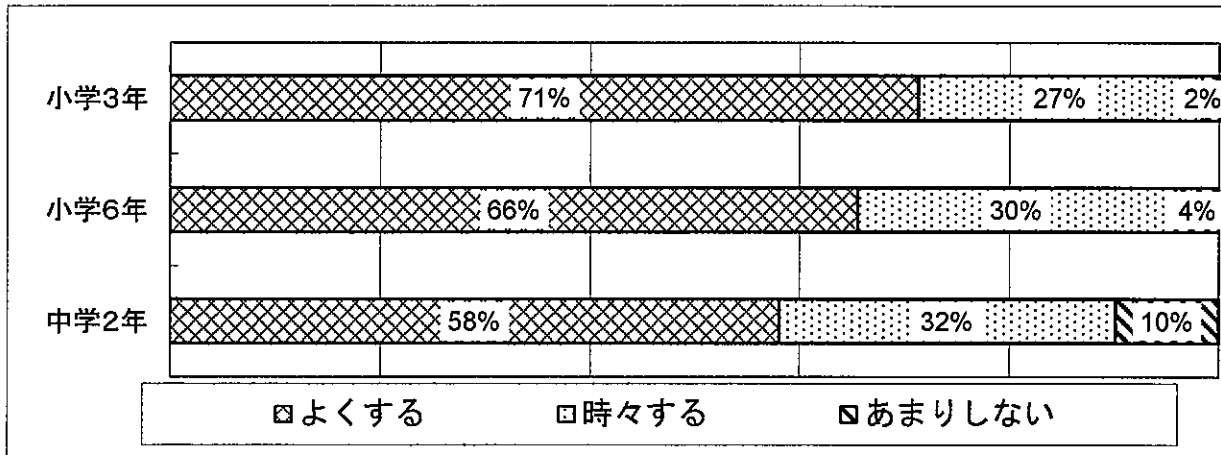
「はやすぎと思う」の理由

- ・平日は疲れて眠くなってしまう。
- ・他の人はもっと遅く寝ているから。

「おそすぎと思う」の理由

- ・スマホをずっと使っている。
- ・塾などで遅くなったり、テレビをみてしまう。
- ・自分の時間を取りすぎている。
- ・最近10時半を超える時がある。

7 あなたは、学校の様子や友だちのこと、家族のことなどについて、家の人とよく話をしますか。



小学3年

「あまりしない」の理由

- ・わからない。

小学6年

「あまりしない」の理由

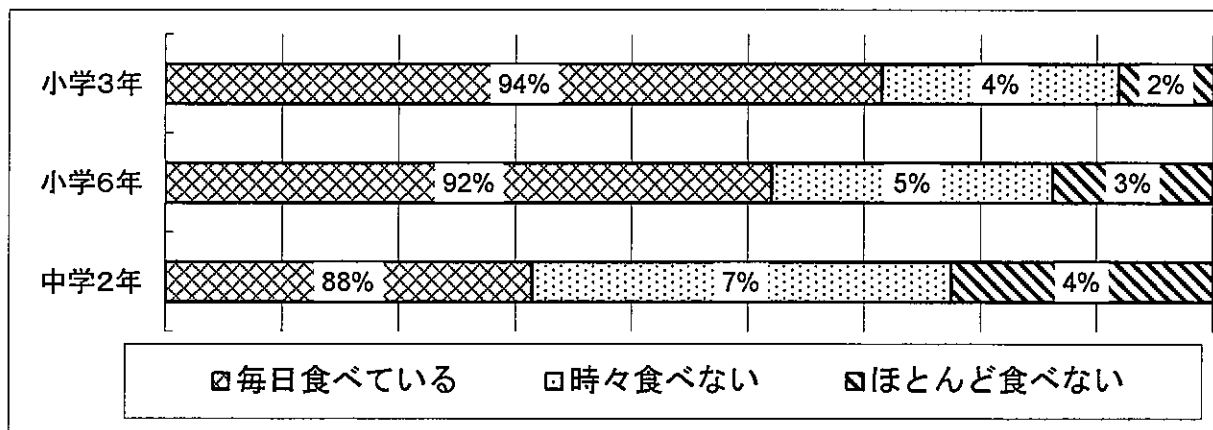
- ・する話がない。
- ・話す時間が合ったらゲームをしたい。
- ・話したくない（めんどくさい）から。

中学2年

「あまりしない」の理由

- ・話の話題があまりない。
- ・自慢みたいになりそうだから。
- ・部屋にいることが多い。
- ・うるさいから。
- ・仕事で家にいない。
- ・仕事の話ばかりしている。

8 あなたは、ふだん朝食を食べますか。



小学3年

「時々食べない、ほとんど食べない」の理由

- ・寝坊する。
- ・起きるのが遅い時があり、飲み物くらいしか飲めない。

小学6年

「時々食べない、ほとんど食べない」の理由

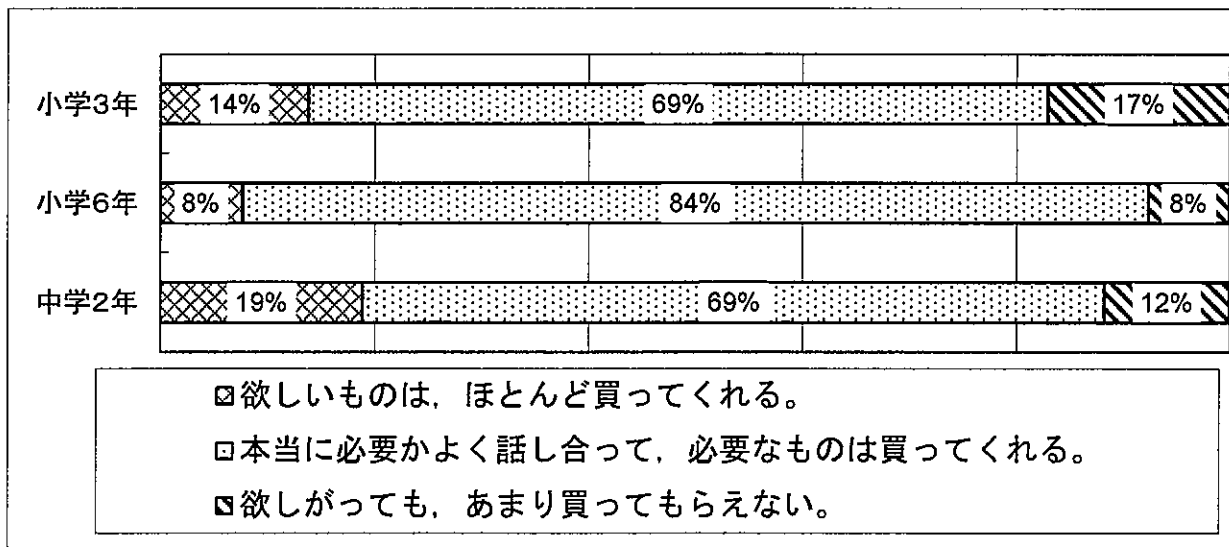
- ・祝日や休みの日は朝遅くまで寝ているので朝ご飯を食べない。
- ・時間がなかつたりおなかがすいていないから。
- ・おなかが痛い。
- ・作る時間がないときがあるから。

中学2年

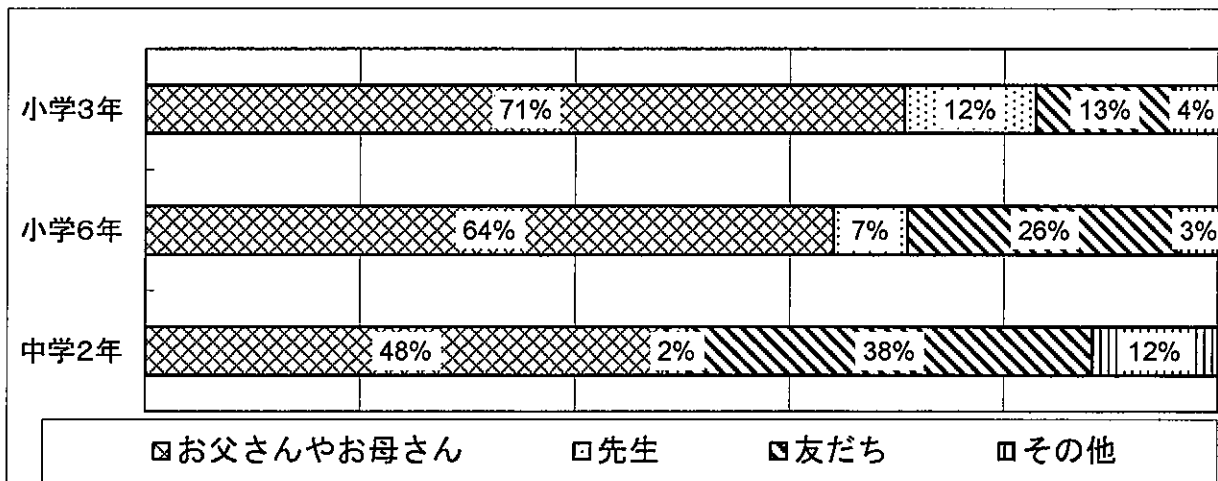
「時々食べない、ほとんど食べない」の理由

- ・食べる時間がない。
- ・食べる気にならない時がある。
- ・起きる時間が遅い。時間がなくなってしまう。
- ・1分1秒でもベッドの中にいたい。

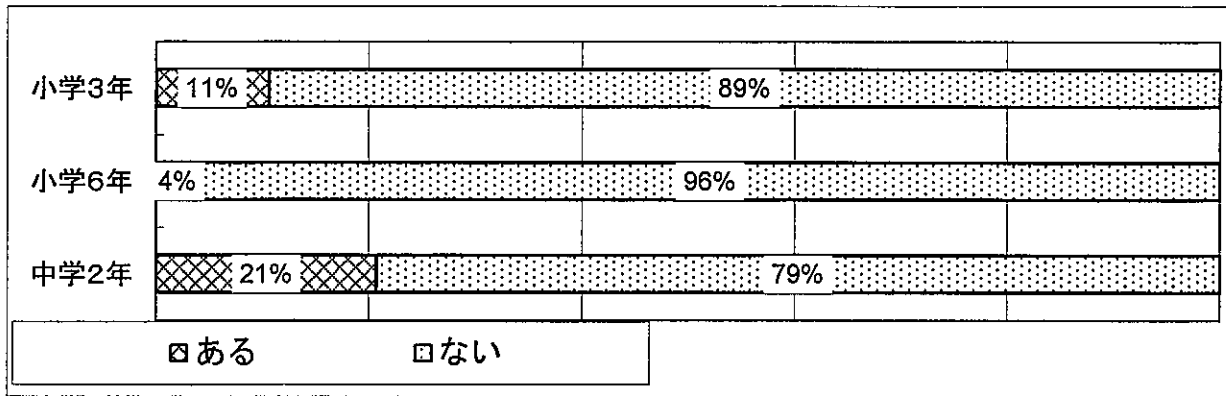
9 あなたは欲しいものがあるとき、家の人はどうしてくれますか。



10 あなたは、何かこまったことがあったとき、主にだれに相談しますか。



11 あなたは、今心配なことや悩みごとがありますか。



◎「ある」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

- ・友だちが嫌なことをする。
- ・コロナウイルスがあるのに、マスクをしない人がいるから心配。不安を感じる。
- ・悪口を言ってくる人がいる。
- ・最近、寝るとき起きたり寝たりが続いて少し寝れないです。
- ・人に何かしたかもと思ってしまうから。
- ・冷たいことを言われたり、冷たい言い方をされたりするから。

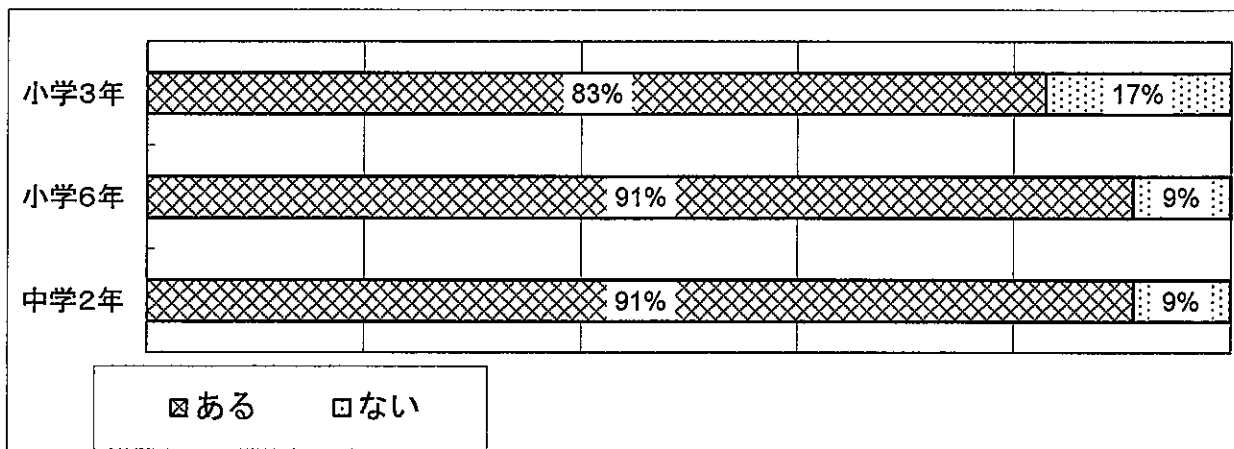
小学6年

- ・クラスの事。
- ・受験の事。
- ・友達がグループのようなものを作っていて仲間に入りにくい。
- ・ミニバスでからかわれている。
- ・中学での部活のこと。

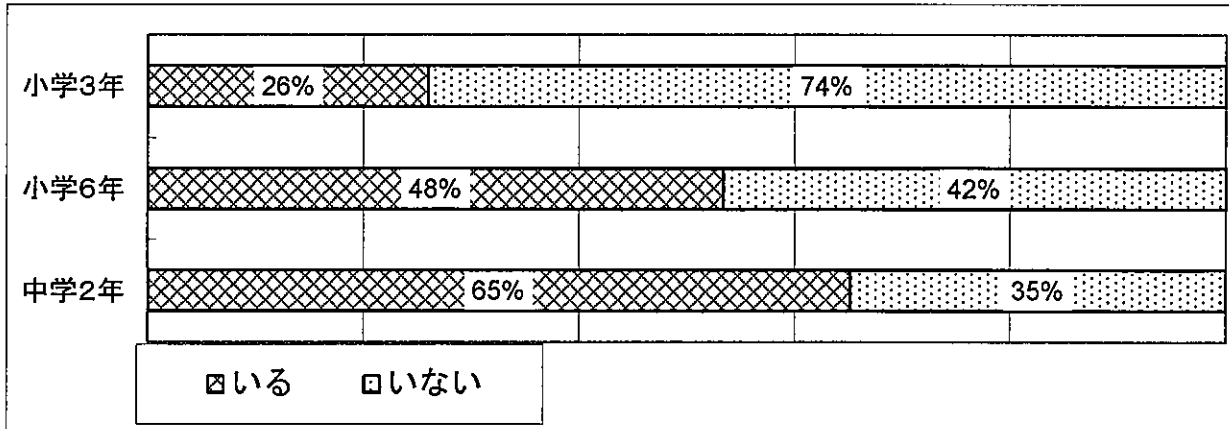
中学2年

- ・高校進学について教室にいたくない。
- ・勉強についていけるか将来が心配。
- ・やらなければならないことがすぐできない。
- ・勉強のやる気が全くない。
- ・勉強と習い事について。

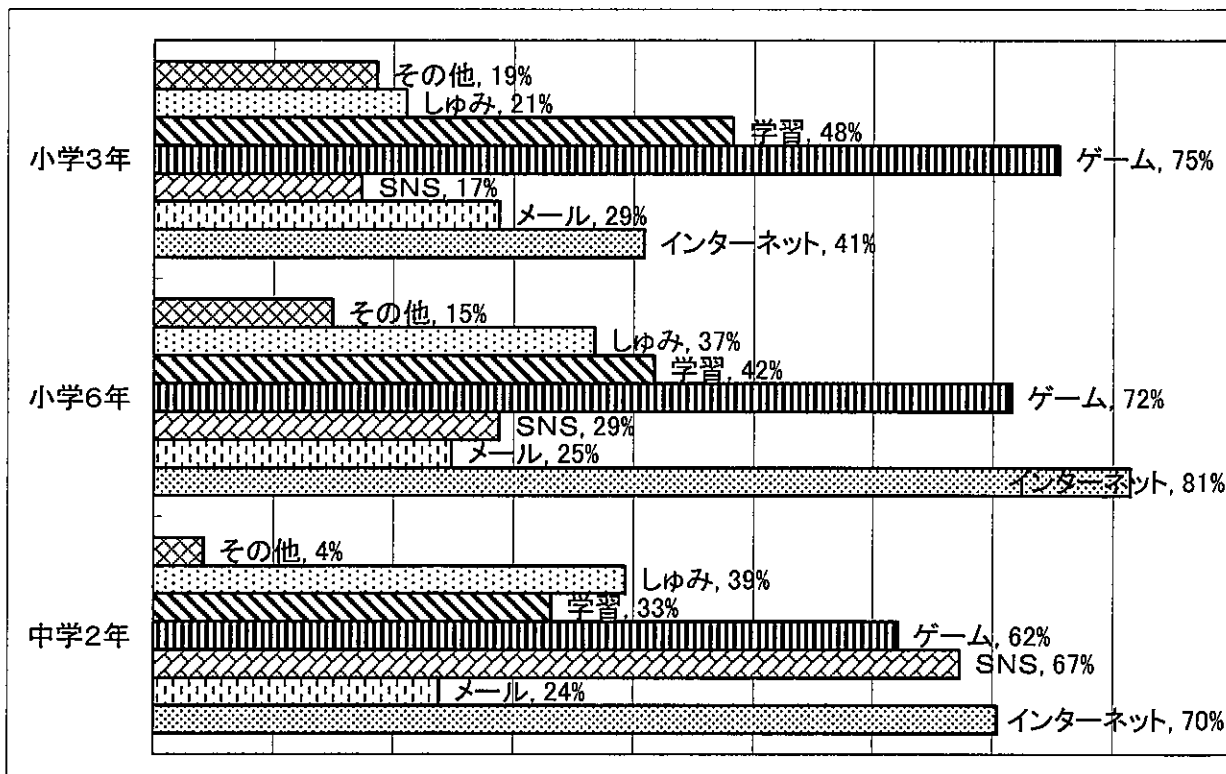
12 あなたの家には、パソコンがありますか。



13 あなたは、家でパソコンを使っていますか。



14 あなたは、家のパソコン・タブレットやスマートフォン・携帯電話をどんなことに使っていますか。(3つまで)



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

- ・電話
- ・ニュース
- ・検索
- ・youtube
- ・カメラ
- ・動画

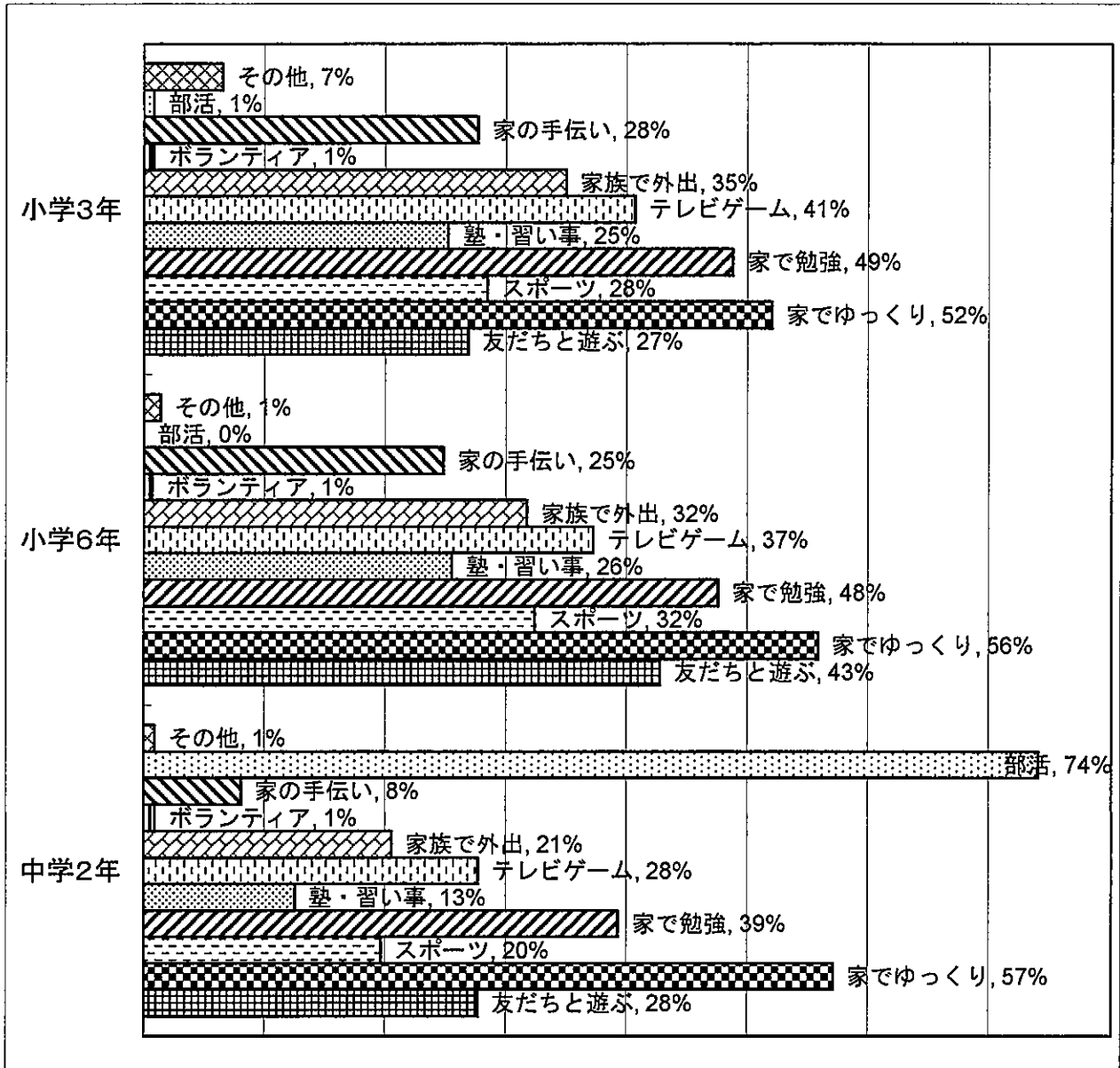
小学6年

- ・電話
- ・学習道具
- ・youtube
- ・カメラ
- ・カカオトーク
- ・音楽を聴く
- ・連絡

中学2年

- ・youtube

15 あなたは、土曜日・日曜日・祝日には、何をしていますか。



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

- ・ペットと遊ぶ。

小学6年

- ・おばあちゃんの家に行く。

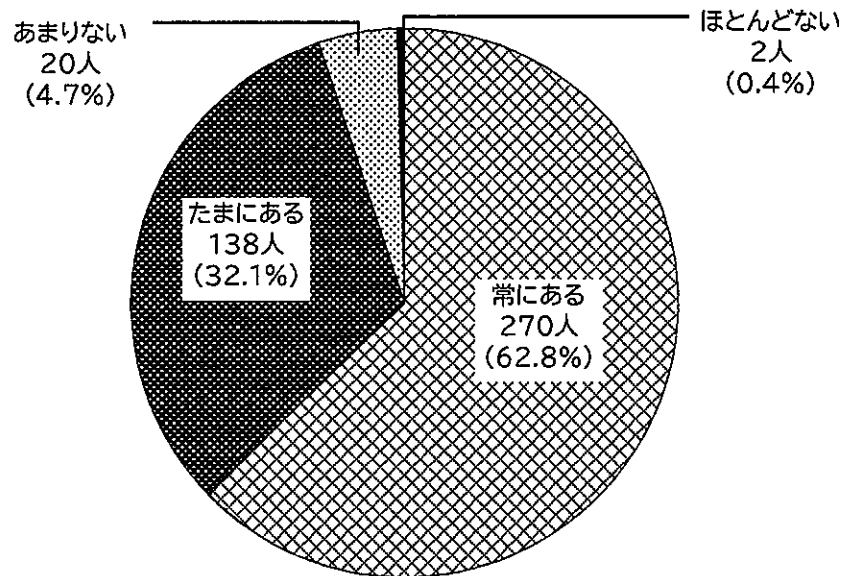
中学2年

- ・読書をする。

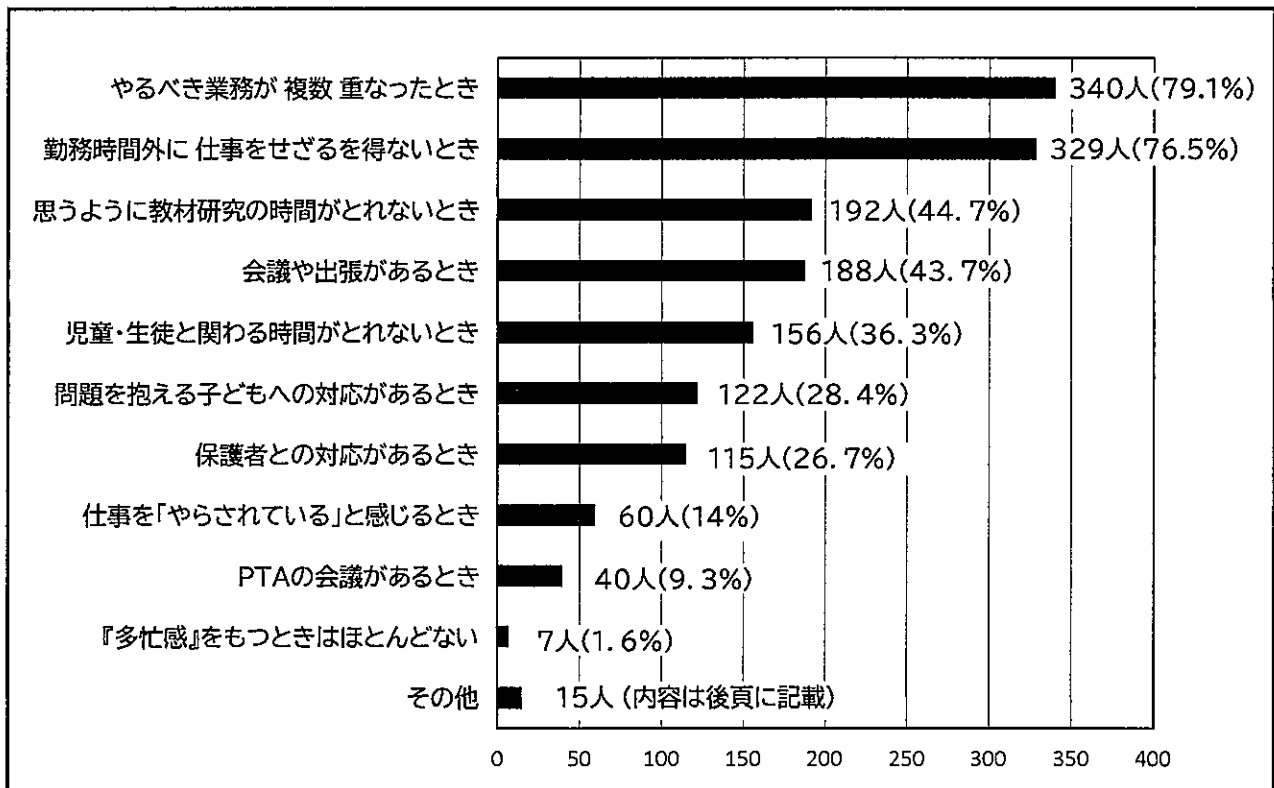
IV 教職員の健康と労働
「多忙感」に関する調査結果

調査年月 2021年12月
調査対象 東山梨全教職員
回答数 430人

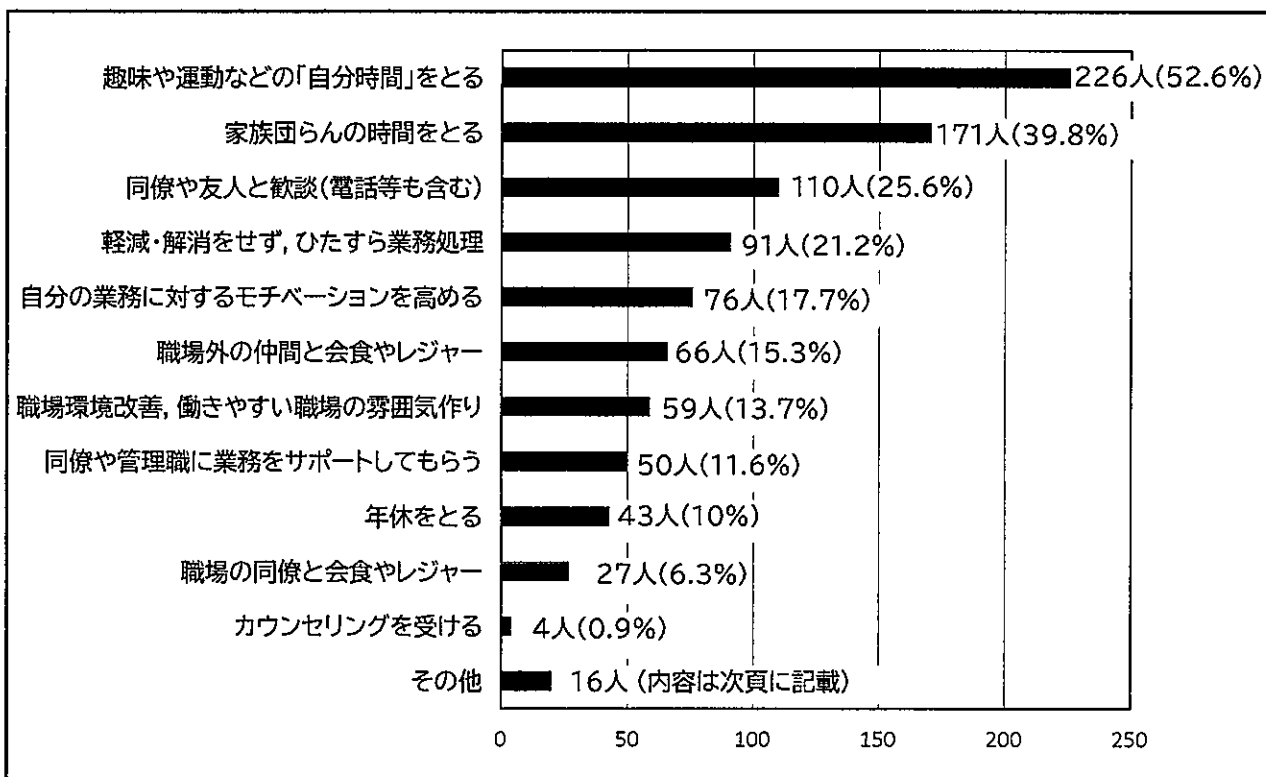
1. あなたは、勤務の中に「多忙感」をもつことがありますか。(1つのみで回答)



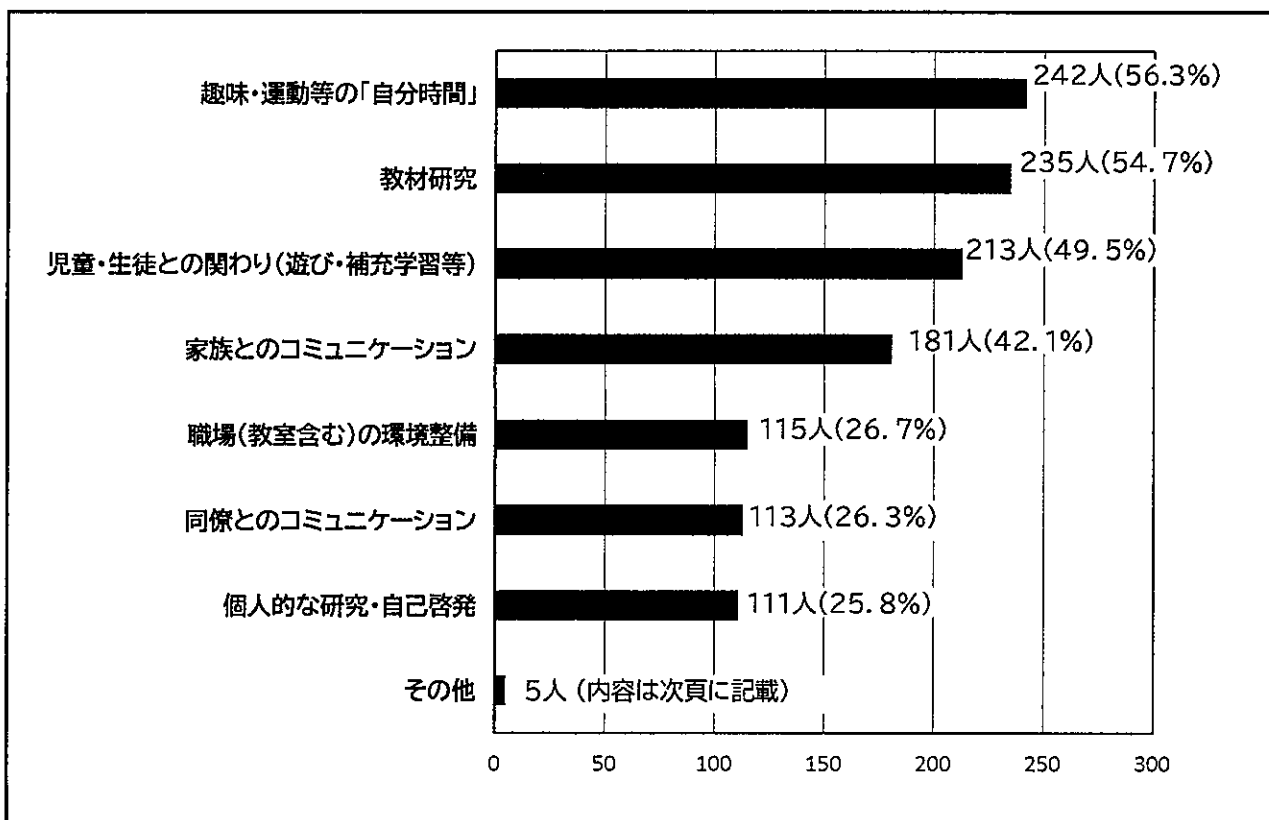
2. 勤務において「多忙感」をもつときは、主にどんなときですか。(回答数自由)



3. あなたは、どのようにして「多忙感」を軽減あるいは解消していますか。(回答数自由)



4. 「多忙感」が解消されたら、その分 充実させたいことは何ですか。(回答数自由)



※「その他」の項目に記載された回答

2. 勤務において「多忙感」をもつときは、主にどんなときですか。(回答数自由)

- 研究会の業務が勤務時間外にあるとき。
- 会議などを企画するとき。
- 仕事をしているのに終わらない事が続くとき。
- リモート授業の準備。
- 休憩が取れない、常に緊張していないといけない。
- 業務上のミスをして、自分に余裕がないと感じた時。
- 自分の子どもの行事に参加できない時。
- 仕事量に不公平感があるとき。
- 校内業務と校外業務が重なったとき。
- 会長や部長などの役を担い、会議開催や関係機関と調整するとき。
- 日々、文書やメールがたくさん届き、メールは添付ファイルを印刷したり、保存したり、その処理だけでも、大変負担に感じるため。
- 仕事をしているのに終わらない事が続くと多忙感が高まります。
- 予定にない仕事が入るとき。

3. あなたは、どのようにして「多忙感」を軽減あるいは解消していますか。(回答数自由)

- 業務の見直し、効率化を図るように努める。
- 趣味の時間をとったり、業務見直しを行なっているが多忙感はなかなか取れない。
- 多忙感を感じていない。
- ひたすら業務をこなす。
- 好きなことをする。運動する。
- 一人でお酒を飲む。
- 時間外勤務をして、時間に余裕を持つ。
- 特に多忙感を解消するために何かをする必要性を感じない。
- 早起き。
- 飲酒 睡眠。
- コロナ禍のため、正直出掛けることができずストレスが溜まり、心が折れている。
- なるべく、土日など仕事を持ち帰らない。
- すべてに完璧を求めない。
- 家族に愚痴を言う。

4. 「多忙感」が解消されたら、その分 充実させたいことは何ですか。(回答数自由)

- 睡眠。
- 休息、ぼーっとする。
- 休養、ゆっくり休みたい。

教育環境研究特別委員会

研 究 を 終 え て

本年度も東山梨の教育環境の研究にあたり、資料収集のためのアンケート調査を実施いたしました。各市教育委員会事務局の皆さまをはじめ、多くの先生方にご協力をいただき調査研究が進みました。

調査内容につきましては、今までの研究成果を継続し、その実態や意識の変容が読み取れるよう、例年とほぼ同様の構成となっています。

調査結果からは、児童生徒を取り巻く教育環境や生活環境の状況や変化の様子、教職員の実態や考えを読み取ることができます。また、多様化する今日的な教育課題に対して、教育に携わる人たちの努力や工夫も伝わってきます。

しかし、社会状況の変化を受け、我々の教育環境には、まだまだ取り組まなければならない課題が山積しています。この調査研究が今後の東山梨教育推進のための一助となることを願っています。

結びに、この研究収録の作成にあたり、ご尽力及びご協力いただきました多くの皆さまに、心より感謝申し上げます。

2021年度 教育環境研究特別委員会 委員長 倉田 憲一

2021年度 教育環境研究特別委員会 委員名簿

○ 校長会	倉田 憲一	(山梨北中)
	深澤 勉	(岩手小)
	井上 有史	(玉宮小)
	清水 岳人	(松里中)
○ 教頭会	武井 俊文	(山梨南中)
	小林 誠治	(笛川中)
	三森 敏彦	(祝小)
	出羽 勝頼	(井尻小)
○ 事務職員	雨宮 美沙	(笛川小)
	内藤 ひとみ	(山梨小)
	高橋 知也	(奥野田小)
	初鹿 亮太	(大藤小)
○ 職場の民主化	雨宮 正	(奥野田小)
	今澤 比呂樹	(日川小)
○ 事務局	前田 大輔	(塩山中)
	金森 淳	(塩山北中)